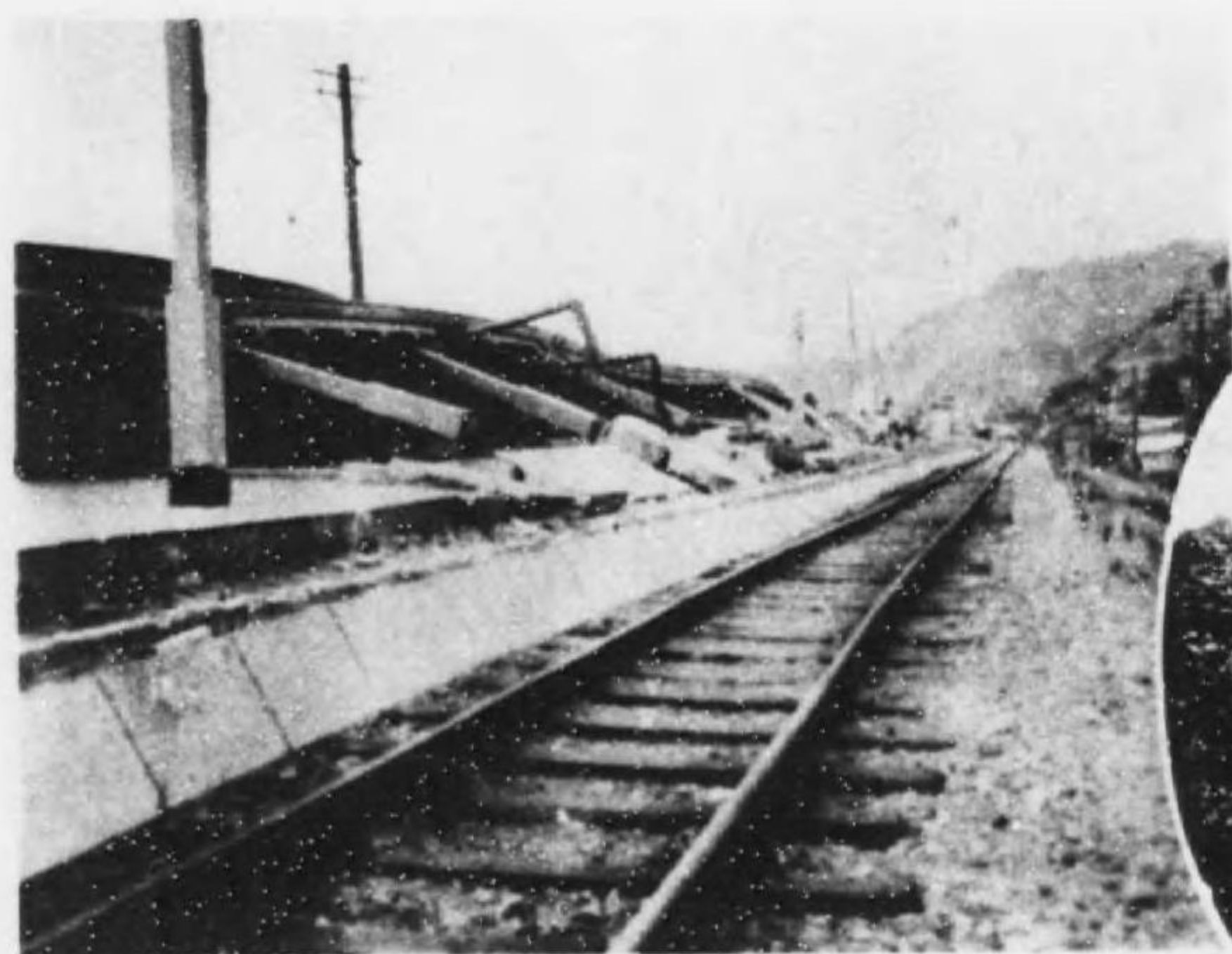


熱海線早川驛の惨状



熱海線根府
川驛の惨状



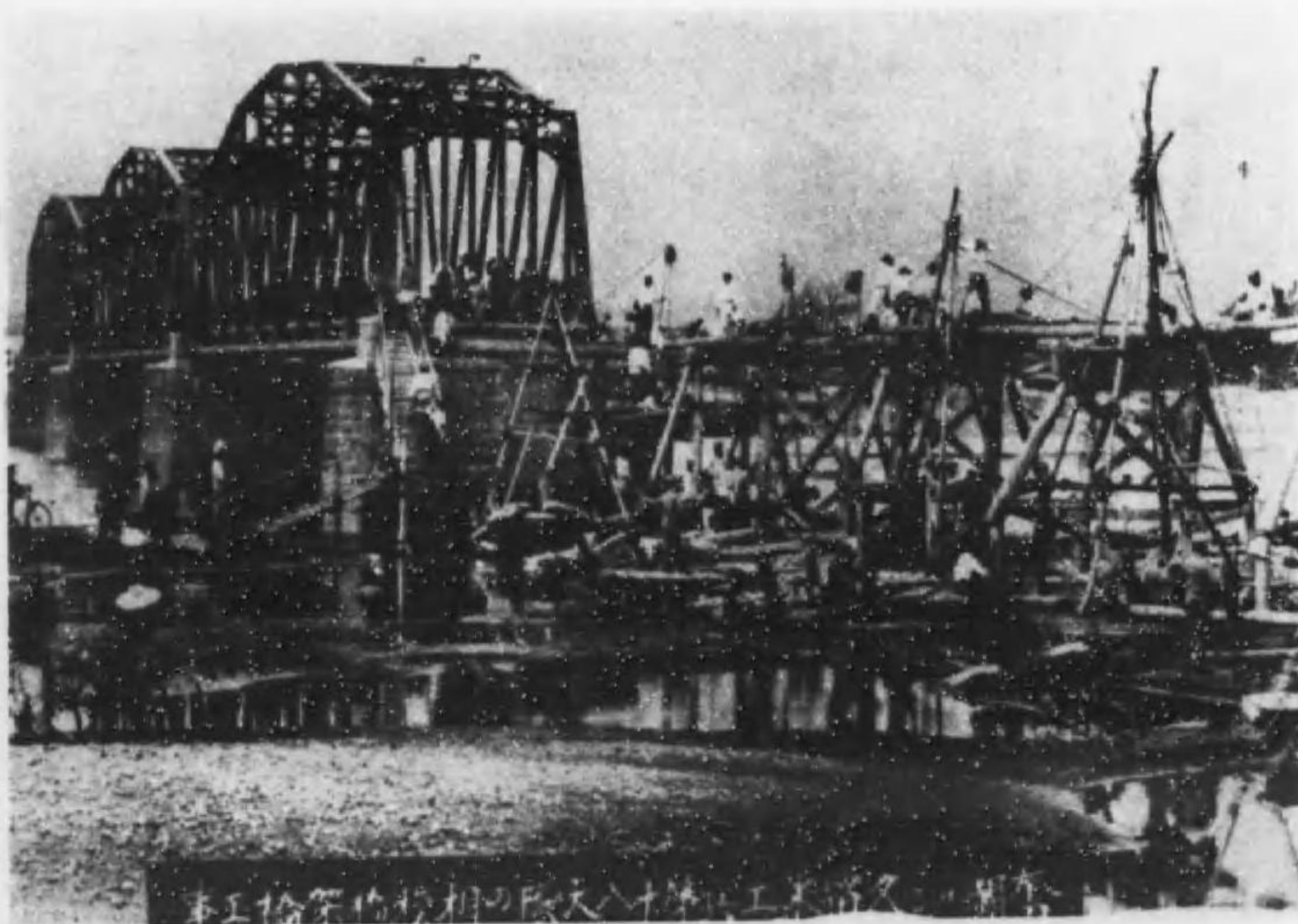
箱根湯本停留場附近の惨状



(裂龜大の面路) 状惨の町木厚



(中業作隊大八十第兵工) 事工舊復落壁端兩橋模相町木厚



本編 目次

第一編 災害の状況 一

第一章 震災の前後 一

第二章 震火災の惨状概観 八

第三章 震災時に於ける一般の状況 一八

第一節 加賀町警察署管内 一八

第二節 伊勢佐木町警察管内 二五

第三節 戸部警察署管内 三〇

第四節 壽警察署管内 三二

第五節 山手本町警察署管内 三五

第六節 神奈川警察署管内 三五

第七節 横濱水上警察署管内 三八

第八節 日下警察分署管内 三〇

目次

第九節	戸塚警察署管内	二二二
第十節	鎌倉警察署管内	二二三
第十一節	横須賀警察署管内	二二三
第十二節	浦賀警察分署管内	二二七
第十三節	葉山警察署管内	二四〇
第十四節	三崎警察分署管内	二四四
第十五節	藤澤警察署管内	二四七
第十六節	溝警察分署管内	二六〇
第十七節	大磯警察署管内	二六一
第十八節	伊勢原警察分署管内	二六五
第十九節	秦野警察分署管内	二七〇
第二十節	小田原警察署管内	二七一
第二十一節	松田警察署管内	二八七
第二十二節	厚木警察署管内	二九〇
第二十三節	中野警察署管内	二九四

第二編 警備及救護施設の概要

第一章	概 説	三〇三
第二章	戒嚴令の施行	三〇八
第三章	臨時震災救護事務局神奈川縣支部の設置	三一一
第四章	大臣の震災地視察と後藤警保局長の警備上に関する訓示	三二三
第五章	警備事務	三二五
第一節	震災直後に於ける警察官の活動	三二五
第二節	警 備 配 置	三三一
第三節	警察署の激勵及署長會議	三三三
第四節	郡部震災地の視察及警察署の督勵并慰問	三三九

第五節 震災警備上の施設

- 一、警備の人的施設
 - イ、警察官の來援……………三三三
 - ロ、警察官の増員……………三三三
 - ハ、増員に伴ふ施設……………三三九
 - ニ、警察分署警部出張所及警部補派出所の増設……………三六〇
 - ホ、監察官の特設……………三六〇
- 二、警備の物的設備
 - イ、警察廳舎其他の設備……………三六一
 - ロ、警察電話……………三六一
 - ハ、自動車及自轉車……………三六一
 - ニ、警備船……………三六一
 - ホ、警察官の装具……………三六一
 - ヘ、短銃……………三六三
- 三、其他の警備施設……………三六三

- イ、密行警戒……………三六三
- ロ、非常召集……………三六三
- ハ、關係方面との連絡……………三六四
- ニ、騎馬巡查の設置……………三六四
- 第六節 刑事警察上の施設……………三六四
- 第七節 保安警察上の施設……………三六七
- 一、奸商の取締……………三六八
- 二、電燈の復舊……………三七一
- 三、道路、溝渠の燒殘物件除却……………三七七
- 五、横濱市内の交通取締……………三八〇
- 六、全市内の乗合自動車營業の許可……………三八〇
- 七、全市内人力車賃錢の取締……………三八〇
- 八、旅券事務……………三八一
- 九、大工其他入夫賃銀の取締……………三八一
- 三〇、貸座敷、料理店の取締……………三八一

二、湯屋の假建築許可……………三六一

三、宿屋、貸座敷、興行場の假建築許可……………三六一

三、興業の取締……………三六一

四、一般假建築取締……………三六一

五、火薬の取締……………三六三

六、火災の豫防……………三六三

七、寄附金募集の取締……………三六四

八、遺失物の取扱……………三六四

九、諸營業場の建物検査……………三六五

第六章 検問所の設置……………三六五

第七章 流言蜚語及自警團の取締……………三六八

第一節 概 説……………三六八

第二節 流言蜚語の取締……………四〇一

第三節 自警團の取締……………四〇三

第八章 經濟關係其の他の諸問題……………四〇七

第一節 概 説……………四〇七

第二節 支拂猶豫令……………四〇九

第三節 銀行手形交換の開始……………四一三

第四節 郵便貯金の拂出……………四一八

第五節 火災保険金問題……………四一九

第六節 震災町村の救済運動……………四四四

第九章 救済及保護……………四四七

第一節 食糧の供給……………四四七

一、概 説……………四四七

二、組織變更及引繼狀況……………四五一

三、食糧配給成績……………四五二

第二節 飲料水の供給……………四五四

一、概 説……………四五四

二、横濱市の水道復舊工事及通水狀況……………四五五

三、給 水……………四六三

第三節 避難民の輸送……………四六九

一、汽車の無料輸送……………四六九

二、船舶又は軍艦に據る避難民の輸送……………四七〇

第四節 朝鮮人の保護……………四七三

一、朝鮮人保護の概況……………四七三

二、朝鮮人保護の一例……………四七七

三、個人の朝鮮人保護の一例……………四八四

第五節 外國人の保護……………四九〇

一、概 説……………四九〇

二、縣外事課の應急措置……………四九一

三、外國人の避難……………四九一

四、外國人の保護……………四九二

五、外國人に對する配給……………四九二

六、外國人傷病者の救護……………四九五

七、海外救護團の狀況……………四九六

第十章 憲兵隊警備隊其の他の狀況……………五〇一

第一節 憲兵の配置及活動狀況……………五〇一

第二節 戒嚴令の撤廢と東京警備司令部の設置……………五〇四

第三節 救 援 隊……………五〇八

一、海 軍……………五〇八

二、陸 軍……………五一八

三、各廳府縣の救援……………五一九

四、在郷軍人會の應援……………五二〇

五、青年團の應援……………五二三

六、海員組合義勇團の應援……………五二三

七、僧侶の應援……………五三三

八、外國の應援……………五三四

第十一章 警察官の功績及遭難……………五三七

第一節 警察官及其家族の遭難……………五三七

第三編 各警察署に於ける救護及施設概要

第一章 應急處置

第一節	加賀町警察署	五五
第二節	伊勢佐木町警察署	五六
第三節	戸部警察署	五七
第四節	壽警察署	五八
第五節	山手本町警察署	五九
第六節	神奈川警察署	六〇
第七節	横濱水上警察署	六一
第八節	日下警察分署	六二
第九節	戸塚警察署	六三
第十節	鎌倉警察署	六四
第十一節	横須賀警察署	六五
第十二節	浦賀警察分署	六六

第十三節	葉山警察署	六七
第十四節	三崎警察分署	六八
第十五節	藤澤警察署	六九
第十六節	溝警察分署	七〇
第十七節	大磯警察署	七一
第十八節	伊勢原警察分署	七二
第十九節	秦野警察分署	七三
第二十節	小田原警察署	七四
第二十一節	松田警察署	七五
第二十二節	厚木警察署	七六
第二十三節	中野警察署	七七
第二十四節	鶴見警察署	七八
第二十五節	川崎警察署	七九
第二十六節	高津警察分署	八〇
第二十七節	都田警察署	八一

第二章 各警察署に於ける施設の一端

第一節	加賀町警察署	七三
第二節	伊勢佐木町警察署	七三
第三節	戸部警察署	七三
第四節	山手本町警察署	七三
第五節	壽警察署	七三
第六節	日下警察分署	七三
第七節	鎌倉警察署	七三
第八節	横須賀警察署	七三
第九節	浦賀警察分署	七三
第十節	三崎警察分署	七三
第十一節	大磯警察署	七三
第十二節	小田原警察署	七三
第十三節	松田警察署	七三
第十四節	厚木警察署	七三

第四編 陸海軍の警備及救護

第一章 陸軍の活動

第十五節	伊勢原警察分署	七三
第十六節	秦野警察分署	七三
第十七節	溝警察分署	七三
第十八節	川崎警察分署	七三
第十九節	高津警察分署	七三
第一節	陸軍の出兵	七五
第二節	陸軍活動の一般状況	七九
第三節	各工兵隊(鐵道隊、電信隊共)の活動	七九
一、工兵部隊の事業		七九
二、電信隊の事業		七九
三、鐵道隊の事業		七九
四、鐵道隊工事概要		七九

五、其他陸軍側の救援……………七九

第二章 海軍の活動……………八〇

第一節 鎮守府及關係官衙の活動……………八〇

第二節 震災に因る艦船部隊の行動……………八〇

第三節 横須賀戒嚴司令部の狀況……………八〇

第四節 警備……………八一

第五節 救護物件横濱方面の陸揚……………八一

第六節 救護物件横須賀方面の陸揚……………八二

第七節 徴發……………八二

第八節 避難者の輸送……………八二

第五編 地震と氣象……………八五

第一章 地震……………八五

第一節 關東大地震の概況……………八六

第二節 横濱地方の地震……………八五

第三節 一月十五日朝の強震……………八三

第二章 震災當時の氣象……………八五

第一節 震、火災當時の天氣の變遷……………八五

第二節 横濱の旋風……………八四

第三節 小田原の旋風……………八五

第四節 其他の地方の旋風……………八五

第五節 旋風に關する小結論……………八五

第六編 雜錄……………八九

第一章 大震災に對する警備救護其他に關する各家の所見……………八九

(一) 震災の体験より非常時に處する方策に關する所見……………(警視部警視田邊保皓氏)……………八九

(二) 非常變災と警察……………(大坂府警視中野與吉郎氏)……………九七

(三) 大震災に處する警察設備に就て……………(神奈川縣警視西坂勝人氏)……………九八

第三章 大震災被害表……………(十數表)……………一〇四

第四章 震災當日の警察職員……………一五五

目次……………一五

例言

一、本書は大正十二癸亥年九月一日（土曜日）午前十一時五十八分神奈川、東京、静岡、千葉の一府三縣を襲ひたる大震災に於ける本縣下の被害状況を記述せるものなり。

一、本書の如きものを編輯するには特設の機關を置き専任者をして之れに當らしむるにあらざれば殆んど完全なる成果を收め難きものなるに諸種の事情の下に右様爲し能はず震災當時廳内全般を擧げて被害調査、警備、救護の事に執掌せる際偶々警察部高等課が情報通報の任に當りし關係上所謂其の後始末として本書を編輯する次第なり

一、縣下に於ける被害は横濱市及横須賀市を最大として郡

部に於ては小田原、鎌倉等の湘南地方を甚しとす而して
是等最大被害の土地の惨狀に就ては更に詳細に記述し置
き度き希望なりしも其の土地の全部或は大半が焦土に歸
したる關係上精細なる資料を得ることの不可能なりしと
又本書の完成を取急ぎたるに依り不本意ながら全面満
罅の譏は之れを甘受す。

一、惨狀の寫眞は凡く之れを蒐集する希望なりしも物資の
缺乏せる混亂時代のこことて思ふに任せず漸く集めたる
少數の内より僅に抽出せるものを巻頭に掲げたるものな
り。

一、救護及衛生上の施設情況に關する事項は縣衛生課に於
て別に編輯する所あるを以て本編は之を省く。

一、主として本書編輯に當りたるは高等課長西坂(勝人)警
視、同課員田邊(橘之助)警部補及同課員中山(幸次郎)巡
査部長なりとす。

一、本書編輯に付精密なる注意を賜はりたる震災當時の長
官安河内麻吉閣下に對し謹みて感謝の意を表し併せて資
料蒐集に力を致されたる當時の縣下各警察(分)署長にも
謝意を表す。

一、陸海軍の活動に關する事項は、陸海軍當局の内閲を受
けたり。

第一編 災害の状況

第一章 震災の前後



大正十二年九月一日は早朝より驟雨數々來襲し、暗雲朝暈を鎖し、天候の險惡を憂慮せしめしも恰も厄日と稱せらるゝ、二十十日の前日なりしが爲め、世人は敢て意に介せざるものゝ如かりしに、午前十時頃より風雨歇み残暑の陽光は灼くが如く雨後の地上を照して蒸熱く、時辰將に正午に入らんとし早きは已に食卓に就きたるものもあらん歎、此の刹那實に此の刹那なりき、恰も遠雷を聴くが如き身に感應する異様の地鳴りを覺へしよと思ふ間もなく突如として、強烈なる上下動の大震は起れり、さしも建築の堅牢を以て聞へ、從來地震感の極めて微弱なりし、我が神奈川縣廳々舎すら動搖激甚にして、床上を歩行することさへ能はず寔に風浪上の、孤舟も管ならず四壁撼き天井鳴り室内の書架、書函は前後左右に亂倒し、匍匐して猶且身の安定を保つ能はざりしが、一瞬間にして天地鳴動し隣接せる、警察部の一部たる衛生試験室、横濱税關、横濱郵便局、中央電話局、英、米、露國領事廳等は倒潰し濛々たる、砂烟四方に起り殆んさ咫尺を辨ずべからず、僅に窓を排して街頭を瞰下すれば倒潰家は街衢を擁塞し、電柱倒れ樹木摧け傷者は鮮血に塗れて、呻吟し死者は算を亂して地上に仆れ右往左往に逃げ惑ふ民衆の、叫喚は隨所に起り直に全市の潰滅を相感せしめたり。

階上の事務室に在りたる、森岡警察部長は階下に降り進んで門頭に出て、状況を視れば餘震は絶へず斷續し傷者は街上に滿てり、森岡警察部長は直に福田衛生課長に命ずるに、臨時救護所を横濱公園内に急設すべきことを以てし、一面部員をして市内各警察署長に、非番巡査の非常召集を令し、且消防署に對しては即時出動の命を下し又西坂高等課長をして安河内知事の安否を訪ねしめ、同時に部員を督勵して傷者救護の事に當らしめたり。斯くて市中を顧望すれば税關方面と山下町及尾上町方面に黒煙騰れり、震災は早くも諸所に火災を誘發したるを知り再び、消防隊の出動を促したるも消防署は何れも家屋の倒潰に依り唧筒は壓扼せられて輒出すこと能はず水道管も亦破裂して到る處斷水し到底消防の効を奏すること能はざるを知るや、已むなく森岡警察部長は安河内の知事の無事縣廳正門前道路に避難せるを聞き、一應之れに面接し救護に關する指揮を受け、而して後横濱公園内の救護本部へ到らんとし、且一警察官に命じ、鐵道電話に依りて以て此の災害の状況と救助應援とを、内務大臣に報告せしめ、兼而出兵の要求を爲さしめたるも奈何せん、時已に到る所の電線は切斷して蜘蛛の散亂したるが如く、遺憾ながら其の目的を達し得ず使者も亦中途火焰の包圍を受け復命を爲す能はざるの窮厄に陥りたり。

既にして午後零時四十分頃強烈なる餘震の繼續する中を野口警務、小山特別高等、西坂高等、島川刑事、上田工場、福田衛生の警察部各課長は少數の構内殘留者を除きたる各課警部、其他の者と共に急遽横濱公園に到れば震火に追はるゝ避難者は、陸續として入り込み來り、傷者死者の路上に横はるもの少なからず、部員は互に之を扶けて園内に入れば、水道鐵管の破裂に因り平地一面泥海と化し、殆ん半身を没するの水深を見、殊に其の水底には大なる龜裂の潜むるありて危険眞に言ふべからず、而して臨時救護所は之を園内の丘上に設けたるも救護材料に乏しく、頗る困難の裡に夜に入れり。

是れより先き横濱市内の狀態を視れば到る處の斷崖及河岸は崩潰し人家を壓して河線を狹ばめ、道路には龜裂を生じ橋梁は或は燒失し或は落下して渡るべくもあらず、此の大災害の裡に於て其の慘禍の程度を何れを甲、何れを乙と俄に甄別し能はずと雖も市内に於ては舊居留地即ち山下町一帶の如きは、正に無殘の最たるものなるは否むべからず、舊居留地に於ける洋館建築物の多くは石造又は煉瓦にして殊に、老齡又は耐震の注意を欠きたる爲第一強震と共に一堪りもなく粉碎し去り、屋内に在りたる者は殆ん避難の遑なく壓倒せられ、街上の通行者も亦、兩側家屋倒潰の餘波を蒙り死者、傷者相接ぐの状況を呈せるが、殊に甚しきは「グランドホテル」及「オリエンタルホテル」の被害なりとす同「ホテル」は東京灣の濤波に面し、巍然として屹立し泊船行艦を一時の裡に敝め或は午餐に或は夜會に常に在留外國人唯一の樂園として娛まれ、當日の如きも集まり來たる内、外紳士は今や將に午餐を攝らんとし或は「ヴェランダ」に或は「ホール」に暫時の休憩を爲しつゝありたる折柄、彼の大震に襲はれ大厦は轟然たる大音響を發して倒潰し、紳士淑女は皆其の下敷となり救ふ遑もあらばこそ、忽ち司厨室より發したる火は、さしも壯麗を極めたる、高閣を一瞬間に灰燼に化し去れり。其の火中より通れたる一婢僕の言に據れば、來賓外人の死者正に百を以て算ふべく、雇傭人約八十名中其の十中の八、九は壓死せりと云ふ。而して災害に罹れる市内の重なる官廳としては、横濱地方裁判所、横濱税關、神奈川縣港務部、逓信省航路標識

管理所、加賀町、伊勢佐木町、山手本町、横濱水上の四警察署は何れも第一震と共に倒潰し、多数の死傷者を出せるが、就中最も甚しきは横濱地方裁判所にして、老残の煉瓦造なりし爲、微塵に粉塵し末永所長以下百餘名を擧て壓死せるは、實に酸鼻の極みなりと云ふべし。

前段にも述べたるが如く、時恰も午餐時に際し、何れの家に在りても火を用ひありしが爲め、震災に伴ひ火は四方に揚がり強風之を煽り暫時にして、全市は黒煙に包まれ、避難者は波濤の荒るゝが如く、街衢の上に押合ひ親は猛獣の中を漕りて失ひたる兒を尋ね、兒は親を探して猛火の街衢に泣き叫び、或は老者を扶けて去るもの或は傷者を助けて遁ぐる者等、阿鼻叫喚の状態は、此の世乍らの地獄を現出するに至れり。

既にして午後三時の頃に至れば烈風益々強く、延焼區域は愈々擴大し猛火は天に冲し、中村町所在縣揮發物貯庫に於ける在庫揮發物及市内各商店に貯蔵せる揮發物、爆發物は火災の爲め爆發し、恰も巨彈を放つが如く、時々空中に炸裂し殆んど戰場と異ることなく、逃げられたる避難者は或は船中に入り、或は河中に投じ以て身を遁れむとしたるも、河海には重油の浮游物に移火せるもの、又は猛火飛來して船舶を焼き此の内に在りたる、老若男女は船と共に焼かれ、又は水中に溺れ其の數實に幾千なるを知らず。人心は恟々として生ける心地なく、飢渴襲來せるも固より策なく、纔に横濱公園、山手公園、新山下町埋立地、伊勢山、掃部山、税關山、久保山、中村町一帯の陵上等に避難せる者は、猛火の包圍裡に夜を明せり。

此の間警察官は互に警察署所轄内民衆の避難指導に、或は防火に或は人命救助に、或は避難民の警戒保護に活動したるも、夜に入りては警察部と警察署間及警察部幹部間の連絡も、執るに由なく困憊の裡に夜を徹したるが是より先き森岡警察部長は單身一度横濱公園内の救護本部に赴き、應急處置に關する諸般の指揮を爲したる後、縣廳の最後を憂慮し午後二時三十分頃決然身を挺し、熱燄を冒して縣廳に引返し見れば、廳の内外に避難し來りたるもの數百名に達し、此の時南隣農商務省生絲検査所に移りたる猛火は、更に警察部を襲はんとし、危機眉に迫るの状態なるに、即時自ら構内の避難民を指導して横濱公園へ馳せんと欲し、縣廳正門に出づれば猛火は通路を遮り、復た救護本部に到るべくもあらず、已むなく方向を轉じ老幼避難者を指導しつゝ猛煙裡を横濱税關西門に突破し、纔に新港岸壁に火を避けたり。然るに全所も亦危険切迫し保税倉庫には火揚り、上屋の一部も亦炎を吐き、加之「コンクリート」の路面には大龜裂を生じ、繼續する餘震毎に、其の裂目は開閉せんかと危まれ、然かも海面を見れば浮游せる重油は、火燄と化して波上を漂流する等、岸壁上に於ては到底身の安全を保つ能はざるべきを看取せる森岡警察部長は、斷然意を決して身を海に投じ、附近の汽船に泳着き之に據りて遂に港内碇泊の汽船「これや」丸に搭乘するを得たり。爰に於て森岡警察部長は港内に於ける汽艇を督勵し、之をして沿海を巡航し生死の境に彷徨する婦女子又は海水に溺れんとする者等を救助して、碇泊各船に收容せしめたるも時既に全市は火海と化し、交通並に通信機關の全滅を看取したるを以て、寧ろ無電を利用するに如かずとし、乃ち同船の無線電信に據り内務大臣并に警視總監に對し、救援方の申報を爲すべく、船橋無線電信所へ向け發信せしめたるも、受信所より東京に送電の途なき旨の回答に接し、已むなく一先づ之を止め、更に港内各船の無電を一時中

止せしめ置き「これや」丸の無電を以て、大阪、兵庫、千葉、茨城の各府縣知事、横須賀鎮守府、横須賀軍港碇泊中の各軍艦并に、大阪朝日、大阪毎日の兩新聞社へ對し横濱市の大火災を急報して、以て救援を請ひたり。而して當時の無線電信は横濱市の慘狀を最も簡明に之を表示せり。曰く

本日正午大地震起り引續き大火災となり、全市殆んぎ火の海と化し死傷何萬なるやを知らず。交通、通信機關不通、水糧食なし、至急救済を請ふ。

森岡警察部長は此の無線電信を發すると共に、差當り塗炭の苦中に在る罹災民を如何にして、救助すべき乎に就き焦慮中、偶々負傷して同船に避難し來りたる、齋藤東洋汽船株式會社調度課長は自ら進んで、罹災民救助の爲め全船に貯藏する食糧の全部を、提供すべきことの申出を爲し、早くも炊出しに着手せるを以て警察部長は機宜に適する同氏の此の急速の措置を欣び、罹災民の爲め厚き感謝の意を表すると共に、一面港内碇泊の各汽船々長に對し無線電信を以て左の申込を爲せり。曰く

陸上の避難者救助の爲め炊出の要ありと認め、本船に於ては食糧全部并に貨物米をも提供し、明朝陸上に分配することに決定せり。貴船に於ても人道の爲め之れと同様の處理を乞ふ、尙決定次第何分の御返事を乞ふ。

此の電報に接したる各船は何れも速かに快諾し「これや」丸と全様罹災民の救助に盡力せるが爲め、數萬の罹災民は飢渴の裡より救出せられて、蘇生の思ひを爲し安全なる船内に、數日間安穩に消光するを得たり。

一方横濱公園内に於て救護の衝に膺りし、警察部の幹部は猛火の包圍を受けながらも、警察官吏を指揮して、

斷へず避難民の保護と救助とに任じ、且屢々火を冒して内務省への報告と出兵の要求の爲め、上京を企圖したるも不幸にして、猛火熱風を突破して市外に出づる能はず。空しく焦慮の間に火勢の鎮まり夜の更くるを待つより外施すに術なりかしは、實に切齒に堪へざりき。斯る中に一日夕刻安河内知事、松原内務部長は公園を脱出危険を冒して伊勢山知事官邸燒跡に到り、露宿夜を徹せるが、一方野口警務、西坂高等の兩課長も亦二日午前三時に至り、公園を脱出し上司の指揮を受け報告を齎らして、急遽上京の途に就きたりと雖も、餘燼今尙強く道路の龜裂電線の散亂は頗る歩行に困難を與へ、搗て加へて極度の空腹を忍び、痛く困憊せる身体を支へ、徒歩東海道筋を走り漸く二日午後内務省に到達し、震災の状況報告を爲し併せて救援を仰ぎ、一面參謀本部に畑軍務局長を訪ひ詳かに横濱地方の慘狀を陳述して、最大の救護を請ひ更に石光第一師團長を訪問し、安河内知事よりの出兵要求と、陸軍糧食の配給とを請ひたるに、翌三日幾分の出兵を爲すべき旨の快諾を得たるを以て野口、西坂の兩課長は夜を徹して歸濱の途に就き、路々自警團員に輕擧妄動を戒め、流言蜚語を打消しつゝ三日午前三時辛ふじて歸濱し、安河内知事に復命を爲すと共に帝都の震災、火災警見の概況をも併せて之を報告するに至れり。之れ横濱市に於ける震災前後の大略なり。

以下項を逐ひ震、火災の概況を略叙せんと欲す。

第二章 震火災の惨狀概観

今回の大地震は廣く關東一帯の地に跨り、其の震源地は實に相模灘の海底に存し、然かも地震の巨足の第一歩を投じたるは我が湘南の地たり、宜なる哉其の慘禍は一府四縣中の首位にあり。彼の大震の突如として襲來するや、天柱を碎き地軸を撼がし、劫火を前驅とし海嘯を後驅とし、六十有餘年の歲月を以て築き上げたる文明の祥門帝都の玄關にして、將た世界の貿易港として、光輝ある我横濱市は一瞬にして其の壯嚴華麗なる容姿をこひ、滿目荒涼たる焦野と化したはり、嚚音までは山紫水明にして、都人士の清遊地たりし湘南の一帯と函山の一派とは一朝にして破壊せられ、今は七百有餘年の歴史を有する鎌倉の古建築も、又往時に在りては東海道五十三驛の中に列せし箱根、小田原等の如き古驛の佛も追懷するに由なきに至りては、誰人か低徊して悲痛の涙を催さざるものあらむや。

縣下に於ける震災の惨狀は何れを観るも實に殘虐を極め、俄に甲乙を別ち能はずと雖も、就中慘怛たるものは横濱市にして、次は小田原、真鶴、大磯、厚木、秦野、鎌倉、横須賀及湘南一帯の地にして、然かも震災と共に起りし劫火の爲め、焦土と化したれるものは横濱、鎌倉、横須賀、小田原、秦野、厚木等の市、町なりとす而して鎌倉、熱海線沿岸及三浦半島に在りては、更に海嘯の災厄を被るに至りては、慘又慘と云はざるべからず。

今縣下に於ける被害の狀態を大觀し、先づ横濱市の惨狀を略るに市街の被害面積は、市内宅地總面積四百九十

萬坪の内三百九十萬坪にして總面積の約八割に當り、東西約一里南北約一里半に亘り全燒せる町數は、八十ヶ町半燒せる町數は二十ヶ町計一百ヶ町にして、燒失家屋は五萬五千八百二十六戸に達し、倒潰家屋は一萬八千四百四十九戸に上り、死者二萬三千四百四十人、行衛不明者約三千八百八十三名に及べり。以て其の慘禍の甚大なるを想見するに足るべし、而して災時に於ける狀態を攷ふるに、市の東南方波止場に面せる一角に位せる山下町は、舊外國人居留地に屬し外國商館之れに割據し、外國領事館亦多く爰に在り、百萬の碧雲鱗々として大厦高樓櫛比し宛然小倫敦、小紐育を現出し、此の區域に隣接せる西北一帯の本町以下十三ヶ町は俗に關内と稱せられ、貿易業者等の巨商之れに蝟集し、其間に縣廳其の他の諸官衙介在し、煉瓦、石造等の建築物街頭に聳へしも第一震に於て多くは脆くも瓦解し、又東京の淺草、大阪の道頓堀と稍や其趣を同ふする、遊覽娛樂地域たる關外伊勢佐木町方面并に是亦商業地帯として、般賑を呈せる埋地方面は建物の關係上舊居留地方面に比し、概して倒潰の速度稍や緩慢なりし感あるも、倒潰を免れたるものは殆ん稀なりと云ふを得べし。

斯く第一回の強震に於て建物の大部分は倒潰し、電線は切斷して蜘蛛の散亂せるが如く到る處の路面には大龜裂を生じ、水道は破裂して所に依りては氾濫人の腰を没し、地盤の陥落に因り運河、河川の護岸は殆ん崩壊して全きもの少く、橋梁亦概ね斷落しさしも堅牢の間へありし、長虹波に横はる税關棧橋も、巨船を横附けにせし新港岸壁も一瞬にして、其の大部分を破壊し去られ、又横濱灣頭半月形を畫きし防波堤も深く海中に陥没して、只僅かに港口の兩端に屹立せる、紅白兩燈臺の慘骸の一部の殘存せるを見るのみ。

翻て還た市中の惨状を見れば、全市建物の倒潰に依りて立騰れる黄塵は溟濛として、天日爲に暗く阿鼻叫喚地上に滿ち死者、傷者其の幾萬なるを知らず。斯る中に先づ官廳の倒潰せるものを擧ぐれば、横濱地方裁判所、横濱税關、横濱郵便局、神奈川縣港務部、逓信省航路標識管理所、横濱刑務所、加賀町、伊勢佐木町、山手本町、横濱水上の四警察署にして、共に多くの死傷者を出し、其他常設演藝館、各種娛樂場、内外旅館、銀行、會社、工場、民屋の倒潰せるものは無數にして、今俄かに其の正數を表示し能はずと雖も、官廳の中に於て最も多くの死傷者を出せるは、横濱地方裁判所にして、執務中の所員は勿論訴訟關係者、傍聽者等は構の内外に於て壓倒され未永所長、福鎌檢事正代理其他判檢事以下百數十名、或は即死し或は悶絶し傷者は鮮血に塗れて、匍匐するも之を救出する者稀にして、負傷稍や輕き僅少の所員は痛手を忍びて、重傷悶絶中の上司を模索して彷徨中途に火炎の襲ふ所となりて、不幸遂に命を此所に殞す。聞く者誰か涙の滂沱たるを禁じ得べけむや。斯る悲劇は其の場面を小にし、其の趣を異にし市内の隨所に續出せるの狀態にして、市内警察官は危険を冒し一身を顧みず是等の救出に當りしも未だ全く救助し得ざる中に早くも火は四方に起り、黒煙騰るよと見る間に烈風は火燄を煽り燄々天に沖し、旋風は隨所に現はれ妖炎を捲きて空中に火車を驅り、惡風に乗じて火砲を雨降らし、熱瓦或は燒「トタン」板は鳴鑼の如き音響を發して飛揚し、之れに中りて死傷する者數を知らず、斯くて纔かに震災を遁れ辛ふじて生を得たる者も、更に猛火に追はれて街衢を狂奔し、活路を求むるの火急に際會せり、警察官は此の境地に在りて避難者を横濱公園に或は山手公園に或は久保山に、或は掃部山に其他適當の場所に指導避難せしめしを以

て市の空地、廣場、高所は忽ち數萬の避難者を以て立錐の餘地なき迄に埋めたり。然れども發火個所の多數なりしと、火勢の急激なりしと道路の壊滅と、橋梁の落破とに因り逃げ後れたるもの、地の利を失ひたるものは遂に猛火に捲かれて燒死し、或は河中に投じて溺死せる者其數幾千なるを知らず。殊に市内に於て多數の慘死者を出したるは南仲通、横濱正金銀行、日ノ出町屋下、黄金町末吉橋附近にして各二百有餘名を算し、梅ヶ枝町東本願寺別院前に於ては、三百五十有餘名を出したるが、同院に於ては合掌端座冥黙したる儘黒焦と化せるもの尠ならず。由是觀之も如何に遭難状態の悲惨事なりしかを想像するに足らん、其他隨所に燒死の累々たるを見るのみならず、大岡川吉田橋附近に繋留せる五大力船及納涼船に避難したる約五百名は、烈火河上を渡りて船体を燒くや、先を争ふて水中に飛込み救を求むるも、之を救助するの方策なく、哀れ悲鳴を揚げつゝ遂に溺死するに至りたる者、實に其の幾百なるを知らず。夜明けて水面明かなれば老若男女の屍体は累々として、水光を見ざる迄に河上を壓したり。

河畔に來り骨肉を尋ねて徘徊する者を見れば、一晝夜猛火に追はれ面上を焦がし、手足を痛め身には燒け損じたる寸断の衣服を纏ひ、或は身に片布を附けざる赤裸の者等、何れも水中の死屍を凝視し、男は女を見ては我婦かと思ひ、女は男を見ては我夫かと泣き、親は小兒を見ては我子かと叫び、兒は我親も彼の中にやあると泣き、哀愁四邊に滿ち鬼氣人を襲ひ、鐵腸の人と雖も其の傍らに留まるべくもあらず、噫是れ眞に現世なる歎將た幽界なる歟。

斯の如き慘禍は忽ち天間に達し畏くも

攝政宮殿下 には十月十日當市に行啓あらせられ、親しく災蹟を御巡視遊ばされ。

皇后陛下 にも亦十一月五日御救恤の御覺召を以て行啓あらせられ、焦土の市内を憐はせられたる上、傷病者を救容せる病院に臨ませられ、優渥なる御詔を賜はりたる海の如き深き御仁慈の程には官民齎しく感涙に咽びたり

郡部の被害を通觀するに小田原、根府川、鎌倉、浦賀、横須賀等の慘狀は之を慘中の慘として、正に特記すべきものありと思惟す。小田原町に於ては突如として起れる上下震動に依り、山岳鳴動し諸所に大崩潰を來し橋梁は墜落し喬木は挫摧し、無残にも五千五百餘の民家は一堪りもなく粉碎し、且小田原御用邸も亦此の災厄に罹る全御用邸は舊小田原城にして、後北條氏の築造せる所にして、天下の名城として聞へあり。其一隅に築かれし天守閣の礎石、並に外濠内濠の石垣も共に無慘に覆され幾百年を経たる老松も、無慮三百有餘本まで打倒され、全く舊觀を失ふに至りたるは、惜むべきの極みなり。

震後町内十二ヶ所より發したる火は狂風に煽られ、忽ち延焼して火の海と化し、猛烈なる火勢は大紅蓮となり旋轉して大火柱を立て、荒れ狂ひて民家を舐め盡し、町の中心二千三百餘戸を灰燼にし、多數の死傷者を出せるが、就中御痛ましき限りなりしは 閑院宮寛子女王殿下、御遭難の御事なり全殿下には御父載仁親王殿下、御母宮智恵子殿下、及御妹宮華子女王殿下と共に八月末より、全町幸町御別邸に御滞在遊ばされしが、御別邸倒潰の砌り、寛子女王殿下には其の下敷とならせ給ひ、御芳齡十八歳を一期として敢へなくも神去り給ひ、同時に御別

邸炊事場より發火し炊事場は烏有に歸したり。

轉じて箱根方面の被害を見るに、各温泉場共に何れも相當の被害を見たるが、宮ノ下及塔ノ澤を以て最も甚しとす、宮ノ下は箱根第一の遊勝地にして御用邸あり、富士屋ホテル、奈良屋ホテル、其の他の大旅館ありて、信州輕井澤と双稱され、其の名を世界に知られし所なるが、震災に依り羊腸たる坂路は崩潰し、登山電車の軌道も亦顛覆し他との交通は全く斷へ、山中孤立の窮境に陥り、各旅館等其の建物に大なる損害を受け、中には斷崖上より百仞の谿谷中に墜落して粉碎せるものありたり。

塔ノ澤 に於ては溪流早川は斷崖の崩潰に依り、其の水路を阻塞され急流は忽ち奔放氾濫して、旅館其の他の倒潰家屋を押流し、趾方も留めざる迄に荒れ果てたり。

小田原 の南方約一里半片浦村以南は、震災に次ぐに海嘯の來襲を受け、熱海鐵道沿線に當る片浦村、根府川は山岳崩潰して山津浪と爲り、一部落六十餘戸は人畜諸共百尺以上の地下に埋没し、永劫發掘し得べからざるの悲境に陥り、又震災の刹那恰も根府川驛に停車せんとせし、東京發真鶴行列車は乗客約二百名を乗せたる儘、停車場の建物と共に山津浪に呑まれ、土砂に包まれて深く海中に輾落し、生靈は永へに相模灘の幽鬼となりて、浮ぶ能はざるに至りたるは何たる痛恨事ぞや。

松田、山北 方面の被害は小田原方面に比し稍や輕しと雖、民家の倒潰及小火災の如きは言ふ迄もなきことにして、山北驛の西方第三號隧道と、第四號隧道との中間山岳崩潰し隧道を埋没し、容易に復舊の見込立たず、又

山北より北方四里三保村に通ずる縣道と、酒匂川の護岸とは甚しく崩潰し、松田町より吉田島村へ通ずる酒匂川の架橋十文字橋は墜落せり。

大磯、平塚 方面に於ける被害も亦小田原方面の惨状に譲らず、大磯町に於ては大磯驛を發したる、濱松發東京行上り列車は大磯驛を距る東方約十丁高麗山下に於て顛覆し、汽罐車以下五輛は高さ三間の軌道上より、水田中に墜落し乗客六百余名中死者五名、重傷者四十九名を生じ、又海岸には高さ一丈余の海嘯來襲し、陸上一丁餘を洗ひ去れり。

平塚 方面に於ては先づ相模紡績株式會社の被害に指を屈せざるべからず、全社に於ては建物四十三棟中三十六棟全潰し、残七棟半潰し壓死者百六十五名、重傷者數十名を出し杳雲堂佐々木分院に於ては、患者五十二名を收容し居たるが、建物二十三棟倒潰し患者の壓死せるは僅に三名に過ぎざりしも、患者の全部が肺結核患者なるが爲、震後の措置に就て悲惨の狀態を呈し、又大野村所在海軍火藥廠研究部試験室より瓦斯の爆發に依り、火災を起し構内建物二十二棟を烏有に歸し、又馬入川に架せる三百六十五間の長橋馬入橋と鐵道橋とは何れも墜落せり

愛甲郡厚木町は平塚町の北方約四里相模川沿岸に在りて、相模平原に於ける唯一の物資集散地として、小市街を形成し夏季に於ては、相模川の鮎狩に依り都人士の行樂地としても名ありしが、地震に次て起りし火災に依り全町殆んど灰燼に歸す。

秦野町は縣下西北部に於て厚木町に次げる殷賑地にして、東海道二の宮驛との間に輕便鐵道の便あり、且葉

煙草生産地として名ありしが、震災に依り全潰、半潰家屋一千四百十九戸を出したる後震後の火災に依り中樞地に於て三百四十棟を焼失せり。

藤澤町は幸ひに火災の厄は免れたりと雖、巨人の足下に蹂躪を受けたるが如く、全町の民家は盡く粉碎し宛然枯野にも似たる凄凉の觀を呈せり、町の東端を流れて片瀬海濱に入る堺川の河岸は殆んど崩潰し、沿岸に連櫓せし民家は高さ一丈二尺の河中に墜落し、又都人士の別莊地として知られたる鶴沼海岸には、殘暑猶酷たしかりし結果避暑客多く滞在し居りしが、全所吉村別莊に御滞在在中なりし 東久邇宮師正王殿下 には家屋倒潰に依り御壓死を遂げさせ給ひ 第三王子殿下 も亦御微傷を負はせ給ひたり、全海岸には震後高さ一丈餘の海嘯來襲し約四丁も陸上に上りたるも幸ひに人家には及ばざりし。

鎌倉方面の被害は小田原方面の夫れと比較し、何れが大にして且重きか未だ俄に判定すべからざるものありと雖、鎌倉に於ては先づ震災に依り民家は概ね倒潰し、多くの死傷者を出したるが中にも、由比ヶ濱御別邸に御滞在あらせられし山階宮妃殿下 には非業の御壓死を遂げさせ給ひ、尙全邸に御滞在あらせられし賀陽宮大妃殿下 下にも亦御重傷を負はせらるゝ等、彼れ是れ御痛ましき限りなるが、建築物に於ては歴史的に著名なる神社、佛閣は概ね破壊せり、鶴ヶ岡八幡宮樓門、華表境内の舞殿、圓覺寺、建長寺の如き皆然り、去れど大佛像及長谷觀音像の損害の輕微なりしは實に不幸中の幸なり、震災に次て鎌倉町内には數ヶ所より火を發し、小町、大町、雪ノ下、長谷等凡そ鎌倉の樞要地域は悉く焦土となり、又義經腰越狀に依りて名高き腰越の地も震後の火災にて民

第一編 災害の状況 第二章 震火災の惨状概観
家百五十戸烏有に歸したり。

一六

鎌倉海岸には震後間もなく海嘯來襲し、約三丈の巨濤は由比ヶ濱を洗ひ民家數十戸を流し、同時に恰も全所海中に在りし海水浴客約百名は溺死せるが如く認められ、又七里ヶ濱に於ては護岸約十丁潰滅し、江の島の大棧橋も亦海嘯に没はれ、偶橋上に在りし者約五十名は橋と共に行衛不明となれり。

鎌倉海岸を南に去り逗子、葉山方面を視るに、逗子に於ては民家概ね倒れ小坪に於ては、漁家八十戸倒潰したる上、海嘯の爲約一丁も山上に打揚げられ、其の他葉山村及西浦村に於て同様の被害を見たり。

葉山に於ても海岸の崩壊箇所少からず、民家の倒潰も多数にして火災を發したるも幸ひに消止めて、大事に至らず、葉山御用邸は大破し御邸内の建物八棟全潰し、十三棟半潰し、表方關先地面約三百坪陥没し、邸を繞る石垣は盡く倒潰したるが、當時高貴の御滞在なかりしは何よりの幸ひなりき。

三崎町方面に於ては湘南他地方に比し被害少なく、殆んご云ふべき程度のものなきも、震災と共に海底數尺隆起し、常時に於て三崎町字日ノ出海岸と其の地先海面に横はる、城ヶ島との間約八丁（此の間水深最深所に於て九尺）は渡船に依り交通の便を取り居たるが、震後數時間は海水の減退せる爲徒渉し得られたるの奇觀を現出し其の結果海嘯の來襲も平常の大浪と異らざる位にて、沿岸は別段の被害なきに終れり。

浦賀町には大工場浦賀船渠株式会社浦賀工場あり、第一の強震に依り倒潰したるが、全工場は常に數千名の職工を使用し居り、若し震災にして就業時間中に來りたらんか大々的慘事を生すべかりしに、幸ひ晝食時に在りし

が爲四千餘名の職工は概ね無事に避難し、死傷者を出さざりしが、之に反し浦賀町西岸字蛇畑の勝地たる愛宕山公園は、中央より決裂し三十餘丈の斷崖は、大鳴動と共に怒濤の如く崩れ來り、崖下の民家七十餘戸を埋没し、住民百餘名亦家屋と運命を共にせるは甚だ憫むべし。

震後間もなく同町荒卷一民家より發したる火は、折柄の西南風に煽られて忽ち延焼し荒卷、谷戸を焼き同時に浦賀船渠株式会社より發したる火は、大ヶ谷に飛火し全字を始め築地、新町を焼き以上各字を通じ全焼五十戸半焼三十戸を出せり。

横須賀市は軍港として特色ある市街地にして、其の地形山に據り海に臨み數十丈の絶壁市の背後に屹立し居たるが爲、彼の烈震に襲はるゝや先づ諸所の斷崖崩潰し、家を毀ち通路を絶ちたる處、枚舉に遑あらざるも就中被害の大なるは横須賀驛より横須賀海軍工廠南門に至る、港町通約五丁の間及横須賀驛より田浦町に通ずる、隧道三十間の崩潰にして、田浦隧道に於ては列車三輛を埋めたり。

市内に於ける倒潰家屋は、二千三百一戸にして工廠の一部も亦破壊せり、而して震後起りたる火災は市内目貫の場所たる小川、山王、大瀧、汐入、港、汐留、中里、旭、稻岡、若松、深田の十一ヶ町を烏有に歸し、壓、燒死者六百五十三名を出し、此の外に田浦町所在海軍重油タンク燒失せり。

鶴見方面は概して被害輕微なりしも、潮田町所在淺野造船所舎宅十戸建長屋十棟、九戸建長屋四十八棟戸數五百二十二戸倒潰し、死者十八名、傷者四十二名を出したるに止まる。

川崎方面に於ては大工場の倒潰、焼失せるもの數ヶ所ありて、相當多くの死傷者を生じたり、即ち富士瓦斯紡績株式會社川崎工場、東京電氣株式會社、明治製糖株式會社川崎工場、淺野セメント株式會社川崎工場等何れも倒潰し、内東京電氣及明治製糖は火を發して焼失し、富士瓦斯に於て死者百五十三名、傷者一百名、東京電氣に於て死者六十七名を出せり。

以上は只縣下市郡に於ける慘狀の概要を極めて單簡に略叙したるものなるが故に、固より事實の一半を表現し能はざるのみならず、罹災民の救助及保護、消防上の努力、災害地に於ける秩序維持等の點に至りては毫も觸れ居らず、閱者請ふ、以下各章下に於て順次詳説する所を繰讀せば蓋し思ひ半ばに過ぐるものあらむ。

第三章 震災當時に於ける一般状況

第一節 加賀町警察署管内

震 前

横濱を開發せし主因の貿易に在るは今更絮説を要せず、而して其の後大横濱を形成せし主力も亦貿易に在り、然るに今回の震災に於て市中全滅の内、就中其の貿易地帯とも謂ふべき舊居留地、即ち山下町及關内一圓(本町以下十三ヶ町)を焦土にせるは致命傷中の致命傷にして、將來復興上に大なる支障を與ふるに至れり今震災前に於ける全署部内の地勢と市街の状況とに就て其の概要を述べ、以て震災が與へし慘禍と損害との

如何に大なりしかを知るの資に供せんとす。

先づ同署部内の地勢より述べんに部内は市の南東部に位し、西北は大岡川を隔て、關外并に埋地一帯に接し、東方は東京灣に面し、南方は山手町一帯の丘陵に對す、而して此の地域内に包容せられたる戸數及人口を擧ぐれば、總戸數約五千七百四十六戸、人口約二萬六千六百二十五にして、此内に含む外國人人口は約五千五百四十四と註せらる、次て此地域内に於ける交通上の概要を云へば、市内電車は大岡橋より入りて關内を貫き馬車道に於て二筋に岐れ、一は吉田橋を渡りて關外に走り、一は更に關内を通り大岡川に沿ひて元町に入りて部外本牧に向て去る、主要道路としては櫻木町前辨天橋より入りて本町、山下町を横斷して堀川端に出づ本町通あり、此沿道は内外大商店軒を連ね、眞に開港場たるの偉觀を呈し、車馬常に織るが如く、之に次ぐものに辨天通、太田町住吉町、尾上町通あり住吉町、尾上町通には電車通ぜり、又關外伊勢佐木町より吉田橋を渡りて關内に入る大道を馬車道と謂ふ、馬車道は電車の交叉點にして、且伊勢佐木町通の雜踏の繼續地區として、恰も東京市に於ける須田町たるの觀あり、山下町に入れば海岸通は風光明媚にして水町通本町通、本村通、加賀町通等大商店櫛比し街形整然たり、而して貿易關係の大商店は概ね此區域内に店舗を置く、就中其大なるものを擧ぐれば外商にありては英商「チャーデンマゼソン」商會、(輸出入、船舶、保險等)「サミュエル、サミュエル」商會、(輸出入、船舶、保險)「ストロム」商會(輸出入)、米商「セールフレザー」商會(輸出入)内商にありては三井物産會社横濱支店(生糸及雜貨輸出入商)原合名會社(生糸)若尾商店(生

糸)小野商店(全上) 濫澤商店(全上)等あり、又商業議事機關には横濱商業會議所、外國人商業會議所、中華商務總會等あり、内外官公衙としては山下町内には英、米、佛支を首めとして二十二ヶ國の領事廳ありて、軒頭高く各々其の國旗を掲げ海風に飄々たり、又巍然として港頭を飾るものに我神奈川縣廳、横濱税關及横濱市役所あり、之に續ひて横濱地方裁判所、横濱郵便局、中央電話局、逓信省航路標識管理所、全海事部横濱出張所、農商務省生糸検査所、全羽二重検査所、全植物検査所等あり、轉じて海運事業には日本郵船株式會社、東洋汽船株式會社、大阪商船株式會社支店等あり、金融機關の重なるものを擧ぐれば「香港上海」「チャータード」「インターナショナル」「横濱正金」「第一」「第二」「第三」「十五」「第百」「住友」「左右田」「若尾」「渡邊」の各銀行あり、社交機關には外人側としては在留各國人の重なるものを以て組織せる「ユニナイテツト」俱樂部を首めとし支那人の親仁會、華僑俱樂部及三江公所あり、本邦人側には横濱社交俱樂部あり、「ホテル」の大なるものに「グランドホテル」「オリエンタルホテル」あり、大割烹店には八百政、千歳、言論機關には横濱貿易新報、横濱毎朝新報、「ゼ、ジャパン、ガゼット」、教會には基督教海岸教會、横濱基督教青年會館、指路教會等あり、壯麗雄大なる特殊建築物には横濱開港記念會館及「インターナショナルビルディング」(萬國館)あり。

以上は抽象的に部内の大勢を叙したるものに過ぎざるも、之に依つて此地帯の如何に市の眼目たりしかを想像するに足らむ。

震 後

震災當日の九月一日は、恰も土曜日に當り、外國商館は午後よりは、休業するの慣例なるも、午前中なりし爲何れも執業中にあり、關内方面商店等に於ても是亦執業中にありて、街衢は諸方面とも殷賑を極め、海岸方面に至れば税關棧橋には、此日正午當港解纜晚香坡に向ふべき汽船「エムプレス」、オプ、オーストラリヤ」號、新港岸壁には九月一日桑港に向ふべき「コレア」丸繫留しあり、之が乗客若くは見送人にて棧橋新港邊は相當雜踏し居たり、然るに彼の震災の突如として來るや棧橋の一部の墜落と、新港岸壁大部分の崩壊と其れに續ひて起りし火災等に依り逃げ場を失ひ、燒死し或は海中に落込み溺死するもの數知れず、山下町方面は重に石造煉瓦建にして、且多くは明治初年の建築に係り、年古り居たるが爲第一震と共に脆くも倒潰せるが、就中酸鼻を極めしは山下町内に於ける俗稱南京町の被害なりとす、同町は殆んゞ支那人(殊に廣東人)を以て満たされ、全國人の商賈軒を并べ一種獨特の町容を形成し所謂支那臭を滿街に漂はせ、一度足を此に踏入るれば轉た身は南支地方にあるかの感あらしめしが、其の建物は脆弱に其の通路は狹隘なりしが爲、一度彼の震災に遭ふや逃るゝ邊もなく壓死し或は燒死し、此の方面に在留せる支那人四千人中約半數の死者を出すに至れり、關内及元町方面に至りては、建物の關係上其の倒潰程度は山下町に比し激甚にはあらざりしも、一度火災起るや南仲、北仲、元濱、相生、眞砂常盤町及元町方面は其の道路の甚だ狹隘なりしが爲、纔に壓死を免れたる者も更に火災に包まれ、無殘の燒死を遂げたる者算無く、馬車道通横濱正金銀行附近の如きは、死屍累々として堆積し異臭焦土に漲り、殆んゞ人をし

て行く能はざらしめたり、又一條の活路を得たる者も西に逃ぐれば既に橋梁は落ち、東に逃ぐれば火災に遮ぎられ、追はれに追はれ、逃げに逃げて生地を求め、横濱公園内に落ち込み來りたる者實に其の幾萬なるを知らず、知事、内務産業兩部長等の縣廳幹部亦其の内に在り、然るに横濱公園も墮て四面より火炎の包圍を受け、殊に園内に建設の横濱社交俱樂部（木造）に延焼したる爲、猛烈なる焦熱は人の肌を迫り到底耐ゆべくもあらず、婦人及幼者の如きは悲鳴を揚げて啼き叫べるが、斯る中に空には旋風起りて焼板或は焼「トタン」の類を雨降らし地には水道鐵管の破裂に依り、人の腰部までも及ぶ出水を見るに至り、天を仰げば危險物の落下し來るあり、地に俯せば氾濫せる泥海あり、仰ぐも俯すも身を容るゝの地なく、人は生きながらにして全く八大地獄の裡に陥るの苦みを嘗めたるも、然かも此公園内に於ける死者は少數に止まり、大部分は萬死に一生を得たるは寔に天佑と云はざるべからず、若し夫れ公園にして此泥水もなく、又多少火の粉を凌ぐの木蔭もなかりしならんか、此處にも亦本所被服廠跡の慘禍よりも、一層大なる慘禍を醸出すべかりしものならんと想へば、實に慄然たらざるを得ざりき、又一方山下町の南端堀川を隔て、新山下町の埋立地あり、其の面積は八萬三千坪（道路を除き）及び未だ何等建築物もあらざる廣漠地なるが爲震、火突發の際にありては山下町、元町及山手町方面より此處に避難せる者數萬人に達したるも、聽て海嘯來の聲に脅かされて更に他方に四散し去り、全く進退谷まりて一日夜を此處に明かせしは漸く一千名内外に過ぎざりし模様なり。

以上の如くにして何れの方面を見るも焦土に焼瓦石の堆積せるのみにて、兵燹に亡びたる廢墟の如く全市殆んゞ眼に遮るものなく、空漠たる焦野と化せるが中に永く凄絶の光景を留めしは、山下町前田橋々畔なる米國海軍貯炭所にありし石炭約四萬噸の燃焼は震後二ヶ月餘に及び、尙火焰の盛に炎上せる状態を呈し居たることなり。大勢以上の通なるが今同署部内に於ける被害數字を上ぐれば、震災前戸數五千七百四十六、人口二萬六千六百二十五、此内死者七千六十、傷者一萬三千八十、行衛不明七百六、半潰二十二、全潰五千五百七十三を示せり。以下官公衙の被害、山下町内各國領事館の被害、内外銀行會社の重なる被害、寺院及著名建築物の被害等の個々に亘れる状況、火災、罹災民の避難状況、斷崖等に就き記すれば左の如し。

官公衙の被害

(1) 神奈川縣廳 神奈川縣廳は本町二丁目に在り、工費七十五萬圓を要し大正二年の竣成に係り總て煉瓦造にして内務部は三階建延坪數一千二百二十坪餘、之れに四十九坪餘の附屬舎あり、警察部は二階建延坪數二百四十三坪餘、之に十三坪餘の附屬舎あり、震災には附屬舎、衛生試驗室及度量衡検査所の一部を倒潰したるのみにして他は崩潰することなかりしも、附近より襲來せる火災に依り廳舎は其の外壁のみを残して焼失せり。知事の避難 震災の來るや廳舎は堅牢にして何等の破損を來たさざりしも、其の動搖激甚にして室内は器物亂倒し、塵埃冥濛として立舞ひ事態寔に容易ならざるを直感せし、安河内（麻吉）知事は多くの廳員の逸早くも廳外に避難せるを知るや、松原（權四郎）内務部長、山宮（鼎）産業部長、長岡（喜一）官房主事、安藤（喜八）地方課長、高田（景）土木課長、成富技師等を従へ廳舎正門前に立出て、廳員を顧慮しつゝ四邊の形勢を

眺望するに眸中に在る建物は殆んど倒潰し、阿鼻叫喚道途に滿ち早くも一方に火の手さへ揚り、加之風は強烈にして忽ち大火となるべく豫想せられ、倒底同所に止まるべきにあらざるを思はしめたり、知事は此の間に處し警察部長に對し應急救助及火防其の他の警戒方に關し命令を下し、廳舎二階の自室に引返し重要書類の始末を爲すと共に、他の者にも注意を與へて同様の措置を爲さしめたる後、再び門前に立出見れば既に英國領事館裏手より税關方面には一面に猛火の横漲せるを以て、午後二時に近き頃前記の人々を從へ一先づ横濱公園内に避難し、午後四時三十分頃に至り關内方面は概ね下火となれるを見て、知事は伊勢山に引揚げ善後策を樹てむと欲し、松原内務部長、長岡官房主事、高田土木課長、成富技師等を從へ公園より港橋通に出てたるに、既に下火にはなり居たりと雖、強烈なる毒風は餘炎黑煙を煽り人の呼吸を絶塞せしめむとす、這の火の巷を和服の知事は帽子を以て顔面を蔽ひ、帽子を持たざる松原内務部長其の他は洋服の上衣を脱して之を頭部より被り一散走りに市役所角より大岡川の北岸に沿ひ大江橋に出て、櫻木町驛脇を櫻木町通に出てたるが此の時は花咲町所在（伊勢山下）市の瓦斯「タンク」が爆發するの恐あり、避難者をして大なる恐威を感せしめたり、知事一行は伊勢山に赴かむとするものなるも、紅葉橋も雪見橋も共に燒落ち居たるを以て、右兩橋の間の河岸に燒解船の殘骸の横はり居たるを發見し、之を足場として花咲町河岸に渡らむとし、知事は誤て河中に顛落したるを隨行の人々にて之を引揚げ伊勢山に登り見れば、既に知事官邸及部、課長の官舎は悉く燒落ち、知事の家族を首め官舎居住者の家族中掃部山と伊勢山皇太神宮境内に避難移動し居たるものありたるも、知事家族其の他

課長の家族等にして、何れに避難したるや生死不明なるもの尠なからず、官舎附近に居残りたる者は纔かに燒残りたる知事官邸趾の植込中に一夜を明かしたり。

縣廳々舎の最後及構内避難民の状況 縣廳々舎は大正元年の建築に依り堅牢にして震災には幸ひ倒潰を免れ其の構内には裏庭の廣場あり、正門内には樹木の植込あり且相當の空地ありしがため、廳員其の他出入者の遊後れたる者は此の一廓を以て大体安全地帯ならむと思ひ、又縣廳に接近せる關内北仲通、本町、南仲通の一部小數者は同構内を唯一の避難安全地帯と持み、老幼婦女を伴ひ、負傷者を扶け家財を提げ茲に逃込み來るもの一時は約一千名にも上りたるが、暫時にして廳舎の東方英國領事館の裏手方面、南方境町方面、西方本町二丁目邊に火の手見へ、強烈なる南風は之を煽りて縣廳方面に進み寄るの形勢を示せしかば、早くも之れに氣付きたる避難民は、此も亦危ふしと見て海岸方面へ走るもの、横濱公園へ遁るものありしも、猶躊躇して踏留まりしもの約三百人ありたるべし、然るに午後一時三十分頃に至り、西方より來りたる火は北仲通一丁目、本町一丁目より縣廳裏門に肉迫せり、裏門内廣場に在りたる避難者は之に驚き一部は他に逃走り、残りたる者は灼熱に耐へ得ず、内務部廳舎内又は裏門脇自動車々庫内、「フィルム」檢閲室内等に立入りて一時を凌ぐ内、自動車々庫及「フィルム」檢閲室には間もなく移火し午後一時五十分位には、南方境町方面より來りたる火は生糸檢査所を傳はり警察部に移り、午後二時頃英國領事館を傳はり來りたる火は、縣廳正門より玄關先を紙め始めたり、此の時迄内務部一階、二階、三階等の間を上下徘徊し居たる者は一層の狼狽を來し、廳内を逃廻り居る中警察

部樓上より來りたる火は、南風に威を逞ふし内務部三階に移り、更に二階に燃へ下り既にして内務部内庭に堆積しありたる、暖房汽罐燃料石炭にも飛火したるに依り、廳内諸所より追ひ詰められて内務部會計課、地方課室内及附近廊下等に落合ひ集合し居たる者の内、此處に留まれば到底生命を全ふすること能はざることを自覺し、衣類其の他を以て上半身を蔽ひ縮切りある硝子窓を押開き、猛火を衝て正門前に馳出したる者若干ありたるが、途上を吹捲くる煙炎に呼吸逼迫し踵を續て打斃れ、又肌を焦しつゝ横濱公園まで辛くも落延びたる者も若干あり、芳賀生糸検査所長の如きも其の内の一人なりしなり、斯くて縣廳々舎内に全部火の廻はりたる爲、最後まで廳内に居残りたる者は廳舎を脱出し海岸通、通用門の兩側に在る小使室及炊事室（二棟共煉瓦造）内に逃げ移り、人と人と折重なり壓死せん計りに押詰め居たるが、此の時の人員は約百五十名もありし模様なり然るに午後三時頃に至るや廳舎を焼きつゝある火は烈風に煽られて、又紅蓮の舌を延ばして右二室を襲ひたり爰に至りては最早他に遁るゝの途も絶へたれば、燒死の苦みを見んよりは寧ろ自及するに如かずと決心し、中には「ナイフ」を咽喉に擬したる者もありしが、多くの者は入口の戸扉を排して脱出し、或は海岸通に面せる窓より飛出て、火煙の下を匍匐して稍々下火となりたる横濱税關正門前方面に走りたるが、茲に達する途中斃るゝ者數を知らず、僥倖にして馳抜けたる者は縣廳正門前北角の植込中又は英國領事館前北角植込中に潜み、地面に面形を掘り此の中に顔面を押伏せて以て呼吸の緩和を圖り、背部に火傷を生ずるの苦痛を忍び居たるが午後五時近くに縣廳は全く燒落ち横濱税關、英國領事館等亦概ね之れより早く下火となりたれば、前記避難者

等は實に九死に一生を保ち、或は海岸方面へ或は公園方面へ遁れたり。

鎮火後取調たる處に據れば縣廳構内に於て死屍を發見したる數三十一名、縣廳附近に於て發見せる數三十五名に及べるが、人數を計算し得ざる人骨も亦尠なからざりき。

(2)、**神奈川縣港務部** 神奈川縣港務部は海岸通一丁目に在りて、煉瓦造二階建（延坪數百五十四坪）に附屬舎二棟（コンクリート造一棟木造一棟）ありしが、何れも全潰後一日午後二時より同三時迄の間に山下町二番地方面より襲ひ來りたる火に依り燒失せり。

當時在廳職員約十餘名、傭人約十餘名中廳舎崩潰の際其の下敷となりて、矢澤港務部長、國友港務官、中世古屬等重輕傷を負ひ、松本港吏外六名及港務部長を來訪中なりし朝倉測候所長は壓死を遂げたり、死傷者氏名左の如し。

輕 傷	港 務 部 長	矢 澤 久 次 郎
重 傷	港 務 官	國 友 富 太 郎
全(後死亡)	屬	中 世 古 現 道
壓 死	全	清 水 巳 之 助
全	港	松 本 峻 次
全	囑	託 高 橋 直 丸

全 (防疫監吏) 花見喜久馬
全 (縣衛生課出張員) 各一名
全 雇員及給仕

尙港務部に附屬し他所に在りし見張所、輸入獸類検査所其他廳舎の被害左の如し

(イ) 港務部見張所 港内北水堤上所在

煉瓦造 一棟 全潰

壓死 檢疫員 荒木龜之助

(ロ) 輸入獸類検査所

木造 一棟 全燒

山下町十一番地先海岸所在

(ハ) 輸入獸類検査所

木造 四棟 半潰

市内瀧頭町所在

(ニ) 船塵消毒所

木造 三棟 全潰

市内瀧頭町所在

(ホ) 長濱檢疫所

木造 約五十坪 全潰

久良岐郡金澤村大字柴長濱所在

(3) 神奈川縣測候所 神奈川縣測候所は海岸通一丁目に在りて木造「コンクリート」塗二階建にして、震災に

依りては周圍の壁の剝落したる位の程度に止りしが、一日午後二時より全三時頃迄の間に山下町二番地方面より襲ひ來りたる火に依り類焼したるも、職員六名中所長朝倉慶吉が港務部訪問中全所に於て壓死を遂げたる外には死傷者を出さず、

(4) 横濱税關 横濱税關は海岸通一丁目に在りて、其の廳舎の本館は明治四年頃に成れる煉瓦及木造二階建(建坪約百六十坪)にして新港廳舎と稱する、監視部煉瓦造三階建(建坪三百五十坪)は新港棧橋入口に在り、此の外に舊港、新港、棧橋等を通じ旅具検査場、分析所、上屋、倉庫等總て二十七棟ありしが、是等建築物は上屋、倉庫等僅かに六棟を残して他は何れも倒潰、燒失せり。

第一震の襲來するや本館は年古りたる煉瓦造なりしが爲脆くも崩壊し、當時神輦税關長は旅行不在中にて本館在廳員約八十名中検査課長(鑑査官)早川繁雄外判任官二十二名、雇員五名、雇人七名は無残の壓死を遂げ他は身を以て遁れたり、監視部は煉瓦造なりしと雖建築後比較的多くの歳月を経ざりし爲、數次に倒潰せしを以て在廳職員約三百名中一名の壓死者も出さず、皆幸運にも脱出し此内の多くは本館に馳付け、下敷になり居たるもの、救助に盡力中、午後一時頃本館に直面せる山下町一七二番英國領事館裏手方面より、延焼し來れる猛火に襲はれ本館は忽ちに燒失し、監視部は山下町二番館より神奈川縣港務部、水上警察署建物を傳はり來りたる火に依り類焼し、此の火は進みて棧橋上屋を襲ひ、又一方舊港本館の西南に當る税關分析所より發火し(恐らくは藥品の爆發に依るならん)此の火は本館の火と合して勢猛く本館構内の倉庫を燒き、更に進みて新港岸

壁方面に延び又萬國橋方面より北進せる火も亦猛烈に新港を襲ひ、税關倉庫、上屋其他民間の倉庫、其他の建築物等多數を焼き、同時に舊港と新港との間を貫く運河中に繋留せる多くの運漕船をも焼燬せり。

税關倉庫、上屋に於て焼失せる貨物は總ての記録焼失せるが爲、其數量品目等を詳細に知るを得ざるも、入庫品は自動車、機械類、織物、罐詰、麻、紙、米、豆粕、胡麻、大、小豆類にして其額巨額に達すべし、又焼失を免れたる倉庫も震後二、三日後警備手薄なるに乗じ幾千の罹災民押寄せ、食糧品は勿論其他各種の輸入物品を擅に窃取して其の大半を失ふに至れるが、多數民中には工業用硼砂を小麥粉と誤認して食用し中毒を起して死亡する等の悲惨事を惹起したる者も尠なからざりき、尙税關に於て壓死者左の如し

税關本館壓焼死者

鑑查官	早川繁雄
事務官補	種村實之助
同	間瀬昭太郎
同	平田市太郎
同	柳田留吉
同	堀江
同	小梨文次郎

同	西脇一
同	大友俊明
同	木戸久四郎
同	矢倉平治
同	河野四郎
同	稻田寛猛
同	高橋要
同	長谷久吉
同	花崎太平
鑑查官補	矢藤昇
同	山下萬次郎
同	舍夷祐元
同	青柳憲三郎
同	粕谷兵二
同	清水清

第一、第二、第四、第五、第七、第十號上屋は残存す

(5) **横濱郵便局** 横濱郵便局は縣廳構内の一角に在りて、警察部廳舎と僅に二間を距り全局は本館及分館の二に分れ(本館は本町一丁目、分館は山下町一六九番地と一七〇番地に跨り本館と道路一筋を隔て、相隣る)本館は明治二十年の建築にして、煉瓦造二階建なるが郵便課及電信課之に在り、分館は明治三十年の建築にして煉瓦造二階建なるが、之が階上を庶務課、會計課、局長室、監察員室に充て、階下には外國郵便課を置かれたり、本館は第一震に於て炸裂して倒潰し、分館は階上全部破壊したるも階下は破壊を免れ、爲に外國郵便課は全きを得たるが、兩館共午後〇時三十分頃北隣露國領事館より襲ひ來りたる猛火に依り焼失せり、此の兩館の被害に於て高等官三名、判任官三十二名、通信事務員二十九名、雇人二十六名、計九十名(本館六十名、分館三十名)の壓死者と多數の重、輕傷者とを出せるが、高等官三名の死亡者は電信課長通信事務官橋本忠三、電信課主事葦名小太郎及靜岡丸船内郵便局長通信事務官中條道高にして、船内局長は分館に於て壓死し、他二名は本館に於て壓死せるものなり、當時目下(亥太郎)郵便局長は分館階上の局長室に於て執務中なりしが、大震動の來たるや急遽自己の凭り居たる机の下に潜り込み、以て危険を避けたるに大鳴動と共に落下し來りたる天井其の他の木材の爲に大机は顛覆し、局長は之が下敷となりて強き抑壓を受け、身の自由を失ふと同時に呼吸は殆んど止まらんとする際、早くも脱出せる局員の二、三が局長の搜索を爲さんとするに、既に階上は倒潰し登る能はざるより、馳せて縣廳構内より梯子を携へ來り、亂堆せる木材を排除し漸くにして局長を救出した

り、爰に於て局長は他の局員の救出等に關し指揮を爲しつゝある裡、既に局の北方より猛烈に延焼し來たり、到底同所に止まる能はざる形勢に迫りたるを以て、局長は局長室の一隅に奉安しありたる御眞影(高さ二尺五寸の木箱中に奉安しあり)の階上の倒壊と共に階下地上に墜落せるを捧持し、局員と共に横濱公園に避難したるが局長は幸に打撲、擦過傷を負ひたるに過ぎざりしが本、分館九十有餘の壓死は實に慘鼻を極めたり。

(6) **横濱中央電話局** 全局は山下町二百三十二番地に在りて、横濱郵便局の分館に連續して造られたる煉瓦二階造建物にして、階下は倒潰を免れたるも薩摩町通に面せる東側二階の一角と、横濱郵便局分館外國郵便課の階上に當る電話交換手休憩室とは共に崩潰し、交換手休憩室に於ては休憩中の交換手十數名其の下敷となりたるも殆んど全部救出し、當時在局の職員中僅に通信書記補一名交換手一名の壓死者を出せるに過ぎず、田子(四郎治)局長は四邊の情勢に鑑み、健全なる男子職員を指揮して被害の甚しき、横濱郵便局分館に於ける遭難者の救出に従事し、一方交換手等の女子其他を日本大通より横濱公園に避難せしめたるに、此の時は既に境町より公園に亘る一帯は水道鐵管の破裂に依り出水して池沼と化し居たるを見て、恐れを爲したる交換手は引返し來りたる爲田子局長は之を叱咤し、此處に止まれば焼死を免れず、溺るゝとも寧ろ泳ひて生を全ふし得むと、激勵して公園に避難せしめ多數の子女を救助し得たりと云ふ。

山下町百七十番地に在りたる全局料金課分室は、建築年月古き煉瓦造三階建なりしが脆くも倒潰し、職員約六十名中書記一名、通信事務員二十八名、雇人二名、計三十一名壓死を遂げ、又中央電話局の背後に全局の建物

と接榿して建てられたる、東京逓信局電信電話技術官駐在所(木造三階建)は倒潰し技手二名、工手一名の壓死を遂げたり。

(7)、生糸検査所 農商務省生糸検査所は本町一丁目にありて、建坪六百坪の鐵筋「コンクリート」三階建築なりしが爲、震災には耐え得て倒潰を免(本建物の裏手に張出し建物として造られたる、小規模の煉瓦造の炊事場、風呂場は隣接せる貿易倉庫煉瓦塀の崩潰の餘波を受けて倒潰し、之が爲に傭人女一名壓死し、同男一名瀕死の重傷を負ふ)れたるも午後二時頃背面に當る貿易倉庫より襲ひ來りたる猛火を被り、午後六時頃迄の間に建物の外部を残し内部は全部焼燬せり、是より先きに應職員二百七十七名(内譯技師七名、技手十九名、屬二名、囑託三名、雇員八十五名、守衛四名、傭人百四十七名、給仕三名、小使八名)の大部分は震災の來るや直に公園に避難せるが、當時芳賀(權四郎)所長は自己が所長として兼務せる北仲通五丁目所在農商務省絹業試験所に在りて此の震災に遭ひ、該試験所建物が僅に傾斜したるに止まり、其職員一同も無事避難せるを見届けたる後、生糸検査所に馳付けたるに既に職員中重立者七、八名のみ踏み止まり、他は横濱公園に避難したるも前記裏手の炊事場の倒潰下に壓せられ居るもの、發掘救助に努めて時間を費やし、漸く重傷者一名を救出したるは二時半頃にして、既に此時は検査所は火焰に襲はれたるを以て、芳賀所長は重傷者を扶けて平林、北尾兩技師及守衛某等と共に日本大通を馳せて横濱公園に向ふ途中、前方より一名の壯漢が「モウ公園ハ危険ダ海岸へ避難セヨ」と疾呼しつゝ馳せ來りたるに出會し、且つ該壯漢の後へには森岡警察部長の續けるを目撃し、這

は警察部長が該壯漢をして斯く叫ばしめ、以て避難民を指導するものなるべしと信じ(事實は左にあらざる警察部長は縣廳の最後を見届くべく決意し、單身横濱公園より再び縣廳に引返し來りたる途中にして、警察部長が叫ばしめたるものにあらず)同所より引返したるに此時は稅關方面は火の海にて、到底海岸に向ふべくもあらざるにより、警察部正門より縣廳内に立入り地方課、會計課の間を往復して凌ぎ居たるも、四時頃に至り縣廳は一面の火となりたるを以て此處を脱出し、稍々下火となりたる縣廳正門前なる英國總領事館門前の植込中に潜み火風毒煙に中り、焦死者窒息者の相次ぐ中に百死を免れ、午後六時頃に至り帽剣も帶びざる一巡査の馳せ來りて、横濱公園の却て安全なるを叫破するを耳にし直に公園に轉じ、既に同所に避難し居たる所員に對し善後の指示を爲したりと云ふ。

(8)、絹業試験所 農商務省絹業試験所は北仲通五丁目にありて、其の建物は木造にして僅に傾斜したるのみにて倒潰を免れたるも類焼せり、職員技師五名、技手十一名、書記二名、雇員二十四名、守衛三名、傭人四十六名中傭人一名避難途中壓死せる外他は異狀なく立退きたり。

(9)、横濱地方裁判所及區裁判所 横濱地方裁判所(區裁判所は其の内に在り)は北仲通五丁目に在り其の建物は二階建(少部分は三階)にして前後二面は煉瓦、左右兩側面は木造なりしが第一震に依り脆くも倒潰し、職員約百五十名中所長判事末永晃庫、檢事正代理福鎌文也以下左記三十四名、其の他辯護士佐藤博愛以下十一名及訴訟關係人六十餘名計百餘名の壓死者と多數の重輕傷者とを出したる後、廳舎は燒失せるが全廳舎が斯く脆

全	高久忠一
全	山口喜三太
全	竹内英
全	國重貞熊
全	新居茂
全	片山藤平
全	篠田武雄
全	宗尙喜
全	柴田基二
全	池田金造
全	根岸喜一
全	渡邊一郎
全	中野近良
全	岡本榮太郎
全	横濱水上警察署巡查

四〇

裁判所雇及給仕 七名
外に訴訟關係人 六十餘名

(10) 航路標識管理所 逓信省航路標識管理所は北仲通六丁目に在りて、明治元年頃の創設に係り元燈臺局と稱し今回の震災に大破損の上傾斜を爲し、纒かに倒潰と焼失とを免れたる構内北部埠頭に屹立せる燈臺(今試験燈臺と稱す)は明治六年頃外國人の設計に成りたるものにして、横濱としては古き歴史を有するものゝ一なりしなり。

同廳舎は第一廳舎より第四廳舎まで四棟及附屬建物二十數棟は概ね倒潰したる後、午後〇時二十五分頃廳舎南隣本町小學校より襲ひ來りたる火を受け、御眞影奉安所(御眞影は一時羅州丸に奉移す)試験燈臺、霧笛試験場を除きたる他の建物は何れも焼失せり。

當時在廳職員は判任以上六十名、雇員及傭人百六十名、中所長吉國兼三、書記川島喜久四郎、看守宗像徳衛傭人七名出入商人一名計十名壓焼死を遂げたるが、逸早く遁れたるものは辯天橋方面に出でたるも、遅れたるものは火に追詰められて裏手海面若くは西側運河繫留の運漕船に依りて、港内に碇泊中なりし全所所屬汽船羅州丸(二、三四〇噸)に遁れたるものと、運河を越へて東横濱驛構内に遁れしものとありたり、倒潰焼失したる建築物左の如し

第一應舎	木造二階建	倒潰焼失
第二應舎	八五坪	全
第三應舎	一家坪	全
第四應舎	九二坪	全

此外附屬試験場、光力試験場、練習生寄宿舎、文庫、倉庫（四棟）銅工、鍛冶、鑄物、機械、木工、製鐵各工場、物置（九棟）雜建物（十棟）及所長官舎、第二官舎、船員合宿所、物置浴室

残存建物左の如し

試験燈臺、霧笛試験場、御眞影奉安所

(11) 加賀町警察署 加賀町警察署は山下町二百〇三番地に在り、明治十四年の建築に係る煉瓦造二階建にして舊時外國人居留地を其の管轄とせる關係上居留地警察署と稱せしものなるが、全應舎は第一震に於て眞二つに炸裂し第二、第三震に依り粉碎せり、當時應舎内に在りし署長森警視以下三十三名中階上階下事務室に於て巡查部長浦上一二三以下巡查六名の壓死者と三名の重傷者を出せるが、森署長は恰も應舎階下東北隅の署長室にて執務中なりしも、全室煉瓦壁の大割目より部下一、二名と辛くも脱出し、他の脱出せる署員を指揮し下

敷となりたる署員を救出すると共に、留置人四名の解放等を爲しつゝある内早くも全署より、僅に三十間を距る南方全町二百〇二番地「アーレンス」繼續社方面より發したる火は、全署方面に向て猛進し來りたるが、此時警察部長より非常召集の傳令に接したるを以て、署長は署員を引率して午後〇時四十分頃横濱公園に參集し警察部長の命を承けたる後、園内西北の一隅に破碎家屋より外し來りたる一枚の板に、木炭にて認めたる署名札を樹て此を根據地として、直に避難民の指導救護方に従事せり。

全署應舎は午後一時頃類焼し、全署構内煉瓦二階建署長官舎は全署と共に倒潰焼失し、森署長子息は官舎屋外道路に於て他の倒潰物件の下敷となりて壓死せり。

全署應舎内に於て壓死せる者左の如し

巡查部長	浦上	一二三
巡查	東野	二
全	松本	二
全	今泉	三
全	須賀田	彦造
全	阿部	由藏

(東野巡查以下五名は巡查部長に昇進す)

(12) **横濱市役所** 横濱市役所は港町一丁目、真砂町一丁目に跨り、宏壯なる煉瓦造四階建(地下室共)一棟全二階建一棟連続し、此建坪四百九十四坪餘に亘り、明治四十四年の建築に係り横濱公園に面して港橋々畔に立てる市内有数の建築物たり。

震災の來るや纔かに附屬建物たる便所が倒潰せるに止まり、他は何等の被害を見ざりしも、其の動搖激甚なりしが爲、當時在廳せる職員約四百名中の大部分は何れも廳外に飛出し、公園内其の他に避難し廳内に残りたるは平塚に旅行し不在中なりし渡邊(勝三郎)市長を除き、青木(周三)、芝辻(正晴)兩助役、山田内記、田村土木兩課長の幹部外數名なりしが、是等の人々は此の建物の堅牢なるを確信して他に避難せず、他迄廳内に踏止まりて救助其の他の劃策を爲すことに決し、田村土木課長は助役の命に依り縣當局を訪はんと欲し、午後〇時二十分頃港橋通より境町、日本大通を経て縣廳に馳付け、正門前に於て安藤地方課長に面會したるも、既に同所附近も大混亂に陥り居りて是等の問題に就て協商するの遑あらざる爲、直に引返したるが此時は既に各方面に燻に火の手揚り、午後二時三十分頃に至り廳舎屋上の化粧塔に飛火したるも、内部に在りたる者は之に氣付かず、二階市會議場の天井の一部に燃へ下るに及びて之を發見し、前記の人々は七、八個の消火器を以て防火に努めたるも火勢熾烈にして亦奈何とも爲し能はず、午後四時三十分終に他に避難するの止むなきに至りたり、折柄横濱公園は大岡川を隔つる埋地より川越しに猛火を浴ふると共に、他三方よりも火に圍まれ園内幾萬の避難者は生存を期し難きの危機に瀕し居たれば、前記幹部の人々は此時まで廳舎事務室内に逃込み居たる約

百名の避難民に警告を與へて他に轉避せしむると共に、吏員等も亦廳舎脇なる港橋下繋留中の艀船中に飛込み物を被りて火の粉を防ぎつゝ約二時間を経過し、午後六時三十分頃火勢の衰ふるを待て上陸し、横濱公園に入り先に避難し居たる職員を驅り集め、此處に市の假事務所を開きたるが、廳舎は外形を残して内部は悉く燒燬せり。

各國領事館の被害(山下町内) 山下町内には米國(二三番地)(以下番地の二字を省略す)、英國(一七二)、露國(二七二)、和蘭(七五)、中華民國(一三五)、獨逸(一七)、伊太利(五一)、丁抹(二〇九)、瑞典(一二)、瑞西(九〇)、諾威(七五)、「アルゼンチン」(一〇八)、「ブラジル」(六)、「ベネヅエラ」(一三)、西班牙(二三)、「フィンランド」(七〇)、希臘(七三)、「チエツクスロバアツキア」(七四)、「バナマ」(七四)、「ベルギー」(一八二)、葡萄牙(七二)、「ボリビア」(九三)等の領事館あり、是等は倒潰若くは半倒潰の後齊しく燒失せるが、此内米國總領事館に於ては、副領事「ピー、イー、ゼンクス」は全廳内に於て壓死し、總領事代理「エム、デー、イー、キルジャツフ」は崩潰せる廳内より逃げ残りたる夫人を救助し、之を扶けて相共に避難せんとする途中縣廳前附近に於て火煙に捲かれて夫人と共に燒死し。

英國總領事館に於ては總領事代理「ダブルユー、ヘーグ」、商務書記官「エツチ、ホーン」書記「デー、イー、ワーデル」、全丸山昌言、全絹谷某の五名は壓死を遂げ、同時に全廳構内にありたる横濱市の記念名木玉楠は燒けて枯死せり、全所は横濱開港當時駒形水神の森にて、該玉楠の樹下の天幕張中にて米使「ペルリ」提督と徳川幕府の井

戸對馬守と、外交談判を爲したるの地なりしが爲、該玉楠は之を記念樹木として、保存せられつゝありたるものなり。

露國總領事館に於ては通譯入江長次郎、中華民國總領事館に於ては總領事長福、獨逸領事館に於ては書記「ジエー、マール」壓死し「ブラジル」總領事「バラダス」は市内太田町五丁目西洋料理店日盛樓に於て食事中全權の倒潰に依り壓死せり。

内外銀行會社の被害

(1)、三井物産株式會社橫濱支店 三井物産株式會社橫濱支店に於ては、其の事務室は或は燒燬し或は倒潰せるに獨り其の倉庫のみは激震猛火に耐へ得て毫も損傷せず、生糸羽二重等の多量在庫品を完全に保ち得て、之を震災直後米國に輸出し貿易復興の魁を爲し、以て震後金港貿易如何を疑問視つゝありし、海外經濟界に萬丈の氣を吐くと共に、震後意氣沮喪し居たる當地貿易業者に對し、一服の活蘇劑を投じたるは何たる壯快事なりしぞや。

同支店は山下町百七十七、八番地に在り其の營業種目は生糸、羽二重、石炭、雜貨輸出入にして其の建物は事務室三棟、倉庫二棟より成る即ち

事務室

A、鐵筋コンクリート五階建（地下室共）建坪百一十一坪（明治四十二年建築）

（之を本館と云ふ、「エレベーター」の設備あり）

B、木造平家建（大正九年建築）建坪約二十四坪

C、煉瓦造四階建（約二十年前建築）建坪約五十二坪

倉庫

A、鐵筋「コンクリート」四階建地下室共（大正九年建築）建坪約百六十坪

B、煉瓦造四階建地下室共（明治四十二年建築）建坪約百十坪

震災當日に於ける在社人員を調ふるに、社員支店長井上治兵衛以下百三十四名、備人約百六十名、出入取引商人約百九十名の外に、臨時出入者約百名を加へ、總計六百名近き人員にて震災の來るや、倉庫二棟及事務室本館（A）は倒潰を免れたるも、事務室（C）（煉瓦造四階建）は崩潰し、社員二十二名及小使四名之に死し、斯くて午後一時頃南方近距離と西方境町方面とより、火災の迫り來りたるを以て井上支店長は備人數十名を指揮し、建物全部の扉を閉鎖せしめ重要書類を搬出したる上、午後一時過ぎ一同橫濱公園に避難せるが、其後（A）事務室は外部を残して内部は燒燬し（B）事務室は遂に燒失したるも、倉庫二棟は其の構造の堅牢と地盤の關係とに因るものか毫も損傷を受けず、克く震火に耐へ在庫品生糸約八百萬圓羽二重約三十萬圓（震災直前の價額）とを完全に保ち得たり。

橫濱公園に避難し居たる同社員、備人及出入取引商人並に是等の家族等五百名以上は、全夜八時頃當港内碇泊

の同社所有汽船寶永山丸（九、〇〇〇噸）に移乗せり、然るに寶永山丸は米國航路船なるも、此時は臨時樺太より北海松材を積載して、震災當日午前十一時頃入港したるものにして、食料品の貯蔵の如きも少量なりし爲井上支店長は直に神戸支店に向ひ無電を以て當時の震災を報じ、救助船の急派を仰ぎ節食して救助船の來航を待つ内、社船榛名山丸が九月七日第一着に食料を齎らし神戸より救助に來りたるを以て、之に若干の人員を移して神戸に送り、第二着として讃岐丸が全月九日全地より來り、爾後數回に社員其の他を社船にて神戸へ移送し、結局重立社員約五十名は當地に残留し善後策を講じたり。

震災直後警察官の手薄に乗じ當地には、賊徒横行し九月五日白晝三井倉庫には人夫体四、五名の賊徒自轉車にて來り、倉庫三重扉の第一扉を破り、第二扉の錠前を破らんとしつゝありたる折柄、偶々社員一名此處に來合せ之を發見し、咎めたるに反つて恐喝を加へ來りたるを以て、社員は恰も社船に避難せしむべく伴ひ來りたる一名の田舎人の体軀の偉大なるを奇貨とし、同人に棍棒を持たしめ賊徒を追拂ひ、爾後倉庫の警戒を嚴にすると共に、加賀町警察署に訴へ其の保護を受け、斯くして震後諸方面の騒亂中萬難を排し全月十六日當港より、東洋汽船の春洋丸にて米國へ向け生糸九百九十五俵（一俵十六貫入、價額二千圓）を第一着に輸出し、爾後數回に輸出を續け以て經濟界を驚嘆せしめたり。

(2)、横濱正金銀行 横濱正金銀行は南仲通五丁目に在り、明治三十七年の建築に係り其の建坪本館六百五十三附屬建物九十坪、其の構造は地下室共四階、内部は煉瓦外部は花崗石造、門扉は鐵板、窓扉は採光硝子戸の外

部に鐵扉あり、家根は銅板にて葺覆す、地下室は倉庫、汽罐室（暖室用）、喫茶煙室其他一階は營業室、二階は重役室并客用室、三階は簿書整理室に充てありたり。

震災の來るや營業室等に於ける書架箱類の亂倒、机卓の轉頓を見たるも建物には別狀なし、重役等は地震には必ず火災の伴ふべきを慮り、行員を指揮して金品重要書類を悉く地下室の大倉庫に收納し了りたり、是より先き震災の突發するや、馬車道通に面する正門よりは約百名の避難民行内一階營業場に逃込み來り、又裏手なる辨天通に面する通用門よりも、亦約百名の避難民逃込み來り構内西手廣場に溜り居たり、彼是する中既に附近に火災起り刻々近づき來りたる爲、行員は廣場に居たる避難民を行内に呼入れ、午後一時頃全部の扉を締切り籠城するに決したるが、其れより間もなく階上（恐らく三階なるべしと思はるゝも明確ならず）に火が入りたるを知るや行員約百名、備人約四十名、避難民約二百名、計三百四十名は悉く南側（辨天通川崎銀行支店に面する方）地下室に下り蠟燭を点して明を取り居たるが、午後三時頃一階に火の燃へ下り來りたる頃には、地下室は息苦しくなり偶々地下室炊事場に汲み置きありたる、小桶一杯の水を持來り三百餘名が僅に唇を濡らして凌ぎ居たるも益々息苦しくなり、到底立ち居ること能はざるより皆「シヤガミ」たるも是亦耐へ能はず、遂に皆地面に偃臥するに至りたるが、此頃には低聲に念佛を唱ふる聲も聞へ、暗中の地下室は殆んご死を俟つもの如かりき。

斯る中に重役等は附近に猛火の來りたるは一時頃なれば、其れより約三時間經過すれば恐らく近邊の火災は

下火となるべきものとの見込を付け、今一時間！今三十分！の忍耐なりと一同に活氣を付け、一面に於ては辨天通川崎銀行に面する地下室は同行が焼けざる爲、街上に熱風火粉は渦巻き居れるも、少許の開閉を爲し能はざるにあらざ、依つて時々機を覗ひ急速に少しく明け新空氣を呼入れて互の呼吸を安らかにし、又地下室廊下傳ひに通用門入口に出て、硝子戸越しに外部の火災状況を管見しては之れを一同に傳へつゝ消火を待つ内、午後四時三十分頃に至り同行一階以上の内部は全部焼落ち、附近の火も亦概ね消火したるを知り一同地下室より立出たるときは、既に附近は一帶に燒野原となり居たり、爰に於て同行員及避難民は共に辨天橋を渡り、櫻木町前廣場に到り是れより各自の自由行動に任することゝし同所に於て解散せり。

斯の如くにして同行内に於ては行員及他の避難者に至る迄約三百四十名は、四時間半地下室の困苦に耐へ遂に一人の死傷を出さず萬死中に一生を拾ひ得たるが、若しも同行の窓扉が川崎銀行の夫れの如く二重鐵扉を以て造りありしならんには完全に屋内への入火を防止し、内部の燒燬を免れ得しならんかと思料せらる、是等の点は將來建築上大に考究すべき問題なるべし。

尙終りに全行附近の慘狀を述べざるべからざるが、全行附近は左隣に川崎銀行横濱支店の在るあり、何れも耐火建物にして全行の周圍又廣く、普通の大火なりせば當然安全に避難し得べき地なるを以て、逃げ後れたる避難民は全行附近に殺到したるも其の時には、二百餘名を地下室に收容して門扉を閉鎖したる爲、稍々後れて避難し來りたる者は正金銀行に入る能はず、其内火は四方より襲ひ來り正門前又は周圍石堀内に押重なりて打倒

れ遂に猛火の爲に燒死したる者實に百四十名の多きに達し、其慘怛たる光景は見る者をして歎歎止む能はざらしめたるものありき。

(3) **重なる内外銀行會社商店** 全署部内は山下町及關内に亘り内外會社其他商店の大なるもの頗る多し、今震災災に罹れるものゝ内大なるものを擧ぐれば

先づ銀行に於て山下町に在りては香港上海銀行(山下町二番)、「インターナショナル」銀行(全町七四)、「チャータード」銀行(全町一七九)、關内にありては十五銀行支店(本町二丁目)、三井銀行支店(本町二丁目)、第一銀行支店(本町五丁目)、第一百銀行支店(本町三丁目)、住友銀行支店(本町三丁目)、第三銀行支店(辨天通一丁目)安田銀行支店(海岸通五丁目)、横濱興信銀行(南仲通二丁目)、左右田銀行(南仲通一丁目)、渡邊銀行(元濱町一丁目)、第二銀行(本町三丁目)等

保險會社に在りては明治火災保險株式會社支店(山下町七三)、横濱火災保險株式會社(本町五丁目)、横濱生命保險株式會社(本町五丁目)、日本動産火災株式會社支店(辨天通五丁目)、共同火災保險株式會社支店(辨天通四丁目)、太平生命保險株式會社支店(辨天通四丁目)等

汽船會社に在りては日本郵船株式會社支店(海岸通四丁目)、東洋汽船株式會社(山下町五)、大阪商船株式會社支店(山下町五一)、加奈陀太平洋汽船株式會社(山下町一四)等

内外貿易商に在りては「チャードン、マゼソン」商會(山下町一)、「サミュエル、サミュエル」商會(山下町二七)、

「ストラツチャン」商會(山下町七一)、「シーベル、ヘグナー」商會(山下町九一)、「セールフレザー」商會(山下町一六七)、「デルオル」商會(山下町九一)、「デヴィス」商會(山下町一九八)、株式會社菅川商會(山下町二一〇) 原合名會社(太田町三丁目)、小野哲商店(辨天通一丁目)、若尾商店(本町四丁目)、遊澤商店(本町五丁目)、「サムライ」商會(本町一丁目)等

印刷業者に在りては福音印刷合資會社(山下町一〇四)、横濱活版舎(太田町四丁目)、南中舎(南仲通四丁目)等新聞社にありては横濱貿易新報社(本町六丁目)、横濱毎朝新報社(南仲通四丁目)、「ジャパンガゼット」社(山下町一〇) 其他東京各新聞社支局等何れも或は倒潰し、或は倒潰を免れたるも震火の爲に焼燼し、爲に横濱經濟界其の他に甚大の打撃を與へたり。

横濱取引所の被害 本町三丁目四十二番地南仲通三丁目五十六番地に跨る株式會社横濱取引所は、事務所本館木造二階建(建坪七十二坪)附屬建物木造平家建(全二十一坪餘)、市場本館煉瓦造平家(全九十坪)、全附屬建物木造平家建(全十八坪)、倉庫煉瓦造三階建(全二十四坪)、全煉瓦造三階建(全五十四坪)、倉庫前上屋(全十八坪)、文庫煉瓦造二階建(全七坪)、取引員事務所木造二階建(全十五坪)の九棟あり、此内市場本館は一部倒潰し、倉庫二棟は全潰したるが立會は既に終はり、仲買人其他は退散せる後にして、當時従業員常務取締役松浦積以下四十七名中重傷者一名を生じたるのみにて一同無事避難し、建物は午後一時頃本町四丁目及辨天通三丁目方面より來りたる火に依り類焼せり。

中等學校の被害

(1) 横濱高等女學校 全署部内に於て中等學校としては、元町四丁目所在私立横濱高等女學校の一あるのみ全校々舎は木造平家、二階建、三階建を通じて總て五棟(教室二十七室)あり、震災に當りては倒潰せざりしも南東山手町方面より襲來せる火に依り類焼せり、當時職員二十三名、生徒約八百名ありたるも夏季休學中なりし爲死傷者なし。

重なる「ホテル」、旅館并割烹店の被害

(1) 「グランドホテル」「グランドホテル」(株式組織)は山下町十七番地より二十番地に跨りて建設したる、宏壯なる建物にして、木造二階建一棟、煉瓦造二階建一棟、全四階建(地下室共)二棟計四棟(之が建坪は判明せず)あり四棟を通じて、客室のみにて百五十室、其の他の諸室亦多數ありき、震災に就ては煉瓦造四階建二棟の内一棟が崩潰し(恐らく他の四階建一棟も全様なりしならんと思はるゝも判明せず)其の後火災に依り、午後五時過に至り焼失せり、震災當時の従業員は支配人以下約二百四十名にて此内五十一名壓死を遂げたり、當日の宿泊客は約五十名ありて、此内約二十名は當日正午當港出帆の汽船「エムプレス、オプ、オースタラリヤ」號に搭乘して米國へ向け出發し、殘餘三十名中若干の死者はありたる模様なるも、當日渡米者を汽船に見送り居たる者もあるべく、市中に買物又は見物に立出て居たる者もあるべく、又在宿者中には幸運に避難せる者もあるべきも、災害後に於ける是等の總ての消息不明なれば果して幾何死傷し、幾何生命を全ふせしやは判明せず

又従業員宿泊客以外に商用其の他の用件にて出入せる者も多きを以て、是等の中にも若干の死者ありたるべきも是又判明せず、要するに總てを通じて約八十名近く死したるべしとは諸方面より聞きし所なり。

全「ホテル」は今より凡そ四十五年前の創立に係り、全町十一番地「オリエンタル、パレス、ホテル」と共に内外に聞へ、内外貴紳の宿泊する者多く曾ては露國皇族（帝政時代）、伊國皇族、印度王國の各殿下及暹羅現皇帝陛下も皇太子殿下にあらせられし時代に英、米御遊學の御歸途御宿泊遊ばされ、又米國大統領たりし「タフト」氏の如きも「フイリッピン」總督時代に宿泊せられしことありと云ふ。

(2)、「オリエンタル、パレス、ホテル」全「ホテル」（個人經營）は山下町十一番地にあり、建坪四百五十坪の煉瓦造五階建（地下室共）の宏壯なる建物にして、客室のみにて五十八室其の他諸室亦多數あり、明治三十一年に創立し全三十四年火災に罹り全三十六年再建せし所なり、震災に就ては直に崩潰し續ひて類焼の厄に遭ひたり、従業員約百有餘名中支配人佛國人「エル、コット」以下四十七名壓焼死を遂げたり、當時の宿泊客は外國人約三十名ありたるも之が生死の消息判明せず。

全「ホテル」は「グランドホテル」と共に内外に聞へたる「ホテル」にして、内外貴族の宿泊せる者少ならず曾て印度王族、獨逸、支那、丁抹の各皇族殿下御宿泊遊ばされ、英國「コンノート」殿下も御食事の爲成らせられしことありたる由なり。

右の外旅館として重なるものを擧ぐれば、住吉町六丁目福井屋、本町六丁目大勢屋、全所津久井屋、尾上町六

丁目小田原屋、太田町三丁目伊東屋等あり。

(3)、「千登世」住吉町六丁目千登世は澤田このの經營する所にして、明治十四年の開店に係り相生町八百政と共に市内割烹界の雄たり、全店は木造七棟（七棟を通じての建坪七百三十五坪）と倉庫二棟（一は石造十八坪、一は煉瓦造三坪）とありしが、注吉町通に面するに二階建一棟傾斜し、玄關脇の三階建一棟倒潰し、家族十名雇人四十八名中女中四名壓死し、午後〇時四十分頃住吉町五丁目六道辻及背面尾上町六丁目方面とより來りたる火に依り焼失せり。

(4)、「八百政」八百政は明治三十六年の開店に係り畠山ふぢの經營する所にして、住吉町千登世と東西に覇を唱ふ同店は木造三棟（三棟を通じ建坪四百五十坪）と倉庫一棟（土藏六坪）とあり、總ての建物倒潰し家族二名雇人四十八名中女將及雇人十四名壓死し、午後一時頃相生町四丁目及三丁目より來りたる火に依り焼失せり。

寺院及著名建築物の被害

(1)、「増徳院」増徳院は元町一丁目の小高き丘上に西面して建てられ、眞言宗高野山派に屬し横濱開港以前よりある古刹にして市内有數の大伽藍なるが、彼の震動に依り建坪百二十坪木造の本堂を残し庫裡、位牌堂、寶藏并に其の附屬なる藥師堂（元町藥師として有名なるもの）及辨天堂は皆倒潰し、僧侶雇人等は庫裡に於て下敷となりたるも大なる負傷もなかりしが、本堂其の他總ての建物は全町一丁目堀割川沿岸方面より燃へ出せる、猛火の南進して山手寄りなる全町代官坂及觀音坂方面に延焼したるものが、俄かの風變りに依り引返して北進し來

れるに會し午後三時頃に至り遂に焼失せり。

(2) **開港記念横濱會館** 全館は本町一丁目、南仲通一丁目に跨り在り、横濱開港記念として大正六年の建築に係る其の構造は煉瓦造三階建(地下室共)建坪四百六十二坪餘にして、建物の東北隅の一角には高さ百十五尺の尖塔聳ゆ、本建物は震災には殆んど破損を生ぜざりしも太田町一丁目方面より焼け來りたる火に依り外形を残し内部は類焼せり。

本建物は市が管理して市民の公會場に充て、且南面の一角には横濱商業會議所の外に、横濱海産物同業組合横濱蠶糸同業組合、横濱輸出同業組合等の事務所置かれ、地下室には簡易食堂を設けあり本町食堂と稱したり(3) **中華會館** 中華會館は山下町百四十番地に在り、在留支那人の公共建設物にして、在留支那人重立者數名之が役員に就任して館務を處理し、在留全國人の爲救済、衛生、其の他の庶事を斡旋し館内には中華商務總會(支那商業會議所)を置き、又館内一隅には關帝廟を安祀し、全國人は總ての祭事を此處に於て舉げ居たり。全建物は煉瓦造平家建なりしが震災に崩潰し續ひて類焼せり。

(4) **「ユナイテッドクラブ」** 全「クラブ」は山下町四番地にあり、在留上流各國人の社交機關にして、約五十年前の創立に係る、之が會員は約二千人(各地方に散在し居る者も併せて)にして震災當時、當地居住の會員は約四百名あり、各國大使、公使は勿論當地に於ては知事、裁判所長、検事正、税關長等皆名譽會員たり、其の建物は煉瓦造四階建(地下室共)なりしが崩潰後續ひて火災に襲はれ、従業員六十五名中二十五名と來館中

の外人二十名と計四十五名壓死せり。

(5) **「インターナショナルビルディング」**(萬國館) 全館は山下町七十四番地に建てられたる石造四階建(地下室共)建物にして昇降機の設けあり、明治三十年頃の建築に係り貸間數十室ありて、内外會社商店の此に事務所を置くもの多く、本邦此種「ビルディング」の建てられたる最も早きものに屬す、本館は崩潰後焼失す。

(6) **其の他の寺院教會** 其の他神社に於ては琴平神社(元町二丁目)、教會に於ては海岸教會(山下町一六七)、指路教會(尾上町六丁目)、教育及社會事業を目的とする基督教横濱青年會館(常盤町、尾上町一丁目)等皆被害に罹りたるも青年會館は鐵筋「コンクリート」造なりし爲内部の焼燬に止まりたり。

被害を免れたる重なる銀行會社

(1) **川崎銀行横濱支店** 川崎銀行横濱支店が激震熱火の裡に在りて其の建物は何等の毀損を受けず、其の行員は全支店が火災の包圍を受くる以前に建物の扉を閉鎖し、悠々安全地帯に引揚げたるは眞に奇異なる事實なりとす。

全支店は辨天通五丁目に在りて、震災襲來の際に於ける在行員は岩田(達夫)支店長以下行員約三十名にして第一震に當りても建物の非常に堅牢なるが爲、附近民家の倒潰多きに反し同行は大動搖は感じたるも、何等の破損を受けざりしを以て、附近の住民は同行の建物を安全なりと恃みて、店内に逃込み來りたる者約五十名に上れるが次で第二震の來るや之に驚き、避難民は復た屋外に逃去りたり、然るに第一震後約二十分を經過し筋

向ふに當る辨天通四丁目より發火せるを知るや、全行に於ては急遽金品簿類を大金庫に收納し、門戸窓扉等を密閉し建物の絶對安全なるを確信し、小使二名を地下室に留めて後事を守らしめ、行員は午後一時頃神奈川方面の安全地帯に引揚たるを以て全行員は震火に際し、他の市民の如く生死の間を彷徨するの悽愴なる苦痛を味ふことなきの幸福を見たり、而して行内に留まりたる小使二名は裏手の通用口を開けて四邊の光景を覗ひ居たるが猛火は進み來り附近住民の迷惑ひ居たる者、約二十名を行内に收容して地下室に立籠りたるも、北隣正金銀行迄も焼燼したるも、全行のみは何等の被害なく遂に此の苦痛を見ずして生命を全ふし、且つ書類簿冊等損傷なかりしは殆んぎ横濱市中の一奇跡なるの觀を呈せり。

斯の如く全行が他の偉大なる堅牢建築物の多くが陥落せる中に在りて、獨り最後迄安全を克ち得たるは偏に其の建築物の入念なる構造に因るものと認めらる、全行は大正十一年の建築に係り其の構造を見るに、鐵骨煉瓦及石造三階建にして總建坪百五十坪あり(西裏手に鐵筋「コンクリート」建の倉庫及附屬室あり)壁の厚さは約二尺五寸ありて、其の内面は鐵骨煉瓦、外面は花崗石なり、窓は鐵扉を二重に下し外扉と内扉と約一尺の空間を保ち、内扉の内側に更に採光硝子戸あり、之が硝子は分厚にして之を堅牢なる鐵骨に簾込あり、右鐵扉は窓直下壁上に附しある戸扉閉閉栓を一捻すれば外扉下り、更に一捻すれば内扉下るの装置にして、其の戸扉の開閉は容易にして且つ神速なり、若し之が他の如く一枚扉に止まりしならば、或は其の運命の如何は計り難かりしに開閉神速にして、二重扉なりし結果は遂に猛火を防ぎ得たるものゝ如し、後來建築をなさむとする者は

宜しく鑑みるべきものなりと思惟す。

(2) 回漕店石川組 燎原の火の中に在りて類焼を免れたる川崎銀行と、回漕店石川組及朝田回漕店とは正に市内に於ける三大奇蹟と爲すべきなり、合資會社石川組は元濱町一丁目一番地に在りて、朝田回漕店と相隣す其の建物は、大正七年の建築に係り鐵筋「コンクリート」造五階建(地下室共)にして、其の窓には重に鐵扉を設けあるも、北面四階及五階の一部には硝子戸のみのものあり、震災には何等の破損を來さず、同店代表者石川義明其の他の店員は或は他に避難し或は外出中の者あり、店内に居残りたるは青年社員宮尾清次郎外五名なりしが、午後二時頃より附近には猛火襲ひ來りたるより、彼の六名は戸扉を鎖して店内に立籠り居る内、四階五階の窓際には往々火の燃へ移らんとするを以て、平素は使用せざる地下室の井戸より「バケツ」其の他の容器にて水を汲み揚げ、風向を見計らひては窓際を濡らし、以て防火に努めつゝある折柄午後四時頃直面せる縣廳の最後近づくと思しき頃、立籠りの鐵扉を破るゝばかりに打叩く者あり、依て機を計り打開き見れば一名の避難者なりしかば之を内に引き入れたるに、之れより後れて繼續的に逃込み來りたる者約二十名に及び、店員等は身を焦し來りたる避難者を地下室に導き「コンクリート」堅めの室内一面に淺く井水を湛へて、肌を冷さしめ且つ氣息奄々たる者には有合せたる「ウ井スキー」を氣付として與へて救助し、斯くて全店建物は終ひに首尾よく類焼を免れ、内部に立籠りたる者も一同無事なるを得たるが、更に不思議なるは五階屋上の露臺(「コンクリート」面)に堆積しありたる、約半噸の暖爐用石炭に飛火か移り盛に燃焼したるに拘はらず、建物には燃

移らざりき、斯くの如く四面屋上火を以て包圍せられながら、克く焼燼を免れたるは風の方向が屢々變化し、一方面のみを久しく燻ふることなかりし結果に因るものなるが如し。

(3)、朝田回漕店 朝田回漕店は朝田權四郎の經營に係り元濱町一丁目一番地に在り、回漕店石川組と相隣し不思議に類焼を免れたるもの、一なり、全店は鐵筋「コンクリート」造四階建（建坪六十五坪）一棟と其の背面に鐵筋「コンクリート」倉庫（建坪三十一坪）一棟とあり、震災には何等の破損を生ぜざりしも、附近に火災の起るや在店員約二十五名は、全店建物の窓扉が總て硝子なるを以て到底火熱に耐へ得ざるを慮り、一同他に避難せる後に至り、倉庫は附近よりの火に依り内部焼燼し、店は南隣渡邊銀行より襲ひたる火に依り三階内部を焼きたるのみにて止まり、二階及階下事務室に異状なかりしが、這は渡邊銀行に接する南側は全行が崩潰し其の崩残りたる煉瓦の外壁が恰も防火壁の如く、朝田回漕店の一階より二階までの部分を蔽ひ居たるが爲と、表面入口は税關西門通を隔て、縣廳西門の西北隅の倉庫に面し、其の間の道路幅員相當に廣きと縣廳の倉庫が自然的の防火壁を爲したると、且つ風の方向の變化速かなりし結果とに依り、硝子の如き脆弱なる戸扉に在りながら尙且類焼を免れたるものと認められたるが、全店々内には店員の他に避難後他より避難者の逃込來りたる者相當多きに上りたるが如き形跡あり、地下室には翌朝まで居残り居たる避難者四、五名ありしと云ふ。

斷崖の崩潰

淺間山の崩潰 淺間山は元町二丁目に屬し山手町の地續なる丘陵にして陵上には淺間神社の小祠安置しあ

り崖腹に百數十段の石階を刻まる、之が境内は狹隘なるとも二、三の民家あり、眺望佳絶にして明治八年頃發兌せし横濱地名案内と云へる繪本中に「淺間山暮雪」と稱し市内八景の一に選ばれ、全八景中の「伊勢山秋月」と南北相對し、夙に市内の名勝として著はれ、殆んき東京芝罘岩社の石階の勢驚たるの觀を呈し居たるが、震動に依り丘陵は石階のありたる最高所約二十五間の頂上より、約八百坪崩潰し丘陵上の民家一、二戸は土砂と共に顛落して崖の中腹に引懸りて、後刻崖下より襲はれたる猛火の爲に燃焼し、崖下に在りたる民家の中十四戸は落下せる土砂の煽りを受けて、前方に彈しき出されて顛覆し若干の死傷者を生じたり。

火災の状況

全署部内に於ける火災發火場所は二十ヶ所と云ひ、二十三ヶ所と云ひ又二十六ヶ所なりと云ふも、大混亂時の事實なるを以て正確に調査し得ず、然れども全署の調査に依る發火場所は別表の通十七ヶ所にして、發火時刻の如きも午後〇時二十分頃發火せる山下町二百二番地「アーレンス」繼續社以外は正確ならざるも、其の時刻に三十分の徑庭なきことは火災の状況より推して明瞭なるが、震後二時間を出ずして全署部内の四方に火災起り午後五時頃には大建築を除き大體燒落たり、而して出火原因の如きも正鵠を期し能はざるも、恰も午時に際し各家庭共厨房火氣を存したるに基因するも、發火の早かりしは飲食店、料理店、菓子商等多く火氣を使用するの家に在りては火氣旺なる上に、家屋倒潰して之に覆ひし爲急速に火を發するに至れるが、火災當時は烈風なりしと共に火勢の猛烈を加ふるに従ひ、旋風の各所に起りしを以て隨所に飛火し、全署全管内中二、三の建物

を残し殆んど全部を焼燼せしむるに至れるが、其の原因は左の四、五點に歸するを得べし。

- 一、水道の破烈
- 二、午餐時にて火氣使用の多かりし時期
- 三、風力の強烈
- 四、發火場所夥多にして然も水道破壊され消防署員の活動力減退
- 五、震災に因り消火機具の損傷及道路の閉塞

全署所轄は第二消防署の管轄に屬し「アーレンス」繼續社とは距離近かりし爲直に出動せむとしたるも、震災に依り消防署は倒潰し「ガソリン」唧筒は倒潰煉瓦の下敷となり、搬出絶對に不可能に陥り止むなく、消防署員數名は消火用「ホース」のみを手にして逸早く馳付たるも、之又時已に水道管破裂し濁水地上を没し、消火の方法なく、破壊消防の効も奏せず、空しく引揚ぐるの止むなきに至れり、斯の如くにして山下町二百二番地「アーレンス」繼續社方面外二ヶ所の火は山下町一圓を、辨天通、本町、太田町方面に起りし火は關内一圓を、元町五丁目の火は元町全部を各焼燼するに至れり。

(發火場所は後段一覽表に詳記す)

罹災民避難状況

山下町方面に於ける罹災民は山下町海岸、新山下町埋立地及横濱公園に、元町方面は新山下町埋立地山手町外

國人墓地及山手公園を主とし、港内に近き關内方面は新港税關構内へ、横濱公園に近きは全公園其の他は到る處の適當なる廣場を求めて避難せり、而して最も避難者の多數なりしは横濱公園内にして、之に亞ぐは新山下町埋立地内なりし、此の二ヶ所は壽、山手兩署管内の居住者も殺到し、午後二、三時頃は人と搬出荷物を以て充滿せり。

(イ) 横濱公園 横濱公園は面積一萬九千五百六十坪あり關内、山下町の間介在し、大岡川を隔て、埋地に臨み、且市内平地面に於ける最好避難地なるが爲、罹災民は雪崩を打て之れに逃込み來り、午後三時頃を最終として其の數約六萬人と註せらる、公園は四面より猛火の包圍を受け、降り注ぐ火の粉は吹雪の如く、街路に面せる四隅は民家の延焼に依り、殊に強烈なる火熱と毒煙とを受け、五時近き頃に至るや關内西側にある横濱社交俱樂部の燒くる際の如きは、避難民の全部が殆んど窒息するかと怪まれ、關内南隅「グラウンド」に於ては遂に五十名の窒息者を出し、又東隅築山に於ては山下町方面空中より飛來りたる、壓縮瓦斯管に打たれて即死せるもの三名に上りたるが、幸にも園内に水道鐵管の破裂に依り一面の池沼と化し、中央の最も深き場所は約四尺、最も浅き部分にして約一尺五寸あり、又所々に樹木の植込も繁茂し居たるを以て、罹災者は皆是等泥水に身を没し、又は身に纏ひ居たる衣類等を水に濡らして身を蔽ひ、又は樹下に身を潛めたるも尙且つ衣類を燃やし肌を焦がすもの勝て數ふべからず、眞に焦熱地獄を現出したるも夜に入りて、四方の火勢の衰ふるを待て纔に生命を全ふせり。

附記 若し横濱公園にして水道の破裂して一面池沼と化すなく、又風向變化するなかりし時は東京に於ける被服廠跡の惨事以上の惨事を出現すべかりしも、僥倖にして叙説の如く水道の破裂と地面凹地なりし結果多数の死者を出さざりしものなり。

(ロ) 新山下町埋立地 新山下町埋立地は其の面積九萬餘坪あり、震災當時は未だ何等の建物もなかりしを以て、最好の避難地たりしが故に山下町元町及山手町方面より、之に逃來るもの一時は約四萬と聞へしが、海嘯來の聲は是等の者に大なる恐慌を興へ、茲に留るの甚だ危険なるを思ひ多くは引返して、山手又は本牧方面に逃去り、結局當夜を此處に明かしたるは僅に一千名内外に過ぎざりし模様なり。

(ハ) 山下町海岸 山下町及關内一部の火に追はれたる者にして、山下町海岸に赴きたる者は猛烈なる南風の追撃を受け岸上に留まる能はず、折柄の干潮を幸に山下町二番地先より十一番地先迄の海面に立入り、海水に浸りて岸上の火勢の衰ふるを待ちたるもの數千名に達し、本海岸に於ける燒死者は僅に六十八名の少數に止まりしは僥倖なりき。

(ニ) 汽船 山下町關内方面より猛火の追撃を受け、棧橋及税關構内より新港岸壁に逃れたる者は、到底陸上に留ること能はず、棧橋繋留の英船「エムプレス」、オプ、オースタラリヤ號、佛船「アンドルレボン」號及新港岸壁「これや」丸(全船は岸壁崩壊に依り船体に損傷を受け離岸沖合に出づ)其他港内に碇泊せる諸船内に投乗避難せるもの其の數夥多に上れるが、沖合の船舶に避けたるものは何れも舢舨に依り、或は泳ぎ付けたるものなり。(此項は別に後段詳細記録するに付簡略に記す)

其の他の避難者は火災の包圍を受け逃ぐるに途なく自ら水に投じて死し、或は煙の爲窒息し又は燒死せしもの頗る多く、特に酸鼻を極めしは馬車道通横濱正金銀行前、川崎銀行支店附近、馬車道電車交叉點及六道の辻等に於ける廣場の如きは是等窒、燒死体累々として横はり、正金銀行附近には百四十名、川崎銀行支店附近には八十名、電車交叉點には三十名、六道の辻には二十二名を算したり。

第二節 伊勢佐木町警察署管内

震前

吉田橋畔に立ちて西望すれば大道一線遠く西に走り、其の末霞裳を拂ふの概あるものは、之を伊勢佐木町通なりとす、此の路線に當りては行人常に雲集し、各種興行物其の他の彩旗簇立して風に翻り、大百貨店、銀行、割烹店等の高樓參差として聳へ、數百の店舗は軒を并べ、店頭は裝飾は燦然として人の眼を射り呼聲賣音は行人の履響に和し聾々然として耳を聳する斗りなるが、此の熱鬧地域こそ當市唯一の娛樂地にして市の中央に位すると共に亦全署管内の中心點たり。

全署部内は此の伊勢佐木町通を中心點として、市の中央部三十八ヶ町を占め、南太田町の丘陵上に在る久保山一帯の住宅地と弘明寺町及井土ヶ谷町との一部を除けば、殆んき總てが般賑地にして、東は大岡川を隔て、關内に接し、南は吉田川を境として埋地及南吉田町を控へ、遙かに中村町の丘陵を望み、西は遠く展開

して弘明寺町に及び、久良岐郡大岡川村に隣りし、西北は野毛町、日ノ出町を限りとして伊勢山及税關山に面す、櫻木町には省線電車櫻木町驛と之に並びて貨物線東横濱驛あり、市内電車は北(神奈川)より南行するものは櫻木町を経て大江橋より關内(加賀町警察署部内)に入り、吉田橋より再び全署部内に入り來り、伊勢佐木町入口より左折し羽衣町より右折西行し足曳町に到り、左折し吉田川に沿ひて又西走日本橋に於て二線に岐れ、一は右折して戸部線となり、一は三度ひ西走し駿河橋に於て又二線となり、一は西走弘明寺町へ向ひ、一は南走して八幡橋へ向ふ、主要道路を擧ぐれば第三十一號國道(東京横須賀鎮守府間)は神奈川より來り、櫻木町に於て同署部内に入り、關内を抜け吉田橋を渡り伊勢佐木町通を貫き、長島町五丁目に於て左折日本橋を渡り南へ去り、龜の橋通は南より來り蓬萊橋を渡り全署部内に入り、蓬萊町、羽衣町を通り北向し吉田町通を経て野毛町通に合し、日ノ出町通は縁橋通より花咲、野毛町を貫き、日ノ出町に出て初音町に到り、長者町通は千秋橋より同署部内に入り來り、伊勢佐木町通を横斷し長者橋を渡り日ノ出町に到りて止まり、末吉町通は長者町九丁目より西へ走り南吉田町に到り、伊勢佐木町通は吉田橋を起點とし伊勢佐木、松ヶ枝、賑町を経て長島町に及ぶ。

轉じて繁榮状態より云へば、此地一帯は叙説の通當市唯一の娛樂地にして、四十餘萬の市民は機會に觸れ折を見て皆此の區域に集まり來り、耳目の娛みを取り口腹の慾を満し、又日用百貨の購買を爲すが故に、是等の機關備はらざるはなく、先づ娛樂方面より云へば、活動寫眞常設館には横濱館、横濱電気館、横濱角力

常設館、「オデオン」座、又樂館、敷島館あり、劇場には喜樂座、朝日座及横濱座あり、割烹店の名あるものは鈴長、登喜和太田樓、富貴樓、金田、七五三等あり、從て此の境地に絃歌夕に涌く教坊の開け居ることは謂ふ迄もなし、若し夫れ一大房窩内に於て口腹のことより、百貨の購買に至る迄のことを辨ぜむと欲せば、野澤屋吳服店、福井屋吳服店、越前屋吳服店等の百貨店あるあり、銀行には平沼、報德、興信、左右田等あり。

伊勢佐木町界限に次く般販地は、野毛通及吉田町通とす、此の街巷は戸部、西戸部、方面と伊勢佐木町方面との要路に當るが故に往來織るが如く、酒樓の如きは大なるものなく、又興行物等はなしと雖町容の美に至りては敢て伊勢佐木町通に譲らず、之れと櫻川の一水を隔て、櫻木町通あり、同所は車馬の交通驛として絶間なく、國道筋に面しては櫻木町驛、東横濱驛あり、大建築物には横濱商品倉庫、横濱市教育會、神奈川縣農工銀行、海外渡航者検査所、横濱市中央職業紹介所等ありて市に美觀を添ゆ、此の外部内には官、公衙、教會、寺院等の大なる建築物少なからず、又西方南吉田、井土ヶ谷、弘明寺町邊は近時異狀の發展をなし、別けて井土ヶ谷、弘明寺等は花柳の巷として一小天地を拓き居たり。

以上の如く全署部内の中心點は市民の歡樂の巷として、常に民衆の雲集せるが故に一度震災の此の境地を襲ふあらんか、想像以上の慘事を醸出すべきは寧ろ當然のことと謂はざるべからず。

震 後

全署部内は市内に於ける般販地中の般販地にして、殊に伊勢佐木町界限には一大歡樂境を展開し群衆は常に層

摩撃の状態を演出し居れるが、彼の震災當日は恰も土曜日なりしも、其の震動の來りし時が午前中なりしこそ幸ひなれ、若し不幸にして正午過ぎなりしならんか、尙一步を進め夜に入りてならんか、各種興行場には入場者充滿し、各種店舗には民衆蝟集し、街衢は人を以て埋め居りしならん、此の時此の場に震災起り火災發せんか、實に此の一帶の地上は寸隙を餘さず死屍を以て蔽ひ去るべかりしやも未だ知るべからず、然りと雖人出少なりし午前中起りし震火にあり乍ら、尙且部内のみに於ける死者約一萬二千五百五十三、傷者約二萬四百四十九、行衛不明者約二千百を出すに至りては、亦其の慘狀の如何に大なるかを知るに足らん。

部内の大厦は殆んど第一震に於て倒潰せざるは稀れなるのみか、次で八方に起りし火災は壓死を免れたる民衆を四方に追ひ詰め、混亂窮迫殆んど忍びざるの慘狀に陥らしめしが、今最も戦慄すべき慘禍の跡を辿り視るに、先づ伊勢佐木町通の興行場にありては、土曜日なるが爲正午より開場するもの多く、僅に喜樂座、朝日座又樂館等のみが開場し居たるも未だ入場者は多からず、其の内倒潰せるは又樂館を除きたる二場にして、喜樂座は最も急激の勢ひを以て倒潰せしかば、死者十八名を出し、朝日座は四名に止まり、他は辛くも避難し得たり、而して大建築物中災後に至る迄無殘の殘骸を止め、見る者をして覺へず戦慄せしむるものは、伊勢佐木町警察署左右田銀行松ヶ枝町支店、長者町郵便局、私立中學關東學院(南太田町)、株式會社服部紡績會社(全上)、横濱屠場株式會社(井土ヶ谷町)、横濱燃糸織物株式會社(全上)等の崩潰状態なるが、長者町郵便局に於ては四十名、服部紡績十六名、左右田銀行十九名、野澤屋呉服店二十名、越前屋呉服店十名の壓、燒死者を出せり。

次に猛火に追はれ逃げ場を失ひ一ヶ所に死屍の山を築きたるものを擧ぐれば、黄金町三丁目末吉橋附近鐵道省電車大船延長線の軌道敷地内に於ける二百名以上と、梅ヶ枝町東本願寺別院構内及其附近に於ける三百名以上の燒死者と、末吉橋附近の河中和吉田橋附近の河中に於ける無数の溺死者なりとす、黄金町三丁目省電軌道は其の當時工事中にありて附近街路の狹隘なるに反し、軌道敷地は幅員約二十間以上もあり、且黄金橋通の道路と三角形を爲せる廣場なりし爲、附近住民は震災の來るや火急を避くる最好適地なりとして皆此に集注し中には若干の家財を搬出し來り、以て震動の鎮靜を待ちつゝある中、何ぞ圖らむ初音町、黄金町方面と前後左右に起れる猛火は折柄の南東烈風に煽られ、見る／＼延焼し來り、軌道内に在りたる避難民は最早火災に包まれたりはり、埧場中に墜落せるが如く無殘の燒死を遂げ、同時に此の附近の河岸通に在りたる者も同様の運命に陥り、大岡川に溺死せる者其の數を知らず、轉じて梅ヶ枝町東本願寺別院の慘狀を見るに、震災の來るや附近避難民は他の民家の多くが一齊に倒潰せるに、獨り全別院の木造建築書院が倒潰を免れ泰然たるのみならず、其の構内に約三百餘坪を有する廣庭のあるを見て、甚だ心強くや思ひけん、此處に逃げ込み來る者無數にして、一息付く間もなく附近妻見町、蓬萊町方面より起りたる火災は、猛然たる勢ひを以て襲ひ來りて、四方を圍みたるが強壯なる男子の如きは若干猛炎を突破し他へ逃がれ去りしも、弱者及傷者等は如何とも爲す能はず、庭内及附近に折り重りて終に約三百名燒失せるが後に至り、死屍を検すれば其の内の多くは、婦女及老幼のみなるに至りては誰か涙を催さざるべき。

又吉田橋附近の惨状を視るに、最初關内の一部及伊勢佐木町方面の民衆は強震に脅かされるや、吉田橋々詰めの三角形を爲せる廣場と、兩岸の街路に一時立退き形勢を視ふ中、諸方に火災起り刻々に攻め寄せ來り、最早他の方面へ逃るゝの路を遮断せられ、已むなく大盤石の橋上に群衆の山を爲し、或は船舶中に避難する中猛火は愈々進み寄り人の肌を焦し、到底河岸或は橋上に止まるを許さず、此に在りたる群衆は雪崩れを打つて河中に墜落し、船舶は際限なく押込みたる人の爲に一堪りもなく顛覆し、其の顛覆せざるものは人と船と共に焼かれたるが此の河中の死者に至りては其の數を測定すべからず、何となれば死屍は干潮時に水と共に海に流れ去り、其の留まりて河中に浮漂し居たるは一部分に過ぎざればなり。

地上面に於ける龜裂及陥没は殆んど部内の全般に亘り居れるが、就中其の最も甚しきものを舉ぐれば、全署附近及吉田川沿岸の電車軌道は激烈に破壊せられ、敷石は軌道外に撥ね飛ばされ「レール」は曲りて鈎の如くなれるあり、その他吉田川、大岡川沿岸に於ける地面の龜裂し、或は陥没して車馬の交通を断てる箇所は殆んど枚舉に遑あらず。

同署部内の被害を數字上より見れば、死者約一萬二千五百五十三名、傷者約二萬四百四十九名、全焼一萬四千六百九十五戸、全潰四百八十一戸、橋梁の墜落焼失十九に及びり。

以下全署部内に於ける重なる官、公衙、銀行、會社、大商店、各種興行場、寺社、中等學校、病院等の個々に亘る状況及其他火災状況、罹災民避難状況を記すれば次の如し

官 公 衙 の 被 害

(1) 伊勢佐木町警察署 全署は吉田橋々畔伊勢佐木町三丁目二十五番地に在り、其の構造は煉瓦造二階建にして其の裏手に署長官舎を置かる、廳舎建坪は百四十四坪、官舎建坪は二十二坪あり、全署は舊時横濱警察署と稱し、去る明治三十二年八月十二日夜雲井町より發火し伊勢佐木町を中心として、其の附近約三千五百戸を焼拂ひたる大火の際に類焼し、越へて全三十四年再築せし所に係る、廳舎は大岡川岸に在り然も相當古き建物なりしを以て、大地震の襲來あれば倒潰すべしとは豫想したりしが、果して震災襲來するや第一震にて殆んど崩潰し、北側に屬する三分の一は大岡川の河中に顛落し、更に第二震に於て其の大部分は又河中に顛落し、署長官舎も亦崩潰し、署長夫人及子息は下敷となり夫人は重傷を負ひたるが、廳舎及官舎は午後〇時三十分頃廳舎の南側直前なる姿見町より發火せる火に襲はれて焼失せり。

當時全署の定員は署長柴(傳吉)警視以下百七十八名にして、此の内廳舎に在りたるは柴署長以下約三十名なるが、巡查田中平次郎、池田萬の二名のみ壓死し他は何れも廳舎外に脱出したり、全署の如き無慘なる崩潰中に在りて僅に死者二名のみに止まりたるは寔に奇蹟なるが、斯は廳舎が川沿なりし爲河岸の陥没に依り、兩壁幾分開きつゝ倒潰したるに依るものゝ如しと云ふ(署外に於て勤務中壓死せるもの巡查白鳥由太郎、全石井範の二名あり)

柴署長以下の在署員は廳舎の倒潰と共に、廳舎外に脱出したるに此時には早くも、吉田橋々詰の廣場に避難し

來るもの雲霞の如くなりしかば、署長以下は極力是等避難民に對し安全地帯の指導を爲す裡、續ひて火災起りたるを以て、第一消防署伊勢佐木町屯所と協力消防に努めむとしたるも、消防器具は置場倒潰の爲、全部下敷となり、僅々水管腕車一輛ありたるも水道鐵管破裂して斷水し、注水不能の折柄火災は各所に起り、猛火は烈風に煽られ危険は刻々署員の身邊にも切逼し來り、燒死を待つの外なき状況に陥れるを以て、署員各自は群衆を安全地帯に指導避難せしめ、火災終了後に一地點に參集すべき事を命令し、一方の活路を得て避難せしめたるが、柴署長は次で避難し來る者も尠からざると共に、吉田橋附近迄避難し來りたる者も進退谷まり空しく死を俟つが如き者多きを看取し、之を救済すべく部下五名と共に最後迄踏止まり、火は刻々と猛烈を加へ到底橋上に止まるべくもあらず、其の内窒息する者燒死するもの等漸次多からんとするの狀あるを以て、署長は大聲叱呼して橋上の避難民を河中に入らしめ、僅に頭部のみを水上に出さしめ附近にありたる、塵芥又は炭俵、葦等を頭上に冠らしめ、署長と共に殘留したる署員にて之に泥水を掛け、僅に苦熱の下に呼吸せしむること約五時間に及び、附近一帶燒落たるを以て壯者は之を横濱公園又は櫻木驛前の廣場に避難せしめ、遂に橋下に一夜を明して四百有餘名の生靈を救ひたるが是等避難民が熱風裡に在るの時は何れも生きたる心地なく、全く焦熱地獄裡に在りて殆んぞ失神する者さへ出し、かば之等の者に對し伊勢佐木町署長此に在り安神して數時間の辛抱を爲せと、大聲呼はりつゝありたる光景は殆んぞ生不動尊の如かりしとは、當時此橋下に生を完ふせしもの言なりき、聽て天明となるや伊勢佐木町署長は署員をして附近より燒残りの食糧を集め、之を避難民へ與へ

幾分の饑餓を凌がしめたるが、全署管内平地一帯は全部燒燼して一家の殘存するものなきに至るや、翌朝署員を久保山に招集して罹災民の救助、治安の維持に努め、全日午後六時同署仮事務所を久保山巡查派出所に設け全月七日更に全地の太田小學校の一部を廳舎に充て、事務を開始し爾來殆んぞ不眠不休活動を繼續せり。

因に此當時吉田橋の上下流には幾多の船舶ありて難を此に避けたる者尠からざりしが、猛火の爲に船に移火して燒かるゝ者又は之を見て河中に飛込み遂に溺死する者尠からず、然れども夜間且は潮流の關係にて屍体常に移動して確數を得難きも約五百有餘名ありしと云ふ、尙右吉田橋々下以外其の附近に於て不思議にも燒死を免れたるは、全橋下流の貞喜丸發着場附近に於て三百餘名及吉田橋々畔の共同便所下に、繫船して難を避けたる五大力船一艘に約四百名程乗船し居りしも、此船のみは辛くも燒失を免れ生を保つことを得たり。

(2) 櫻木町驛 櫻木町驛は櫻木町一丁目に在り、鐵道省の京濱間電車専用驛なるが、震災に就ては石造二階建廳舎二棟(各建坪八十四坪)と「ブラットホーム」の上屋とは共に倒潰し、改札口より「ブラットホーム」に到る中間の上屋のみは纒かに倒潰を免れたり、而して當時の職員七十五名の内當日勤務者和田(終吉)驛長以下三十八名の内一名負傷し、旅客は少數のもの待合室に在りたるが、之又僅に小兒一名負傷したるに止まりたり又午前十一時五十六分全驛發東京行電車は乗客百名を乗せ、定刻より少しく遅れて發車し「ブラットホーム」より數歩を離れたる個所にて彼の震災に遭ひたるも、車体は傾斜して停まりたる爲乗客は、全部無事にて避難せり。

全驛廳舎及附屬建物及「ホーム」に降り居たる電車は何れも、午後一時五十分頃花咲町川岸より襲來せる火を被りて類焼するに至れり、而して此被害建物中の石造二階建二棟の廳舎は、明治五年に本邦に初めての鐵道として京濱間に敷設せられたる時の横濱驛廳舎なるが、大正八年電車專用驛に改造の際之を取毀ちて改築せんとするや、本邦鐵道の發祥驛なるが故に之を記念建造物として、幾分の修理を加へて永く保存するの適切なる旨の説盛に唱導せられたる所より、鐵道當局も車寄せの一部を改造し舊態を其の儘に存置したるものなりしが遂に此震災の爲に灰滅に歸するに至れるものなり。

(3)、東横濱驛 東横濱驛は櫻木町一丁目に在りて、櫻木町驛に北隣する貨物驛たり、其の建物は驛廳舎木造二階建一棟（建坪五十七坪）及木造平家建附屬舎二棟（一は建坪三十五坪、一は建坪二十坪）と貨物上屋五棟（五棟を通じ建坪三千七百坪）と之が附屬事務室一棟（木造平家建坪四十坪）と木造倉庫一棟（建坪三十五坪）ありしが震災に就ては貨物上屋五棟と二階建廳舎一棟とが倒潰し當時職員、備人總員百九十五名中當日の勤務員吉岡（重藏）驛長以下百五十名中廳舎内に在りたる驛長以下二十名中十名負傷し、驛長書記高橋信太郎一名壓死し、午後一時四十分頃辨天橋對岸より襲來せる火に依り廳舎、附屬舎、上屋全部焼失し、併せて「プラットフォーム」に堆積しありたる貨物約三百五十噸と、構内に在りたる貨車（貨物は總て午前中に車より引卸せしを以て總て空車なり）八十輛及機關車一臺とは共に焼失せり。

全驛構内（十數條の線路敷設しあり）は面積約二萬坪あり同所附近には斯程の廣場他になく、避難地としては

誠に恰當のものなりしかば、關内及櫻木町、花咲町方面より逃込み來る者夥しく、一時は約二萬人と算せらる是等は最初は前記八十輛の空貨車内に押入り、此の内に入る能はざりし者は車輛の下に潜み、以て吹雪の如き火の粉を凌ぎ居たるが、最後に車輛に火の移るに及びては、皆車内より逃出し稍や火に遠き西北隅に身を避け辛くも凌ぎたるが、若しも避難者にして多少の荷物を此處に運び來りたるものあらんか、必ずや之に移火し本所被服廠跡の如き慘劇を現出すべかりしに、此に雲集せる避難者は何れも總かに身を以て逃れ來りたるものゝみにて、些少の荷物も之を携帶せざりしかば、僅に生命を保ち得たるものにして、全く勿怪の幸と云ふの外なし。

(4)、長者町郵便局 長者町郵便局（二等局）は長者町五丁目蓬萊町四丁目に跨りて建てられたる、煉瓦造二階建（建坪三百二坪餘）なりしが、第一震に於て其の建物は真二つに炸裂して南北兩面に倒潰し、職員八十一名備人百六十六名計二百四十七名の内當日出勤員洗（治助）局長以下約百五十名の内、建物崩潰の下敷となりて書記二名、書記補一名、事務員一名、集配人十二名計十六名と公衆約三十名餘とは壓死し、局員にして重傷を負ひたる者三名を生じたり。

洗局長は階下事務室にあり机下に潜み、左足に重傷を負ひたるも幸に死を免れ、外部に立出て安全なりし局員を指揮して下敷となりたる者の發掘に努むる裡、午後〇時三十分頃局の北方程近き梅ヶ枝町本願寺別院附近に當り、火の手の揚るよと見る間に之に續ひて局の西南に位する足曳町、雲井町方面にも火災起り正南吉田川を

隔つる長者町四丁目邊に見へたる火は、暮然として全局の方面に進み來り到底發掘を繼續すること能はざるの状況に瀕したりしかば、局長は引纏めたる局員約三十名を引率して、午後二時に垂んとする頃全所を去り、中村町平樂原に避難し、同所に臨時集合所を置きたるが局は二時過ぎに類焼せり。

(5)、中央電話局長者町分局 全局は蓬萊町四丁目に在りて、長者町郵便局と相隣し鐵筋「コンクリート」造二階建にして、震災には倒潰を免れたるも内部は類焼せり、局員には死者なかりしも建物に倒潰せざりし爲火に追はれて逃込み來りたる、避難民數名が地下室に於て焼死し居たるを發見せり。

(6)、櫻木郵便局 櫻木郵便局(二等局)は櫻木町一丁目に在りて櫻木町驛と相並べり、其の建物は木造二階建(建坪約七十六坪)にして小なる附屬舎一棟あり。

震災に就ては建物に小破損を生じたるに止まりたる爲、當時の全職員三十三名備人二十三名計五十六名中廳舎内勤務中の職員局長石原爲三郎以下十四名、備人八名ありしも死傷者を出さず、廳舎は午後二時頃櫻木町驛方面より延焼し來りたる火に依り焼失せり、是より先き職員は火災の來襲を豫知し、金員は之を打倒れたる金庫中に辛くも收藏し、書留信書、代金引換郵便物、電報原書其の他書類の一部及電信機械を搬出し、局の類焼前西戸部町池の坂の石原局長の官舎に移し、焼失を免れたり。

(7)、瓦斯水道局 瓦斯水道局は花咲町五丁目、六丁目に跨り本廳舎は木造二階建(建坪三百三十二坪)一棟の外に瓦斯製造窯室石造平家建一棟(約百坪)、煉瓦造倉庫一棟(約二十坪)機械裝置室煉瓦造一棟(約百坪)の

建物ありしが、此の内倉庫及瓦斯製造窯室は崩潰したるも、他の建物は小破損に止まり、從て職員以下備人まで約八十名無事なりしかば、構内には早くも避難者陸續として詰懸け來り、其の數約百名餘に上りたり、然るに構内右隅には三十萬立方呎の瓦斯溜あり、之れには當時約二十萬立方呎の瓦斯貯藏しありしが、震動激甚にして爆發の恐れあるが爲、午後一時頃壓力整定器監視夫虎谷清をして、壓力整定器の高壓管閉閉器を閉鎖し、尙出管を開かじめ急速貯藏瓦斯の放出に力むる裡、恰も類々たる餘震の爲第二層接續部に於て空隙を生ぜるもの、如く瓦斯は徐々に漏散し、爲に爆發を免るゝことを得たるも、四方に起れる火は烈風に煽られて廳舎を蔽ひ來りしかば、職員其の他は午後三時頃齊しく伊勢山方面に避難せり。

右の外重なるものとしては第一消防署伊勢佐木町出張所、全初音町出張所、横濱市電氣局日本橋出張所等何れも倒潰類焼せり。

銀行及大商店の被害

(1)、左右田銀行松ヶ枝町支店 松ヶ枝町六十六番地左右田銀行松ヶ枝町支店は、煉瓦造平家(一部二階建)一棟(建坪九十二坪餘)は崩潰し、在店行員四十五名の内常務取締役左右田誠一、預金係長竹内吉太郎外三名と來店中の客九名と通行人五名と計十九名壓死し、行員五名負傷せるが、支店長石神確七郎は一時建物の下敷となりたるも、重要書類の一部を携へ纒かに身を以て遁れたり云ふ。

(2)、神奈川縣農工銀行 櫻木町一丁目一番地神奈川縣農工銀行は本館鐵筋「コンクリート」造二階建一棟(建

坪百五十九坪) 及附屬舎鐵網「コンクリート」造一棟(全三十三坪餘)にして震災には別段の被害を見ざりしかば、重要書類及現金は之を大金庫の内に收藏(動搖の爲金庫扉に歪を生じ鍵を施す能はざりしも、此中のものは焼失を免る)し行員五十五名中少數の獨身者のみを行内に留め、他は早く避難したるが午後二時頃南方櫻川對岸花咲町より附近に飛火せるものに依り類焼せり。

右の外に災害に罹れる重なるものを擧ぐれば、伊勢佐木町一丁目平沼銀行、全町二丁目横濱興信銀行支店、全所報徳銀行支店、賑町一丁目晝夜銀行支店等あり。

(3)、野澤屋呉服店 野澤屋呉服店は伊勢佐木町一丁目に在り、市内に於ける「デパートメント、ストアー」の大なるものとす、全店建物は新館と稱するもの鐵筋「コンクリート」五階建(高六十四尺建坪百五坪)一棟と舊館と稱する木造三階建(建坪百八十坪)一棟と事務室と稱する木造二階建(建坪百五十坪)一棟の三棟なりしが、此内舊館一棟倒潰し、階上に於て店員三名、階下に於て客三名、店員十七名壓死し、事務室と新館とは倒潰せざりしも新館は地下に二尺沈下せり、全店雇傭人は全部にて四百二十名あり、全店平常の來客は稍多き時七千人以上雨天等の少き時も二千人を下らず、震災當日は土曜日なりしも午前中なりし爲、未だ多くの來館者あらず、僅に新館に約百五十名舊館に五十名あり、此内舊館に於ては前記の死者を生じたものにして、午後一時附近姿見町方面より來りたる火に依り、建物全部焼失(新館「コンクリート」建物は内部のみ)せり

(4)、越前屋呉服店 越前屋呉服店は伊勢佐木町二丁目二十一番地に在り太田與市の經營する所にして、伊勢

佐木町通に於て野澤屋に亞ぐ「デパートメント、ストアー」たり、其の建物は店は土藏二階建一棟(建坪約三十坪)、及鐵筋「コンクリート」造三階建一棟(建坪約三十坪)、にして倉庫は土藏一棟(建坪約六坪)、全煉瓦造一棟(建坪約八坪餘)、全石造一棟(建坪約八坪餘)、計五棟と店員寄宿舎其の他附屬建物(建坪約二百坪)等ありたり、震災には建坪約三十五坪二階建の寄宿舎が半潰せるのみにて、他に破損なく當時の店員九十七名と約五十名の來店客には異狀なかりしが、午後〇時二十分頃に至り附近姿見町、伊勢佐木町、松ヶ枝町、福富町邊に火の手揚りたるを見て、店員が帳簿全部を搬出し横濱公園其の他に避難せる後建物は類焼し、鐵筋「コンクリート」造三階建は内部のみ燒燬し、外形は傾斜し數尺地中に沈下して残存し、煉瓦造倉庫一棟は他倉庫の燒落たる土石に埋められて完全に残存せり。

附記 九月九日晝十數名の不逞徒が、右殘存倉庫の收藏品を奪はんとし倉庫を破壊中なる旨の急報を聞くや當時磯子町の居宅に在りたる同店主人は警備軍に訴へ軍人二、三の急派を請ひ、且つ磯子在郷軍人分會にも應援を依頼し、直に自動車二臺に分乘して現場に馳付け、賊徒を追拂ひ倉庫を打開き見れば、這は如何に中には死屍打重なりて横はれり、依て警察官に訴へ之を検するに男四名女二名小兒四名計十名を算したり、案ずるに最初店員等が火災前に避難するに當りては、該商店倉庫の戸扉を閉鎖するの邊もなく立退きたる後に至り、火に追はれくる避難民が逃場を失ひ偶々同店の倒潰を免れ、且つ該倉庫の戸の開き居たるを見て此の内に逃げ込み内側より戸を閉ちて潛み遂に窒息せるものゝ如し、同家主人は是等住所氏名不詳死者の身に着

け居たるものにして、他日其の何人なるかを知るの證據となるべき品あるものは、之を採取し置き遺骸は磯子金藏院に託し篤く之を葬り、又該倉庫中に收藏しありたる反物其の他商品は擧げて、之を磯子在郷軍人分會の手を経て磯子方面に在りたる罹災民に分贈せりと云ふ。

茲に前記倉庫内の死者にして其の遺品に依り圖らずも、半年餘も経て其の身元の判明せる小説的一奇談あり即ち男子死者の一名にして裏に「愛樂亭村田」と記せる烏打帽子を冠り居たる者あり、當時之を頼りに諸方を尋ねたるも知れず、已むなく其の儘になり居たる處大正十三年三月節句に、越前屋太田方に於て他より雛人形を貰ひたるに不圖雛箱の内側に「愛樂亭」と云ふ商標紙の貼付しあるを發見し、此の雛人形の販賣元を調査したるに、伊勢佐木町二丁目「まからぬや」なること判明せるも、同家は震災に一家全滅し他人が其の商號を繼承し同營業を爲し居るものにして、前經營者は村田某と云ひ其の親戚が東京にあるを確め、是れに來濱を求め該帽子を示したるに「愛樂亭」は「まからぬや」の別號にして「愛樂亭」と記せる帽子裏の文字は同家主人村田某の自筆に係り、又其の側らに「村田」と記せる文字は、其妻の筆なることを立證し、且つ村田夫妻は震災に行衛不明となり居たるものにして、全く該帽子を冠り居たるもの、并に其の傍らに死せる婦人の一名は其の妻なることも判明するに至りたるなりと云ふ。

右の外伊勢佐木町附近に於て災害に罹れる大商店を擧ぐれば、伊勢佐木町二丁目福井屋呉服店、全所龜樂煎餅店、全所蒲利屋洋品店、全町一丁目有隣堂書店、松ヶ枝町大和屋「シャツ」店等なり。

中等學校の被害

(1)、**横濱市立横濱商業學校** 南太田町清水耕地所在、横濱商業學校は火災は免れたるも、其の建物の内御大典記念圖書館木造二階建一棟(建坪約二十坪)柔道室木造平家建一棟(全四十二坪)雨天体操場木造平家建一棟(全八十坪)の三棟は異狀なく、物置木造平家建一棟(全二十六坪)は半潰し、教室二十棟(内一棟は二階建十九棟は平家建)教員室、事務室、校長室、講堂、商品陳列室、博物標本室、宿直室、應接室、小使室、炊事場門衛詰所、戎器室、附屬建物、(教室以下全部木造平家建にして全部を通じて建坪一千二百三十五坪)は全潰したるが、當時は夏季休暇中にして校長以下三十五名中職員三名、使丁二名在校したるも死傷者なし。震災當時の生徒總員六百七十名中全年十月十五日「バラック」建に依り開校したるに登校生徒は五百四十名なりと云ふ。

全校は明治十五年三月實業家有力者小野光景、馬越恭平、木村利右衛門其の他の發起に依り、本町外十三ヶ町々立として横濱商法學校の名稱にて本町一丁目に創立し、明治二十一年北仲通六丁目に移轉し、全二十二年横濱商業學校と改稱し、全三十八年現在の南太田町清水耕地に移轉し、大正六年市の管理に移りたるものなり、(2)、**中學關東學院** 南太田町霞耕地俗稱兵隊山山上にある中學關東學院は、米國「パプテスト」傳道會社の經營する所にして、其の建物は教室鐵筋「コンクリート」造二階建二棟(建坪百六十坪)物理、博物、音樂教室鐵筋「コンクリート」造三階建一棟(建坪不明)雨天体操場木造平家建一棟(全九十八坪)寄宿舎木造二階建

一棟(全四十八坪)計五棟にして全部倒潰し、午後三時南方崖下より襲來せる火に依り午後三時過ぎ焼失せるが、當時全院は夏季休學中にして宿直員教諭大橋貞彦、全佐々木正雄、給仕一名壓死し、居合せたる教頭高田運吉は校舍二階より飛び降り危難を免れたり。

割烹店及旅館の被害

全署部内は場所柄として割烹店及旅館の數多きも而かも甚だ大なるものならず、今災害に罹れるもの、内稍や大なるものを擧ぐれば、割烹店にありては若竹町福貴樓、全所金田、伊勢佐木町二丁目登喜和、全町一丁目鈴長、賑町一丁目太田樓等なるが旅館に至りては録するに足るものなし。

社寺の被害

(1)、本願寺横濱別院 多數の避難者が火炎包围裡に無残の焼死を遂げたる、梅ヶ枝町三十番地所在大谷派本願寺横濱別院は其の建物本堂木造一棟(建坪約百四十坪)書院木造一棟(全百二十五坪)庫裡木造一棟(全五十一坪)附屬建物二棟(二棟を通じ建坪二十坪)の内本堂、庫裡及鐘樓は倒潰し、書院のみ倒潰を免れたるが全院境内空地は約三百餘坪あり、全所伊勢佐木町通の南裏手に位し、人家稠密の場所にして是程の空地は此所を措き他にあらざる爲、震災に脅かされたる附近住民の多くは多少の家財を携へ全境内に避難し來り、中には地割れを恐れ書院其の他の疊を揚げ來りて地上に敷き、此上に息ひ居る裡諸方に起りたる火の手は漸次延焼し來り、早くも之に氣付きたる者は忽ち他に轉避し、遅れたる者と雖壯者及健全なる者は、是亦辛くも遁れ去りた

るも老幼婦女又は負傷者等は猛炎を突破する能はず、終に全院の焼失と運命を共にしたるものにして、焼跡を調査したるに全境内に於て百七十三名、其の附近道路に於て百十八名計二百九十一名の死屍を發見せり。

(2)、日枝神社及稻荷神社 南吉田町九十九番地村社日枝神社は、埋地方面三十三ヶ町村を氏子とする市内著名の神社にして、其の境内の一隅にある村社稻荷神社は、本殿并に兩社の社務所とは午後三時蒔田方面より襲ひ來りたる火に依り類焼したるも、日枝神社は其の新築工事中に在りし、拜殿上屋の一角を焦がしたるのみにて止まり、本殿には異狀なかりしも境内に登へたる玉楠、樺、椎等の樹木拾數本は焦げて枯死せり。

右の外災害に罹れる重なるものを擧ぐれば、羽衣町殿島神社、野毛町三丁目子ノ神社、長者町八丁目常清寺櫻木町三丁目本派本願寺別院等あり。

劇場、活動寫眞館、寄席の被害

(1)、喜樂座 賑町一丁目三番地劇場喜樂座は其の建物は木造にして、建坪約二百八十坪なりしが、九月一日は午前十時三十分より市川荒次郎一座の芝居開演中倒潰し、従業員三十八名、俳優其の他樂屋附屬員九十六名、觀客約一百名中従業員四名、觀客十三名壓死し、従業員一名行衛不明となり、建物は午後〇時三十分頃賑町二丁目方面より來りたる火に依り類焼せり。

(2)、朝日座 賑町一丁目二番地劇場朝日座建物は木造建坪二百十坪にして、午前十時三十分より種春一座の安來節開演中其の建物倒潰し、従業員十八名、樂屋員四十名、少數觀客中従業員三名、觀客一名計四名壓死し、

午後〇時三十分附近よりの火に依り類焼せり。

(3)、**横濱角力常設館** 松ヶ枝町六十二番地活動常設館、横濱角力常設館は本館木造一棟(建坪二百四十五坪) 附屬建物木造四棟(四棟を通じ建坪七十二坪)は倒潰後類焼せるが未だ開演前にありたる爲死傷なし。

右の外災害に罹れる重なるものを舉ぐれば、劇場にありては雲井町一丁目横濱座、活動寫眞常設館にありては吉田町一丁目横濱館、松ヶ枝町横濱電気館、長者町六丁目「オデオ」座、全所又樂館、寄席にありては伊勢佐木町二丁目花月等なり。

病院の被害

(1)、**横濱病院** 若葉町三丁目二十九番地横濱病院は須藤求の經營に係り、且つ自ら之が院長たるものにして、其の建物は病室木造二階建一棟(建坪三十二坪) 全木造二階建一棟(全七十坪) 全鐵筋「コンクリート」造三階建(傳染病室)(全四十二坪) 附屬建物木造平家建三棟(三棟を通じ建坪六十五坪) ありしが此の内最初に記載せる建坪三十二坪の病室は全潰し、附屬建物三棟は半潰し、傳染病室は約一尺五寸地中に沈下し、午後〇時十五分頃附近三ヶ所より發火せる火に依り、傳染病室は二階三階の一部を焼きたるに止まり、其の他の建物は全部焼失せり、當時の職員は院長不在にして醫師四名、事務員二名、藥局員二名、看護婦九名にして入院患者は約三十名あり、之れと之れが附添人及外來看護婦とにて約八十名ありしが、此内患者二名、病院看護婦四名外來看護婦二名壓死し、事務員一名、患者一名行衛不明となり、其の他患者は職員及附添人等にて救護し久保

山に避難せりと云ふ。

(2)、**實費診療所横濱支部** 福富町一丁目三十番地社團法人實費診療所横濱支部は、其の建物本館木造二階建一棟(建坪約百二十六坪) 附屬建物木造二階建一棟(全五十坪) 計二棟あり、此内本館は傾斜し附屬建物は倒潰し、當時の職員渡邊(與吉) 院長、醫師、藥局員、事務員、看護婦、小使等にして約六十名入院患者約四十名之が附添人若干あり、此内藥劑員一名、看護婦一名、助長一名、計三名壓死し、院長以下三名負傷し、患者は副院長指揮の下に吉田橋方面に避難せしめたる由なるも、其の後火の包圍を受け多くは、生死不明となりし者の如し、而して同病院建物は職員其他の避難後間もなく類焼せり。

宮川香山の被害

帝室技藝員宮川香山は南太田町字庚耕地小字谷戸部落入口の一角に丘陵に據りて居を構ふ、火災は其の邸宅の一角に肉迫したるも、幸ひ防火の効を奏し谷戸部落と共に類焼を免れたるも、震災に於ては其の邸宅の破壊せると共に、帝室御用の貴重品の破砕せるもの等ありて大なる被害を見たり、香山は眞葛と號し磁器製造を以て夙に其の名聲内外に聞へ、現代香山は二代目にして先代より引續き帝室技藝員に列せらる、先代香山は明治二年に薩摩の名士小松帶刀の斡旋に依り京都より現在の場所に移住し、引續き窯業に従事し居たるものなるが、震災に就ては其の邸宅は半潰し、工場五棟の内三棟倒潰し、窯六基も亦全部潰へたり、此の被害中に於て最も惜むべき被害は、皇太子殿下 御慶事の際豊明殿に飾付べき爲に宮内省よりの用命に依り、製作せる青磁花瓶

一對(高さ二尺八寸)と之れが稍や意に満ざる爲更に造りつゝありたる、全品未製品一對と横濱市より全殿下 御慶事奉祝のため献納すべき青磁大花瓶一個とは、共に盡く破碎せられたることなりとす。奇數くも延焼を免れたる谷戸部落

市内を一掃せる火災に於て丘陵の背後又は田圃若くは河川を隔てたる場所に位せるが爲に延焼の厄を免れたるものは敢て異とするに足らず、根岸、磯子、瀬頭、本牧方面、弘明寺、井土ヶ谷各方面の如き丘陵其の他散在部落等即ち之れなり、然るに市内平地地帯に位し倭屋櫛比し、其の部落の入口まで猛火の襲來を受けながら、克く之れを防止して類焼を免れたる南、太田町字庚耕地小字谷戸細民部落の如きは眞に奇異と爲すべきものなり。谷戸部落は南太田町字庚耕地の小字に屬し、久保山南方の丘陵下の小部落にして、其の南面に俗稱富士山ふじやまの小丘横はり、東南の間に入口開けて遠く道慶橋方面に向ひ、一路西に部落の中央を貫きて橋樹郡保土ヶ谷町へ通ず、谷戸は約六百戸の細民部落にして、之れが居住者は肩拾ひ、行商、人夫を業とするもの重なるが、此の小部落に肩商の小立場數軒ありて、肩拾ひは其の獲物を皆此に運びて賣買を爲すものにして、一度足を此の部落に踏入れ眼を放てば到る處の低倭なる屋上には、紙屑其の他雜多の物件を晒しあるを見るを得べし。

谷戸部落は元山間の水田を埋立たるものにして、其地盤は餘り硬固にあらざるが爲に震災に就ては、約六百戸の内半數は倒潰し、半數は半潰し全きものとは殆んご之れなかりしも、其の建物が倭小なりしが爲僅に負傷者約三十名ありたるのみにて死者を出さず、市中を縦横に燻立居たる猛火は午後四時頃異の方面より眞向に谷戸

の入口に襲ひ來り、驀然谷戸部落を一帯りに舐り盡さんとするの勢を示せり、爰に於て部落民と部落附近居住者とは共に力を協せ風下に當る民家を打倒して火の進路を遮ぎり、且つ部落の奥に在る大丸池(面積約百五十坪あり、元は灌漑貯水池なり)より流れ出て、部落入口に小溝となりて流るゝ水を、多人數が必死となりて「パケツ」其の他の器物に汲取りて打注ぎつゝありしに、天佑とも云ふべきか今迄異より眞向に部落に吹込み居たる猛風は此時に至り、俄かに其の方向を變じて眞南に廻り、部落の前面に横はる富士山ふじやまの鼻にて遮斷され、爰に人力と自然の力と合して終に克く彼の恐るべき猛火を此に喰止め、谷戸六百戸は幸運にも祝融氏の蹂躪を免れたるが、此消防上の功績に就て特筆し置くべきは、伊勢佐木町警察署詰巡査にて當時庚耕地派出所勤務たりし板倉芳藏及村山惇の活躍なりとす、兩巡査は部落民を指揮し共に勇猛に消防に努めたる爲、後に至り部落有志は相謀り兩巡査に各銀盃一組を贈り以て謝意を表せり。

因に全部落にして全焼するあらむ乎彼の混亂に乗じ、憂慮すべきものありしにあらざるやを思はしめたりしも幸ひ一戸の焼失なかりしは頗る僥倖なりき。

火災の状況

全署部内四十二ヶ町の内總かに火災の延焼を免れたるは久保山、井土ヶ谷、弘明寺方面、南太田の一部、南吉田町の一小部分にして、他は全く焦土と化せり、而して發火の最も早きは第一震後僅々五、六分なりしが如く部内全般に亘る發火時刻及發火場所は別表の如くなるも、最初に全署附近より望見したる所に據れば、最も早

く火の手揚りたるは蓬萊町一丁目邊にして、之に次ぐは姿見町一丁目、伊勢佐木町二丁目、吉田町、長者町、羽衣町、福富町方面と認められたるが調査の結果に據れば、全署部内の發火場所は實に五十五ヶ所の多きに上り、然も折柄の南東風に吹き捲られて四方に延焼し、火勢猛烈に赴くに及びては旋風之に乗じて、更に勢力を増大し縦横に荒廻はりたるものなるを以て、延焼進路の如きは俄かに判定し難きものあり、今發火及延焼原因を擧ぐれば、大体左の如く認めらる。

發火 發火原因は多種あるべきも地震と全時に火を發したるものは多く、料理店、飲食店等の料理場に於ける焔爐又は油鍋類の顛覆又は湯屋煙筒の倒潰等にあるが如し。

延焼原因

- (一) 風力の強烈
- (二) 震災に因る消火器の損傷及通路の杜絶
- (三) 消防隊の活動減退
- (四) 水道管の破裂

以上の如くにして既に消防手段方法盡き、自然消火を待つより外なきの状況なりしも、久保山及南太田町庚耕地に於て延焼の恐ありしも、同方面派出所巡查及附近居住者が協力し附近の井水若くは下水を使用し、極力防火に努めたる結果久保山方面に於ては、通稱舊坂の附近南太田町千八百三十七番地、千八百二十六番地及同所

北方庚耕地千三百四十四番地に於て消火し、全町久保山下庚耕地方面に於ては同町千五百五十七番地附近に於て延焼を防止することを得たるが、又自然消火にありては南吉田方面に於て、日枝橋附近及千歳橋附近は中村川河岸に在ると一面人家稀薄なる爲延焼を免れ、極少數の家屋は残存を見たり。

罹災民避難状況

避難地として全署部内に於ては久保山の高地、南吉田の一部、南太田町の一部、弘明寺、井土ヶ谷方面の平地あり、是等には多數の避難民入込みたるが久保山及井土ヶ谷、弘明寺方面に避難せる者最も安全なるを得たり今上記方面に於ける避難民の概数を擧ぐれば左の如し

(一) 大岡川河中

吉田橋附近河岸及艇船内 一、一〇〇名

末吉町二丁目河岸 五〇〇名

(火災終了直後他に移す)

(二) 久保山方面

寺院、學校、山野 九三、一三〇名

(三) 南吉田町方面

神社境内、橋畔、空地 三、九八〇名

(四) 南太田町方面

横濱商業學校々庭

五、〇〇〇名

(五) 弘明寺方面

弘明寺觀音境内其他

二、四〇〇名

(六) 井土ヶ谷方面

井土ヶ谷一帯

四、三〇〇名

(七) 櫻木町方面

東横濱驛構内

二〇、〇〇〇名

第三節 戸部警察署管内

震前

全署管内は市の西北隅に位し市部二十八ヶ町と、郡部橋樹郡の内保土ヶ谷一ヶ町とより成る、部内の西南部一帯は丘陵にして、櫻花を以て聞ゆる掃部山、梅花を以て聞ゆる伊勢山あり、伊勢山には縣社皇太神宮の鎮座せるあり共に眺望に富めり、其れより西方税關山に至る間の丘陵續きには、上流の住宅及別墅多く、又北東部に屬する平夷地は商業地にして伊勢、戸部、西戸部、櫻木町方面は相當の繁華を呈し、横濱驛より西

戸部へ亘る電車沿線の如きは往來織るが如し。

今交通状態を述べむに東海道鐵道は、神奈川より來り高島町に横濱驛あり、省線電車は此より分岐し櫻木町驛(伊勢佐木町署部内)へ赴き、東海道は西走保土ヶ谷町に向ひ此に保土ヶ谷驛あり、別に貨物線は神奈川埋立地より來り高島驛となり、此より分岐し一は横濱驛に於て東海道線に合し、一は南走して東横濱驛(伊勢佐木町署部内)へ向ふ、市内電車は神奈川より來り櫻木町を経て南へ走り、戸部線は横濱驛前より西戸部、久保町を迂回し日本橋(伊勢佐木町署部内)へ向ふ、主要道路を擧ぐれば第三十六號國道は(青木町、本町一丁目間)神奈川より來り高島町を経て櫻木町へ去り、戸部通は野毛町より來り戸部、平沼を経て淺間町通に合し、淺間町通は東海道國道にして青木町(神奈川署部内)より來り淺間町を経て保土ヶ谷町に連なり、伊勢町通は戸部町一丁目を横斷し西戸部、久保町を経て保土ヶ谷町へ向ひ、天神山通は戸部町六丁目より起り西戸部を経て保土ヶ谷町へ向ひ、西戸部電車通は横濱驛前より起り保土ヶ谷町へ向ふ。

部内に於ける建物の主なるものを擧ぐれば、中等學校には縣立女子師範學校、全高等女學校、全横濱第一中學校あり、神社佛閣には皇太神宮、大聖院其他大なるもの少なからず、官衙には戸部警察署、第一消防署、横濱稅務署、煙草專賣局、横濱驛前郵便局あり、工場には横濱船渠株式會社を首め其他大なるもの十五あり、病院には十全病院、大西病院、近藤病院、灘波病院の如き大なるものあり、興行場には横濱劇場其他あり、其他建物の著大なるものには横濱社會館、中央食品市場ありて部内は市の一隅に偏したりと雖

警察署として亦重きを爲すの地なり。

震 後

同署部内に於ける震動の緩急を考察するに、丘陵地帯には概ね緩にして、平坦地帯には概ね急なりしが如し、平坦地帯の大部分は開港以後の理立地に屬し地盤一般に軟弱なりしと、又一面に於て建物の關係にも因るべしと雖最も多く倒潰家屋を出せるは橋、緑、入船、内田、長住、櫻木、花咲、戸部、西戸部の一部、平沼、岡野、高島、表高島、裏高島の各町とす、尤も丘陵地帯に在りても西戸部税關官舎其の他に於て、無残の全潰を多く出せるが、是等は其の建物の關係と地之りとに原因するが如し。

郡部保土ヶ谷町の内國道兩側の建物は半数以上倒潰して東海道國道を壅塞し、場所に依りては屋上を通行せざるべからざるの奇態を呈したり。

火災の状況を調ぶるに全署部内三十八ヶ町中火災の厄を免れたるは、西戸部の約半部、南太田町の大部分（全署部内に屬する分として）久保町、淺間町、青木町半部、岡野町、平沼町の少部分及保土ヶ谷町なるが、發火の最も早かりしは平沼町、西戸部町鹽田、戸部町、橋町、緑町、伊勢町方面なりしが如し。

今全署部内に於ける慘狀を記するに當りては、先づ大工場の倒潰に依り一時に多數の壓死者を出せるものと、猛火の包圍に陥り一ヶ所に多數燒死せるものとを擧げざるべからず、全署部内に於て職工百名以上を役使し居たる、工場若くは會社にして倒潰又は火災に遭ひたるもの、市部に於て十三、郡部に於て三あり、此の内多くの壓

死者を出せるは、保土ヶ谷町富士瓦斯紡績會社保土ヶ谷工場四百五十四、裏高島町東京電氣株式會社橫濱支店六十八、永住町橫濱船渠株式會社二十八、久保町東洋麻糸紡績株式會社二十八、平沼町橫濱護謨製造株式會社二十四、久保町橫濱帆布株式會社二十三、保土ヶ谷町日本絹絲株式會社保土ヶ谷工場十一なりとす。

次に猛火の包圍裡に多數燒死を遂げたるは、西戸部町御所山の一角俗稱「鴨越へ」及南太田町天神坂の峻坂なりとす「鴨越へ」は戸部町五丁目より西戸部町縣廳官舎附近に至るの間、東西に長く隆起せる丘陵の中央に刻まれたる急勾配の石壇にして、丘陵の北面崖下は西戸部町天神山にして、崖上は全町御所山なり、該坂の上に在る裏通の南に更に戸部町三丁目より西戸部町縣廳官舎へ通ずる御所山通あり、而して震後直に平沼及西戸部鹽田方面に起れる猛火は鷲翼を張りたるが如く擴大し、南進して天神山に迫り一方伊勢町、戸部町二丁目、四丁目及御所山の東角に起りたる火は僅かに西の一方を明け、三面より御所山に押寄せ來りたるを以て、御所山及天神山方面の住民の活路としては只西に走り、西戸部町顯成寺山及縣立橫濱第一中學校方面の山地へ、避難するより他に方途なきに立至りしかば、早くも此の形勢を看取し又は警察官の指導に順ひたる者は、兎も角も是等方面に避難したるも家財に未練を懷き、又逃げ遅れたる一部は猛火の追撃を受くるに至り、天神山方面より彼の「鴨越へ」の急坂に差掛りたるに既に坂の半腹以上は、火炎の這ふありて登るべからず、顧みれば後面の火も亦眼前に迫り、進退全く此に谷まり、平地より八尺登りたる場所に於て約六十名燒死を遂げたり、又坂上に在りて逃げ惑ひたる若干名は、是又火焰包裡に陥り如何とも爲す能はず、窮餘坂上より西南方に約二十間を隔つる場所に在る、市會議

員加藤重利邸宅内に樹木の鬱蒼として茂れるを頼み、皆之れに赴き暫く樹蔭に身を寄せ熱炎を凌ぎ居たるに、該樹林にも亦火の移りたる爲最早此にも留まる能はず、同邸と坂上との中間約二十間位の路上を左走右馳しつゝ終に無残の最期を遂げたる者約七十名に上れるが、爰に此の窮極せる死地より脱出し、克く數十名と共に生命を全うし得たる一快漢あり、彼の行動は實に這般熱煙腥風の天地に一脈の清風を吹き入れたるの概あり。

彼れとは抑も誰ぞ曰く市内西戸部町天神山二三四番地藥種商川崎藥局事川崎健二郎方廣畑實三當三十二年なり同人は前記川崎健二郎と共同して川崎藥局を經營せるものなるが、當日震災にて負傷せる其の附近の民衆は醫師缺乏の爲同人方に蝟集し、應急手當を懇請せるを以て彼れは自家雇入の藥劑士と共に、救護の事に従ひ之れが爲に他人より逃げ遅れて彼の「鴨越へ」の嶮に赴きたり、然るに坂の一部は既に猛火の奇襲を受けつゝありて、坂の登り口の邊には約百名の避難者の逡巡し居たるを見掛け、彼れは是等の者に對し今にして勇を鼓して他に逃げ去らざれば空しく此の土の哀鬼と化すべしと、激勵しつゝ登攀し漸く坂上に達すれば、此も亦殆んご猛煙に焼き盡され、毒煙は四方を罩め呼吸逼塞せるが、天なる哉此の時一陣の清風は颯然として吹き至り、半死の避難者に對し一縷の生氣を與へたり、斯る中に彼れは活地を求めて四方を展望すれば、約二丁南方に仄かに戸部小學校運動場の見ゆるあり、然かも該所には火氣なきのみならず、此の南方一方面的のみは幸ひにも既に下火となり、火勢は益々衰退せんとするのみなるを看取し、彼れは寧ろ火中を突破して生命を全ふせんと決意し、乃ち後へに従ひ來れる衆を顧み激勵して曰く、止まるも死、往くも死、死は一のみ、請ふ生きんと欲する者は吾れに續けと絶

叫し言畢はるや、奮然身を躍らし餘炎猶膝を没する火中を踏みて先頭を切りたり、然るに火中突破を恐れ逡巡決せざる者衆く、彼れの踵を追ふ者は僅かに三十名位に過ぎざりしが、是等中途炎熱に耐へず落伍する者あれば衆は或は互に之れを叱咤激勵し、或は互に之れを引抱へ夢中裡に藪地に走り續け、辛ふじて其の目的地に足を踏入れたり、最早此に至れば皆齊しく氣は緩みて卒倒し、絶息する者相次ぐの状況なりしかば、彼れは之れに屈せず衆を指揮し、又は自ら手を下して人工呼吸等を実施し、蘇生せしむる等有らゆる活躍を爲す中運動場周囲の火勢も次第に衰退し、遂に一同と共に同所に夜を徹し自他共に生命を全ふすることを得たりと云ふ、此の如き壯快なる行動は眞に賞揚するに足るべき美談と謂ふを妨げず。

次に南太田町天神坂に於ける多數燒死者を出せる模様を記すれば、天神坂は南太田町丘陵の斷崖に斜に九十九折に刻まれたる峻坂にして崖下に日の出町を控ゆ、火災の起るや日の出町附近居住者は早くも諸徑路に依り丘陵以西へ逃げ去りし模様なりしが、日の出町川向ひなる長者町、福富町方面の逃げ遅れたる者は擧て天神坂に依り丘陵上へ避難せんとして天神坂下に来襲せる者數を知らず、然るに天神坂の危道は震動に因つて、其の中腹位に於て路を埋没し、到底行く能はざりしかば避難者は逆戻りして、下より高さ八間の中腹平地に在る左右田俱樂部（左右田銀行の俱樂部）と永樂町貸座敷一月樓所有別荘前より右へ行止まりの細徑あるを辿りて、逃げ去りたる者多き模様なるも、其れより遅れて來りたる者は彼の細徑方面も猛火に遮ぎられ、最早左右何れにも行く能はず、活路は只一月樓別荘裏手上なる茂木家別邸の斷崖（高十間）に攀つるの一方法の存するのみなり、右斷崖は多少

崩壊し居たるも、然かも急勾配にて諸土なるが故に動もすれば江り落ち甚だ登攀し易からず、加之背後より猛火に迫られつゝ多衆一時に此に押寄せ、互に先きを争ふことなれば其の混乱云ふべからず、此の危急の秋に際し何人の奇智なるを知らざるも、茂木邸内の崖上より太き綱繩を垂下して登攀の便に供したるが、既にして丘上丘下共に火焰に包まれたるを以て、此の中腹の一隅に逃げ残りたる一團の民衆は全く絶對絶命の死地に陥り、此に二百八十五名は無残の焼死を遂げたり。

伊勢山と掃部山とは同じく是れ約一萬人の民衆が、猛火に包圍せられ九死に一生を保ち得たるの遭難場たり、伊勢山は其の裾より腰に及ぶ迄人家櫛比すと雖、此の邊唯一の高處にして且面積も廣き關係上、此の丘陵上に避難せば大体に於て安全なるべしとは誰人にも想像せられたる所なり、故に一度火災の起るや附近民衆は争ふて之れに登りたるに、猛火は毒風に煽られ丘陵の四方を燒立て漸次頂上に攻上り來りたるより、約一萬人にも及ぶ避難民は火焰に追はれ、山上を諸所に移動し居たるが火は既に一般民衆を燒盡し、最後には皇太神宮の社殿及社務所を燒き、全山を詆め盡さんとする瘡猛なる勢ひを示し、民衆の生命は正に風前の燈火に異ならざるの危殆に瀕し、今や社前神樂殿の西隣に在る一戸の建物は燃へつゝありて、若し之れより神樂殿に飛火せんか、此の邊に押し詰められたる約一萬に垂んとする集團は、此に無残の焼死を遂ぐるより外なきに至りたり、爰に於て民衆は互に死力を協せ彼の神樂殿を押し倒し、以て延焼を防止し遂に焼死を免れたり、又一面伊勢山の地續きなる掃部山は伊勢山に比すれば其の高さは減ずれども亦相當の面積ありて、山頂には廣き空地を存し、中腹には樹木茂り避難

地としては誠に好適の場所たるが故に伊勢町、花咲町、戸部町邊居住者の之れに避難する者約一萬人に及べるが山麓の火は漸次山頂に延焼し行けるを以て、山上に在りたる避難民は刻々に火勢を見て、彼れは移動して熱炎を凌ぎ一時は伊勢山の北方に未だ火の廻らざる以前には、掃部山と伊勢山との間を往復し居たるが、終には其の間を斷たれ殆んど死地に陥り、僅かに掃部山頂の一角に一團となりて蹲まり、最後まで辛き生命を保ち得たるは燒後の實跡を踏査して之れを考ふれば殆んど奇跡たりと云ふを得べし。

斯くて舊時を顧みれば如月の交には梅花雪葩を破り、白皚々裡に皇太神宮社殿の千木高く青空に抽き、人をして坐ろに崇敬の念を起さしめし伊勢山も、艷陽三月の天、人をして櫻花に酔はしめし掃部山も一朝にして滅亡し徒らに焦樹の疎林と化し了はらしめ、此には僅かに焼け残りたる華表一基蕭條として寒空に聳へ、彼れには井伊掃部頭銅像の「バラック」屋上に冷姿を現はすを見るのみなるが、茲に地震の奇跡として永く傳ふべきは、從來北向きなりし掃部頭銅像が震動の爲其上壇の臺石と共に、自然に東向きに方向を轉じたるの一事にして、然かも其の變轉の鮮やかさは殆んど人工に依りたるに異ならず。

最後に全署部内に於ける被害數字を擧ぐれば、震前戸數二萬五千二百二十九、人口十萬五千二百二十五中全燒戸數一萬五千二百四十四、全潰戸數千九百三十九、死者千百三十五を生じたり、又燒失又は倒潰建物中に就て重なるものを擧ぐれば、中等學校三、社寺に於ては皇太神宮、大聖院、官公衙に在りては戸部警察署、第一消防署、横濱稅務署、煙草專賣局、横濱驛、高島驛、横濱驛前郵便局、病院に在りては市立十全病院、難波病院、近藤病院

大西病院等なり、職工百名以上使役する會社工場十六、諸興行場六、崖崩れ四十三ヶ所中家屋を埋没又は破壊せる場所六ヶ所あり、河線若くは海岸護岸の崩潰せる個所等に至りては殆んど枚擧に遑あらず。

以下官公衙、會社、興行場、社寺、中等學校、病院等の重なるもの、個々に亘れる被害状況及火災状況、避難民の避難状況等に就て詳記すれば下の如し

官公衙の被害

(1) **戸部警察署** 戸部警察署は西戸部町三百三十番地にありて、其の廳舎建物は木造二階建一棟(建坪百〇二坪)と附屬建物たる湯呑所、食堂、小使室兼用木造平家建一棟(全十五坪)物置木造二階建一棟(全十二坪)演武場木造平家建一棟(全二十八坪)と計四棟の外に西戸部町字石崎二百八十五番地の九に署長官舎木造二階建一棟(全四十九坪)あり、震災には署長官舎は半潰したるも、其の他は何れも傾斜したるに止りたるが、午後三時頃西方平戸橋方面より來りたる火に依り總て焼失せり、然れども廳舎が倒潰せざりし爲焼失前に重要書類の一部を搬出することを得たり、此の際之れに従事せる會計巡查後藤金次郎は脚を挫折したるが、此の外當時の職員署長以下百七十餘名の内勤務中の者にして死傷者を出さず。

是れより先き震災直前署長遠藤(至道)警視は警務課長より面談を求められ、兼て警察部長に上申すべき用件を帯びて警察部へ赴く途中、境町横濱貿易倉庫附近に於て震災に遭ひ辛ふじて警察部門前に到着し、森岡警察部長其の他警察部幹部に面會したる後直に歸署の途に就きたるが、一方警察署に於ては震災に遭ふや署長不在

の爲當直大澤(寛)警部は署員を指揮し應急處置を爲す中、早くも平沼町所在友田製藥會社工場より發火せるを以て之に馳付たるも烈風に煽られ猛炎四方に延び途中に於て、火に通路を斷たれ如何とも爲す能はず依つて直に署に引返したるに火は諸方に起り刻々危険は切迫し來り、署長も警察部より歸署し四圍の狀勢に鑑み、裏手に當る東海道鐵道線路内に避難せしめありたる留置人を解放したるが、署長は伊勢山所在知事官邸其の他官舎の安否を氣遣ひ、大澤警部に命じ救護に赴かしたるが、大澤警部は戸部町、花咲町邊に於て猛火に遮ぎられて目的地に達する能はざる爲、更に進路を變じ伊勢町より之れに赴かむとしたるも之れ又行く能はず、已むなく引返して西戸部町池の坂方面に於て防火及避難者指導に當り、又非直在宅せる江間警部は家族と共に辛くも家より遁れ出て、不取敢附近に於て救助を爲したる後、出署し署長の命を受けて避難民の最も大混亂を爲す、西戸部町官の前杉山神社附近に於て避難民の指導を爲し、多數の罹災者を救ひたり。(本件の詳細は卷末警察官功勞者の項に詳述す。)

既にして西戸部町平地方面は一面の燒野原と化したるを以て、夕刻より燒残りたる西戸部町字横枕藤棚巡查派出所を警察署仮事務所として執務し、二日夕刻横濱第一中學校内に引移りたるも、藤棚巡查派出所は交通其の他便宜の所なるを以て九月三十日迄全所内に受付係のみを留め置きたり。

(2) **第一消防署** 西戸部町石崎二百三十番地第一消防署は、廳舎木造二階建一棟(建坪七十七坪余)と「ガソリン」置場鐵筋「コンクリート」造平家建一棟(全一坪余)物置木造平家建一棟と火見櫓(鐵材高さ九十五尺)

とあり、震災には建物は何れも異状なく、火見櫓は頂上に於て僅か五寸の傾斜を見たるのみなるが、這は基礎には何等の異状なく、中位以上に於て鐵骨の曲りたるが爲なり。

應舎の倒潰せざりし爲泉(升太郎)署長は直に唧筒自動車及水管自動車を廳外に輓出さしめ、火災の發生を豫期して出動準備を爲したるに、早くも平沼町に發火せるを見て直に出動し之に赴かむとしたるに、道路の陥没橋梁の墜落は交通を斷ち克く之に達する能はず、然るに又續て西戸部町藤棚附近にも發火せるを以て之に赴く途中、鹽田に於て自動車は道路の龜裂に陥り進退の自由を失ひ如何ともする能はず、火は刻一刻と前方に迫り來り危険言ふ斗りなきに會し、死力を盡して車輪を龜裂より引出して後退せるに、此の時平戸橋通及石崎の民家より發火せるを以て唧筒自動車は水源を櫻橋に取り、防火に努力せる結果此の方面の火は漸くに消止めたるも、鹽田方面の火は平戸橋方面に猛進し來りたるより、之を平戸橋に於て喰止めんとする中烈風に煽られて、延焼範圍は漸次擴大し來り、加之延長せる布管には所々に燃損を生じ、爲に水壓漸次減少すると共に火は西戸部縣廳官舎下通より天神山、石崎方面に延び、戸部警察署及第一消防署は火海の裡に葬られ、烈風は所々に飛火を起し殆んき防火の手段盡きたるを以て、自動車を平沼橋際鐵道「ガード」下に輓き入れ、以て其の燒失を防ぎたるが同所も亦火の包圍を受け、如何とも爲し難きに及びたるを以て已むなく署長以下は横濱驛前に轉じ極力避難者の指導を爲し後火勢の稍衰ふるを待つて、部内各出張所等を巡視し善後策を講じたり。

(3)、**巡查教習所** 巡查教習所は戸部町四丁目に在り、其の建物は木造二階建にして附屬建物共に建坪二百六

十五坪を有したるが震災には倒潰せざりしも、午後一時三十分頃全所の南方に當る近隣より發火し、猛烈に延焼し來りたるを以て岡部(一良)所長は生徒三十一名を巡查部長に引卒せしめて、横濱驛前の廣場に避難せしめ所長は伊藤(邦憲)警部補と全所に居残り重要書類等の始末を爲す中、警察部より横濱公園に召集の命ありたるを聞き同警部補と俱に馳向ひ、途中各所に於て火に遮られ境町より迂回して公園に入らんとしたるも、目的を達する能はず、已むなく南太田町水道山に逃れ、同時に横濱驛前の生徒を水道山に集合せしめ、同所に於て避難民の指導に當りたるが、山下なる日之出町二丁目の河岸に多數避難民の死地に彷徨せるを知り、生徒の若干を牽ひて同所に到りて、之を水道山に避難せしむる等の活動を爲し、翌朝横濱公園に赴き警察部幹部を尋ねたるも之に遭遇せず、依つて水道山に假事務所を開き教習生を指揮して、臨機罹災民の救助に努めたり。

(4)、**横濱稅務署** 戸部町六丁目百五十二番地所在、横濱稅務署は廳舎鐵筋「コンクリート」造二階建一棟(建坪百九十八坪余)と附屬建物木造平家建一棟(全二十九坪余)渡り廊下(全十二坪余)とあり廳舎は壁に龜裂を生じ、天井は沈下し渡り廊下の鐵網「コンクリート」造家根は一齊に墜落し、避難せんとしたる稅務屬田原伊助は重傷を負ひたり(後に死す)火災は午后四時頃南方に當る戸部町六丁目邊より進み來りたるに依り、署員は必死になり書類の若干を搬出したる後、安全地帯に避難せる後に廳舎は「コンクリート」造の外側を残し他は燒燼せり。

(5)、**東京煙草專賣局横濱出張所** 花咲町十丁目東京煙草專賣局横濱出張所は廳舎煉瓦造二階建一棟(延坪

二百八坪) 附屬建物木造平家建二棟(二棟を通じ建坪七十二坪) 倉庫煉瓦造二棟(二棟を通じ建坪四百八坪) 計五棟の内廳舎は家上の化粧煉瓦が墜落し、壁に龜裂を生じ倉庫は一棟は半潰し、一棟は壁に龜裂を生じたるに止まりたるを以て、當時職員總員四十三名中在廳者三十三名には死傷者なし、廳舎は午後三時頃南西兩方面より襲來せる火に依り燒失せり。

(6)、横濱驛 裏高島町一丁目横濱驛は本屋鐵骨煉瓦石造二階建一棟(建坪五百十六坪) 上屋四百八坪にして上屋下若くは構内には十數棟の附屬舎あり、震災には本屋其他共倒潰を免れたるを以て職員には死傷なく、太田驛長は驛員を指揮し重要書類其他貴重品の始末を爲しつゝある内、午后三時三十分構外西北に運河を隔て、接近せる渡邊倉庫の火は其の東方に當る、東京電燈株式會社支店方面に傳はりて、驛の平沼口出札所に延燒し、遂に跨線橋を渡りて本屋に及び、夜十一時頃迄の間に構内の建物は悉く燃燒し、本屋の外側と上屋及跨線橋とは其の鐵骨のみ残りたり。

是れより先き震災の來るや驛内にありたる待合客は全部屋外に逃去り、午前十一時五十九分全驛に着すべき小田原驛發東京行上り客車(約十輛連結)は驛の西方平戸橋踏切附近に於て震災に遭ひて停車し、到底驛に入る能はざる爲乗務員は乗客約四百名に下車を乞ひたるが、其れより間もなく其の附近を燒きつゝありたる火が該列車の後部に燃移りたるを以て、乗務員は前部より三輛目より解放し以て前部三輛の燒燼を免れしめたり、而して右乗客には別段の異狀なく何れも任意に諸方に立去りたるが、此内には代議士吉村鐵之助夫妻及本邦駐劄

獨逸大使あり、是等は保土ヶ谷方面に避難せり、然るに右の下車客にして全驛構内に避難したるものゝ内に一外人紳士の夫人と令嬢とを伴へるものあり、驛長に保護方を申出たるを以て相當の便宜を與へ置きたるに、其の翌日に至り鮮人襲來の蜚語の傳へらるゝや、非常に恐怖し始めて自分の日本駐劄「アルゼンチン」國代理公使「アルゼントロデル、カール」なる旨を明かして、妻子の保護を懇請せるを以て驛長は及ぶ丈けの保護を與へ置く内、六日に至り神戸在留米人の組織せる外人救護團の來演せるに當り、全代理公使の希望に依り全救護團の手に引渡したるが、全代理公使は其の別るゝに臨み驛長の懇切に深く感謝し、記念の爲自ら驛長を撮影し其の後避難地神戸より更に感謝狀を送り來りしが、其の後病氣に罹り本國に引揚げ死去せりと云ふ。

(7)、高島驛 表高島町貨物驛高島驛構内は面積六萬八千七百二十七坪あり、元此の地は埋立地にして其の地盤軟弱なるが爲一般に沈下し、甚しき部分に於ては約八尺に及び、龜裂は到る處に生じ巾一尺乃至八尺に及ぶものあり、斯の如くなるを以て構内群線は全部異狀を來し、留置車輛中石炭積數車は枕木と共に龜裂の割目に落込み、車体の半を泥土に埋められたるものあり、建物の被害を擧ぐれば海岸第一ホーム上屋幅六十尺長さ三百五十尺、全第二ホーム幅四十四尺長さ三百五十尺、陸ホーム幅三十尺長さ五百五十尺、櫛型ホーム六百十坪、驛員及乗務員詰所木造一棟(建坪十五坪)は倒潰し、本家木造二階建一棟(全三十六坪)其他東、西信號技所、上、下轉轍手詰所、湯呑所、助役詰所、浴場、中亘構内主任詰所、海陸貨物發送係詰所、警手詰所、橫斷第一轉轍手詰所、海岸轉轍手詰所は大破若くは傾斜したるが其の後青木町字内海所在「ニューヨーク、スタン

「グード」石油株式会社及「ライジングサン」石油会社の焼失に依り、放流せる石油の帷子川繋留の筏に燃移れるものが海岸「ホーム」に繋かれたる艀船に燃移り、更に進みて倒潰せる海岸上屋、幅六十尺乃至四十尺長さ七百尺の上屋を襲ひ之を焼き、其の下敷になれる大豆、小麥、豆粕等の貨物に移り、其れより構内留置貨車に延焼し、空車二十輛盆車十一輛を焼き、尙貨物驛手詰所木造六坪を焼失したり。

(8)、横濱驛前郵便局 袁高島町一丁目横濱驛前郵便局(二等)は木造「コンクリート」塗二階建一棟(建坪約百坪)と附属木造平家建一棟とありしが第一震にて倒潰し、職員約十五名備人約二十名中主事尾澤岩造一名重傷を負ひたるのみにて他に死傷者なく、午後五時頃横濱驛と共に焼失せり。

(9)、平沼瓦斯製造所 西平沼町所在平沼瓦斯製造所は、製造竈其の他重要建設物の大部分は、殆んど根本的の破壊を被りたるも在所職員約三十名、工夫職工約百二十名中一の死傷者も出さざりしが「コールド」脱水窯破壊し爲に貯蔵「コールド」槽に引火し、同上屋に移り隣接の分析室に延焼したれば、消火に全力を盡せるも、注ぐに水なく風勢愈々加はり遂に右二棟を焼失、漸く延焼を防止せるが此の間僅かに三十間を距て、六十萬立方呎の瓦斯溜あり、恰も右火災の風下に當り炎々たる焰に包まれ、然かも頻々たる餘震に動揺止まず、實に爆發誘致の危殆に瀕せり、此の時に當り技手福士弘一、全柴雄四郎、職工小島勝太郎、工夫木村勝治郎、全根本修一、全龜井貞利の六名は奮然死を決して挺身し、瓦斯槽側面無綴部を切断し以て瓦斯放散の目的を達し遂に克く爆發を免れしめたり。

中等學校の被害

(1)、横濱第一中學校 西戸部町西の原所在横濱第一中學校は火災の厄を免れたるも、地震には可なりの痛手を被りたり、即ち建物本館木造二階建一棟(建坪二百坪)化學實驗室木造平家建一棟(全三十坪)圖書閱覽室木造平家建一棟(全二十坪)書庫煉瓦二階建一棟(全十四坪)参考館(標本室)木造平家建一棟(全二十四坪)講堂木造平家建一棟(全百三十五坪)武道場木造平家建一棟(全百坪)南校舎木造二階建一棟(全百四十五坪)生徒控所木造平家建一棟(全百六十坪)倉庫土藏平家建一棟(全十二坪)小使部屋木造平家建一棟(全六坪)計十一棟及渡廊下の内書庫、武道場、倉庫及渡廊下の一部は倒潰し、本館、講堂及び、南校舎、生徒控所の四棟は半潰したるも、當時は夏季休學中に係り在校したるは職員中生田(宏)校長以下教諭三名、書記二名並に第三中學校長及全校職員若干名居合せたるも幸ひに死傷者なかりし。

全校は池の坂の高所に位し其の敷地は七千八百坪もありて、避難場として恰當のものなるが爲西戸部町天神山御所山、扇田方面の平地居住民の火災に追はれたる者は、警察官の指導に依り舉て此方面に避難し來り、全校構内には午後一時頃より入込み來り、日暮頃には構の内外に充滿するに至れるが、九月二日より戸部警察署は假事務所を此の構内に置き、更に後に至り國の救濟「バラック」四棟兵庫縣のもの四棟計八棟を全構内に建てられたり。

(2)、女子師範學校及縣立高等女學校 岡野町所在女子師範學校及縣立高等女學校校舎は一部半潰し、餘は

全部全潰し、附屬小學校は焼失せり。

全校建物には本館木造二階建一棟、理化博物教室木造二階建一棟、生徒控室、屋内体操場木造平家建一棟、講堂木造平家建一棟、高等女學校寄宿舎木造平家二棟、女子師範學校寄宿舎木造二階建一棟、女子師範學校教室木造二階建一棟、附屬小學校木造二階建一棟計九棟（九棟を通し建坪二千七百六十六坪余）の内本館は半潰し餘は全部全潰したる后附屬小學校は、午後三時頃附近より襲來せる火に依り焼失せり。

本館に奉安しありたる 御眞影は即時安全なりし青木町居住の教頭私宅に奉移せり。

當時は夏季休學中にして生徒職員は登校し居らず、只遽かに宿直員一名と書記一名在校せしも異狀なく、附屬小學校に於て小使一名下敷となり輕傷を負ひたるに過ぎず。

全校に於ては全月二日倒潰せる寄宿舎に罹災者忍び入り、寄宿生所有の夜具布團約八十人分（寄宿生は約百三十人ありたり）は悉く掠奪せられたりと云ふ。

大工場の被害

同署部内の一部は工場地帯にして會社工場の大なるもの少からず、而して職工百名以上を使用する工場にして或は倒潰し、或は火災に罹り多くの死傷者を出せるものを擧ぐれば、第一に指を屈すべきは保土ヶ谷町所在富士瓦斯紡績株式會社保土ヶ谷工場にして、死者四百五十四名、重輕傷者百六十名の多きに上る、之に次ぐものは横濱船渠株式會社、東洋麻糸紡績株式會社、横濱帆布株式會社、横濱護謨製造株式會社、日本絹燃株式會

社保土ヶ谷工場、大日本麥酒株式會社保土ヶ谷工場等なり、先づ富士瓦斯紡績株式會社より之を記せんに

(1) **富士瓦斯紡績株式會社保土ヶ谷工場** 全工場は橋樹郡保土ヶ谷町惟子九百八十五番地に在り、明治四十年の創設に係り、震災當時の社員約一百名、職工男女三千八百五十九名を有せし大工場にして、其の敷地實に五萬坪あり、之れが構内に建てられたる工場其の他の重なる建物は十五棟ありて、此の内一、二を除き全部倒潰し、内四棟は火災に罹れり、是等建物の構造面積及倒潰焼失の區別を記せば、本工場煉瓦造平家建一棟（建坪九千八百五十坪）機關室鐵骨煉瓦造二階建一棟（全五百九十五坪）發電所煉瓦造二階建一棟（全百二十二坪）食堂木造平家建一棟（全七百三十七坪）寄宿舎木造二階建五棟（五棟を通し建坪一千九百八十三坪）醫務所木造平家建一棟（全二百八十二坪）計十棟は倒潰し、晒練室煉瓦造平家一棟（全六百二十六坪）原料手入場木造平家建一棟（全二百八十五坪）原料倉庫鐵骨「コンクリート」造二階建一棟（延坪九百三十九坪餘）事務所木造二階建一棟（建坪百五十一坪）は焼失せり、多數壓死者を出せるは本工場内にして、全工場中央部を貫通する大廊下を境界として、東西二組に分ち東側に屬する製綿室、カード室、ミユール室、晒練室、原料手入室の職工約一千八百名（内男七百名、女一千百名）は早組として午前十一時三十分より十二時迄の三十分間に食事を済ませ、遅組たる西側に屬する精紡室、前紡室、仕上室、燃糸室、準備室、瓦斯燒室の約二千名（内男三百名、女一千七百名）が十二時より十二時三十分迄の間に食事を爲すべく、工場南面に別立せる食堂に向はんとして各々其の室を出て今や大廊下に差懸りたる刹那、震災は襲來しあなやと迷惑ふ遑もなく、三間の大廊下の兩側

を圍める高さ約四間の煉瓦防火壁は轟然たる大鳴動を起して崩潰し、廊下に在りたるもの全部は其の下敷となり、續いて工場は全潰し、同時に他の建物も亦倒潰したるものにして、工場内各所に多数の下敷者ありたると共に散在して若干名つゝ壓死者ありしと雖、四百五十四名の大部分が無残の最後を遂げたるは、彼の大廊下なりとす、斯く多数の職工の壓死者を出せるに反し、社員としては僅に構外購買會屋内に在りたる購買主任一名が同建物倒潰の下敷となりて壓死せるに止まり、他に一名の死者も出さざりし理由を調ぶるに、社員の全部は恰も工場より稍や隔りたる正門内側の事務所階上の食堂に集り、食事中なりし爲震動の來るや直に屋外の廣場に立出たるものなるが、而かも該事務所が幸ひに倒潰を免れたる爲、社員には死者なかりしなり、社員が食堂より屋外に避難せる後間もなく本工場に接する晒練室（全室には藥品及火氣あり）より發火し、續いて零時二十分頃事務所二階夜學教室藥品よりも發火し、晒練室より原料手入場及原料倉庫に延焼し、原料藥品等を焼立つる猛火毒煙構内に瀰滿し、消防の活動を自由ならしめざると共に、下敷者の發掘等を妨ぐるゝこと甚大なりしと云ふ。

全工場が斯くの如く倒潰したるは地震の震動強烈なりとは云へ、一は其の敷地が元水田を埋立てたるものにして、軟弱なりし結果にも因るべし、又多數壓死者を出せる大廊下兩側の煉瓦防火壁の脆くも崩潰せるは、其の内部に鐵骨の入れあらざりし爲なるべし、故に將來大工場の建設者は宜しく耐震設備工場の配備に付き細心の考慮を要するものと思料せらる。

(2)、横濱船渠株式会社 永住町横濱船渠株式会社は横濱最古の船渠にして、其の規模も大なりしが全所は埋立地にして地盤稍軟弱なるが、其の建物の内事務所兼綱具工場煉瓦二階建一棟倒潰し、死者二十八名を出し後ち倉庫の一部を残して類焼したり。

(3)、東洋麻絲紡績株式会社 久保町東洋麻絲紡績株式会社敷地は埋立地にして、地盤軟弱の爲工場倒潰し壓死者二十八名を出し同時に研究室藥品より發火全焼す。

(4)、横濱帆布株式会社 久保町横濱帆布株式会社敷地は埋立地にして、軟弱なるが爲工場倒潰し、壓死者十六名を出せり。

(5)、横濱護謨製造株式会社 平沼町三、四丁目横濱護謨株式会社は其の地盤軟弱なるが爲工場倒潰し、壓死者二十四名を出し工場は類焼せり。

(6)、東京電燈株式会社横濱支店 裏高島町二丁目東京電燈株式会社横濱支店は軟弱なる地盤陥没せる爲、煉瓦造平家事務室倒潰し、六十八名の壓死者を出したる後類焼の厄に遭ひたり。

(7)、日本絹織株式会社 橋樹郡保土ヶ谷町下屋川日本絹織株式会社保土ヶ谷分工場は其の地盤に大龜裂を生じたる爲、工場煉瓦造工場は倒潰し、死者十一名を生ぜり。

(8)、大日本麥酒株式会社保土ヶ谷工場 橋樹郡保土ヶ谷町神戸大日本麥酒株式会社保土ヶ谷工場製壘工場倒潰し、十三名の壓死者を出したる後製壘火熱の爲忽ち發火焼失せり。

右の外職工百名以上を使用する工場にして、震火に罹り焼失せるものを擧ぐれば、裏高島町二丁目古河電気工業株式会社、西平沼町古河電気工業「ケーブル」工場、全町「メートル」電球株式会社、青木町南幸町宮川莫大小株式会社、西平沼町帝國蓄音器商會の五社にして倒潰のみに止まりたるものは、久保町東洋電機製造株式會社なり。

石油流出及燃焼

石油類の河川海中に流出せるものは到る處の水面に、火炎を漂はせて船舶及筏類を焼き、沿岸建物に延焼する等人をして甚大なる恐威を感じしめたり、今青木町字内海町に於ける「スタンダード」石油會社油槽所及「ライジングサン」油槽所の被害状況を記せんに

(1)、「紐育」「スタンダード」石油會社油槽所 全會社は青木町字内海町三千六百十六番地に在りて、事務所煉瓦造平家建一棟の外に石油倉庫一號より八號まで八棟（内三棟は煉瓦造他五棟は鐵筋「コンクリート」造）と一號より九號までの油槽九基あり、倉庫内には石油二十萬箱（一箱十ガロン入）揮發油八萬箱（全上）機械油五萬箱（全上）收藏しあり、此の外に構内廣場には機械油七千樽（一樽五十ガロン入）置きあり油槽には石油七百萬ガロン（約十四萬石）を貯藏しありたり、而して震災の來るや倉庫は八棟の内煉瓦造の三棟が直に崩潰し、又油槽は其の側面に附しある「パイプ」（油槽より石油を船中に注入する場合に用ゆるもの）が附根に間隙を生じ、石油は之より漸次流出して西裏手の内海に注ぎたるが同時に南隣に位する「ライジングサン」石油會社油

槽所の石油も同様の結果に陥り、附近海面一圓に石油を漲らせたる折柄午後〇時三十分頃「ライジングサン」の南方に當る横濱電線製造株式會社方面を焼きつゝありたる火は、忽ち海上の石油に移り附近海面の舟筏を焼き、漸く北進して「ライジングサン」會社に及び續ひて午後一時三十分頃「スタンダード」會社を襲ひ、油槽及倉庫を焼き立て猛烈の勢を示し、火柱天に沖するの凄慘を極め、石油は約二日間機械油は約十二、三日間火炎を揚げ居たり、而して當時社員約三十名、備人約百五十名在社し、倉庫崩潰の際備人四名壓死し、他は無事に避難せりと云ふ。

(2)、「ライチングサン」石油株式會社平沼油槽所 全會社は青木町字内海町三千六百十六番地にあり、事務所木骨人造石造り平家の外に石油其の他倉庫、製罐其の他工場、注油場其の他に建屋總て十六棟と、一番より七番まで油槽七基あり、震災の來るや建物の内煉瓦造の倉庫三棟、石油注油場一棟、守衛詰所一棟計五棟倒潰したるも、社員十三名、備人約二百名には何等の異狀なく何れも無事避難せるが、前項「スタンダード」會社の條に詳記せるが如く、油槽の「パイプ」の附根に間隙を生じ、之れより海面に流出せる石油を傳はり、南隣横濱電線株式會社方面より襲來せる火に依り、一面の火となりたるが油槽に火の入り、最も熾烈の慘狀を示せるは一日夜にして、其の後數日間火炎を揚げ居たり、而して焼失せる油類は石油三千噸（約二萬五百餘石）、重油六千噸（約四萬八百餘石）、機械油類三百樽なるべしと云ふも、兩社とも總て記録を焼失し居るを以て、確實の數量を計上し難きものなり。

社寺及著名建築物の被害

(1)、**縣社皇太神宮** 伊勢山所在皇太神宮は本殿木造一棟(建坪七坪)拜殿木造一棟(全十二坪)は震災に依り傾斜し、第一社務所木造平家建一棟(全二十四坪餘)第二社務所木造平家建一棟(一部は二階建、全八十九坪)能樂堂木造平家建一棟(全三十八坪餘)倉庫煉瓦造二階建一棟(全五坪)は倒潰し、龍山社司は第二社務所の下敷となり輕傷を負ひたり。

伊勢山は別項にも記せるが如く、面積敢て廣きにあらざるも高地にして境内及附近に樹林あり、避難場所としては適當なるが爲に山麓より、火に追はれて逃げ登り來りたるもの甚だ多く、少時にして太神宮前廣場は人を以て埋めたるが、午後四時頃東方山下より襲ひ來りたる火に依り第二社務所は燒失し、午後七時頃西北方戸部伊勢町より襲ひ來りたる火は本殿に移り、續ひて拜殿を燒き此の間風向の變ずること幾度なるを知らず、故に避難民は右往左往僅に灼熱を避けて樹間、崖地、又は石礎の間を避けつゝある間に、火は更に東北兩面より吹き來り、纔かに南西の一角に片寄り集合して凌ぐ中、西南崖上を傳はり來りたる火は將に太神宮西隣に在る原田某邸宅の一角に燃移らむとす、若し同邸に移火せむか之に接近する神樂殿に延燒するは必然の勢にして、復た若し神樂殿に延燒せむか、社前群衆は逆場を失ひ燒死を免るべからざるの危殆に瀕せり、此に於て群衆は力を對はせ、神樂殿を押し倒し遂に延燒を防ぎ、此の地に避難したる約三、四千名(盛時一萬人程避難せしも壯者は危険と見て他に移動し、此時には約三、四千名位なりしが如し)の者は纔に燒死を免れたりと雖負傷者

約十數名は忠魂碑前及其の附近にて遂に燒死し、婦女老幼は右往左往して火を避けんとして踏潰され、重、輕傷を負ひたる者數十名に達したり、此の伊勢山は縣廳官舎の南面に在るを以て、内務部長夫人を始とし各課長の妻子多數避難したるが、此の危険の間に彷徨して辛ふじて燒死を免れ得たり。

(2)、**成田山延命院**成田山延命院は宮崎町三十番地に在り、新義真言宗智山派準別格本山にして、下總成田山新勝寺住職石川照勤之に兼任し、野毛山不動尊として著名なり。

全院建物は木造一棟(建坪六十五坪)にして此の内を本堂、客殿、庫裡の三に別ちあり、此の外に附屬堂宇二棟と本堂屋下(野毛町三丁目)に水行堂(約四十坪)ありしが之等建物は總て僅に傾斜し、本堂前なる石壇高さ約四間は崩潰せり。

當時在院者執事以下十八名にして、午後二時半頃強き南風は猛火を煽り、崖下南方の日の出町、野毛町方面より山上に向て進み來りたる爲、本堂其の他の什器を北隣の空地に搬出したるが、形勢更に切迫せるを見て本堂其の他を伊勢山皇太神宮境内に移し以て、纔に全きを得たるも本堂其の他の建物は全部燒失せり。

同院所在地は市中を一瞬に俯瞰し得る眺望佳絶の場所にして、當時全院の者が震動に驚き堂内より飛出し市中を望みたるに、黄塵一時に舞ひ昇り冥濛として天日爲に黄暗色となり、屋臺鱗々として見渡されたる市中は忽ち透視し得ざる状態となり、次ひて數ヶ所に火炎の渦巻き立揚がり見る／＼八方に燃へ擴がり、烟々たる火の海と化し、龍卷の如き旋風は螺旋の火柱を押し立て、天上天下爛熳たる赤爛怒漲し、其の凄慘實に見るに堪へ

得ざりしと實見者は物語れり。

(3)、**萬徳寺** 萬徳寺は成田山延命院の南西隣に在り、曹洞宗に屬し秋葉山(建坪約十八坪) 道了山(建坪約三十坪)の木造二棟に別れ之に庫裡(建坪二坪)と約二十坪の附屬建物あり、是等は震災には稍傾斜したるのみなりしが、山下より襲來せる火に依り成田山と共に焼失せり。

(4)、**大聖院** 野毛町四丁目百七十一番地及西戸部町境の谷二番地に跨る、眞言宗高野派高野山神奈川縣出張所大聖院は木造本堂(建坪九十坪)木造二階建庫裡(全二十四坪餘)護摩堂(全二十五坪)の三棟あり、震災には格別の破損を生ぜざりしが、午後一時過下方に當る日の出町及野毛町四丁目邊より猛火の來襲を受け、遂に建物全部焼失せり、同院境内空地は約二百坪ありて、野毛坂中腹の高所なるを以て、震災に次て火災の起るや日の出町野毛町方面より荷物を携へ、境内に避難し來る者約一千名に上りたるが、下方より漸次延焼し來るに及び避難民は何れも上方に當る老松町、西戸部方面へ遁走せり。

(5)、**東福寺** 南太田町谷原耕地二千八十番地所在眞言宗高野派東福寺は、本堂兼庫裡木造平家建一棟(建坪百十四坪)附屬建物木造二階建一棟(全二十坪)閻魔堂木造平家建一棟(全九坪)計三棟及樓門の内附屬建物一棟が背後斷崖崩潰の煽りを受けて倒潰したるのみにて、他の建物には異狀なかりしが、全寺敷地は一千二百坪あり、此の邊に於ける唯一の廣場たるが故に、家財を携へ避難し來る者境内に充満し居たる處、午後五時頃全寺の南方清水町方面より熾んに火粉を降らし、遂に避難民の荷物に移火し之が爲に寺は焼失し、且全寺背後の

丘陵高さ二丈横二十間崩潰し、崖上に於ける墓所及八十八ヶ所の石碑は殆ん悉く崖下に顛落せり。

全寺縁起に依れば、全寺は人皇八十八代後嵯峨天皇の勅願所にして、太田道灌之を中興したるものにして、俗に太田の赤門と稱し、市内唯一の古刹なるが寶物等は近く明治三十二年及大正六年の二回の火災に依り悉く烏有に歸し居たるものなり。

(6)、**横濱社會館** 社團法人神奈川縣匡濟會横濱社會館は表高島町甲三五ノ二號地に在り、全館は大正八年の交社會問題、勞働問題の漸く喧傳せらるゝや、匡濟會が社會的施設の一として計畫を樹て、全十年五月竣成せる所にして、鐵筋「コンクリート」造三階建(建坪五百五十二坪)なり。

震災襲來當時の在館者は職員林副館長以下九名、使備人其他出入者にて約四十名寄宿舎(重に勞働者)約四百名なるも、寄宿舎は日中のこと故約八十名居残り、他は皆出稼中に係り、震災に就ては其の建物は鐵筋「コンクリート」造なりしが爲、約三尺五寸地中に沈下したるも別に破損せず、在館者には何等の異狀なかりしも午後四時頃に至り南方中央食品市場方面より來りたる火に依り、全館七十四室の内一、二、三階を通じ二十八室を焼きたるのみに止まりたり。

全館は震災直後縣臨時救護所に充てられたり、全館の沿革其の他左の如し

沿革

大正八年八月開會の匡濟會理事會及評議員會に於て、社會問題、勞働問題の對應策として社會的施設擴張の

議を決し、本會員卒先して事業資金の寄附をなし、次て横濱市及橋樹郡に於ける著名なる會社工場及富豪等此の舉を賛し、其の醜金額百四萬一千圓に達せり、依て匡濟會顧問法學博士渡邊鐵藏氏及工學博士佐野利器氏指導の下に計畫を立て、理事會は之が施設を決定したり。

而して匡濟會の事業中最も力を致したるは是れ本館の建設なり、其の建設費額四十七萬圓、備品費三萬圓を充て、大正九年四月五日地鎮祭を行ひ、直に起工大正十年五月十四日竣工、法學博士左右田喜一郎を會長に迎へ翌十五日より開館し事業を開始するに至れり。

目的

本館は自活せる男子の勞務者に居心地善き宿舍を提供し、以て慰勞と娛樂とを兼ねて享受せしめ、強ひざる教化事業を施し、其の生活の改善向上を圖り、貯蓄の美風を涵養せしめむとす。

位置

横濱市表高島町甲三五ノ二(省線電車東神奈川、横濱驛の中間)

建築概要

敷地面積	一千六百六十四坪一合二勺
建築費	四十七萬圓
建坪	五百五十二坪餘

建坪總延坪 一千三百八十坪

本館建坪 一千三百三十九坪餘

附屬屋建坪(便所及洗面所) 三十六坪

汽罐室(半地下室) 十二坪

室内 疊代用壓搾コルク

合宿室 七十九室(一室約六坪八名以内)

特別室 七室(一室約三坪)

病室 二室(一室約六坪)

宿泊人員 約六百人

宿泊料 一泊金十五錢

設備及事業

事務室 宿泊、職業紹介、人事相談、貴重品及携帶品保管

三等郵便局

娛樂室 娛樂會、精神講話

談話室

食	堂	公開朝食十二錢、晝夕各十五錢
賣	店	公開日用品、飲食物、雜貨類廉賣
醫	療	宿泊者に限り實費診療、診療日、月、水、金曜日
理	髮	公開散髮二十錢、顔剃及小人十錢
備	考	

當本館に隣接し縣營公設浴場あり、入浴一回三錢とす。

(7)、伊勢町官舎 伊勢山地續に位する伊勢町所在伊勢町縣廳官舎には知事官舎を首めとして、内務、産業、警察、港務の各部長及各課長其の他の廳員の居住する官舎にして、總て木造二階建四棟、全平家建十一棟計十五棟二十四戸ありしが、此の地は山上にて地盤鞏固なりし爲か警務課長、高等課長官舎は全潰し、衛生課長、官房主事官舎は半潰したるのみにて、其の他は多少の損傷ありしも倒潰するに至らざりしも、午後二時頃西方戸部町三丁目自邊より襲ひたる火が魁を爲し、其の後各方面よりの延焼に依り午後五時頃迄に全部焼失せり。

(8)、西戸部縣廳官舎 西戸部町所在縣廳官舎は一號官舎十四棟、二號官舎七棟、三號官舎十四棟、四號官舎十一棟、計四十六棟總て木造平家建百四十六戸ありしが、其の地盤は比較的鞏固なるが如きも、傾斜面なるが爲め石垣を以て築立てたる側は殆んぞ全潰し、其の他の側にありても半潰家屋相當に多く、午後三時過ぎ南東池の坂方面と西方壇田方面より襲ひ來りたる火に依り五時頃迄に全部焼失せり。

(9)、税關官舎 税關官舎は明治七、八年頃初めて西戸部町字池ノ坂に設けられしものにして、震災當時全部木造にて二十五棟七十五戸ありしが、此の内二戸焼失、二戸殘存し他は全部倒潰粉碎せりと雖、幸ひ類焼を免れたり。

病院の被害

(1)、横濱市十全病院 横濱市に於ける最大にして且つ最古の病院たる、横濱市老松町一丁目十一番地所在横濱市十全病院は震災に當りては、病舎の一部其の他の建物の一部に傾斜せるものありたるに止まりたるが火災の爲類焼せり。

全院建物は本館木造二階建一棟(延坪六百九十八坪)病室木造二階建一棟(全三百六十九坪)傳染病隔離室木造平家建一棟(建坪五〇坪)寄宿舎木造二階建一棟(延坪百二十坪)貯部屋木造平家建一棟(建坪五十坪)計五棟にして此の内病室及寄宿舎の二棟は傾斜し、他の建物には別段のことなかりしも、本館より後方上壇の病室に通ずる渡廊下墜落し、爲に看護婦五名下敷となり擦過傷を負ひたるに過ぎず、當時職員三十三名、備人十六名、看護婦及看護婦生徒九十一名、入院患者百二十九名、患者附添人及外來看護婦等にて約二百四十名ありたるが、是等には死傷者なし、震災と同時に職員看護婦は協力して患者の搬出に努め、本館病室に在りたるものは之を門前の廣場に、後方上壇の病室のものは之を裏手「テニスコート」に何れも避難し居る内、午後五時頃に至り火災は南方に當る坂下老松學校近藤病院方面より延焼し來りたるを以て、門前廣場にありたる患者を

裏手田中新七邸内に移したるに、聽て東方伊勢山方面よりも猛火進み寄りたり、爰に於て田中邸内及「テニスコート」にありたるものは共に水道山市長公舎後方の空地に避難せる後、全病院は午後八時頃全く焼失せり。右場所に避難中患者百二十九名中輕症者九十九名を患者自身又は附添人等の希望に依り其自由行動に任せ、殘餘の重病者は引繼ぎ之れを看護し、二日より全所に「バラック」を建て雨露を凌ぎ、六日より焼残りたる老松町の平沼久三郎邸に移し、全邸を假病院として事務を執り、大正十三年六月二十一日迄引繼ぎ全邸に留りたり。全病院は實に横濱最古の公設病院にして、明治五年權令大江卓の主唱に依り、米人「セメンズ」を聘し初めて野毛山（焼失前の地）に設け横濱市病院と稱し、全七年十全病院と改稱し、全年天然痘流行せるに付臨時に全院内に天然痘病院を假設し種痘を勵行す、全十三年和蘭人「ブツクマン」英人「ボエラ」米人「エル、ドレッツ」等を聘し各科の主任に任じ、全二十二年初めて院長を置き廣瀬佐太郎を以て之に充つ、全二十四年四月市制の敷かるゝや縣より市に移管し現今に及べり。

(2)、**難波病院** 花咲町十丁目八十九番地難波病院は、本館木造煉瓦張二階建一棟（一部は三階）全造二階建隔離室一棟（二棟を通し建坪約五百坪）附屬建物三棟（三棟を通じ建坪百四十坪）計五棟にして、當時職員は本田院長以下看護婦共二十五名、入院患者は四十八名ありたるが、建物が震災に少破損を見たるのみなれば死傷者を出さず、職員看護婦は必死になりて患者の搬出に努め、不取敢西隣煙草專賣局出張所庭に避難したるが、午後三時頃病院に延焼し來るに及び、更に横濱驛前廣場に避難したるに櫻木町七丁目所在櫻木町變電所が爆發す

べしとの聞へありたるより、又同所を去り線町鐵道貨物線内に轉じたるが、其の此處に到る途中混雜に紛れ患者の三分の一は行衛不明になりたるも、二日未明に至り大体所在を發見し、前記場所を假診療所となし引續き看護し、三日夕刻に至り患者は之を其の保護者に引渡したりと云ふ。

(3)、**大西病院** 南太田町東耕地二千五百番地大西病院は本館木造二階建一棟（建坪約百二十坪）外來診療所木造二階建一棟（全約八十坪）傳染病隔離室木造平家建一棟（全約九十坪）計三棟あり、震災には建物に格別の被害なかりし爲、當時職員久賀院長以下二十三名、入院患者四十四名、附添人五十名ありたるが死傷者なし職員患者等は最初は全院の庭に避難し居たるに、午後三時頃西南初音町方面より火の來るに及び、水道山下に避難し更に水道山上に移り、患者を全所更紗染物工場の「バラック」に收容したるが、全院は午後三時過ぎ遂に焼失せり。

(4)、**近藤病院** 老松町一丁目近藤病院は十全病院の下方にあり、市内大病院の一たりしが其の病舎は或は倒潰し或は大破壊の後其の下方なる大聖院及老松小學校方面より來襲せる火に依り焼失せり。

劇場の被害

横濱劇場 全劇場（株式組織）は花咲町十一丁目九十四番地に在りて、劇場は木造二階建（建坪百六十坪餘）にして附屬建物たる本家茶屋と稱する木造二階建一棟（全三十坪）及精養軒と稱する食堂木造二階建一棟（全百坪）あり、當日正午より活動寫眞を興行する豫定にて、館前には開場を待つ觀衆可成り多數見へ、場内には

従業員四十名居たるが、本建物は震災には別段異状なく死傷者を出さざりしが、午後五時頃戸部町六丁目方面より來りたる火に依り焼失せり。

其の他活動寫眞館數ヶ所の焼失被害あるも之を省略す、

危ふく火災を免れたる西戸町大松久保落部

西戸部町字大松久保俗稱羽澤は其の部落入口まで猛火に襲はれたるも、消防奏功し火災を免れたり。

全部落は水道山と第一中學校所在西戸部町西の原の高地との間の凹地にあり、部落入口は北に面して伊勢町三丁目裏通に通じ、南東は野澤山及水道山一帯の丘陵に接し、正南は一本松より久保山方面を望み、西は西の原の高地を控へ戸數約五百、人口約二千名あり、住民の職業の主なるものは人夫、馬力挽子、車夫にして小商人及勤人の小數之れに交れり。

火災は午後六時頃伊勢町三丁目裏通より部落入口を襲ひたるが、幸ひにも其の地形が山間の凹地なるが爲、風力を受くること比較的緩やかなりしかば、此の方面の救助に向ひ居たる全署鈴木(勝之助)巡查部長は部民を指揮して消防に努め、水道山貯水池より暗渠を傳はり流出する剰水を利用し、又一面破壊消防に依り遂に猛火の進路を断ちて消火の目的を達したり。

火災を免れたる平沼久三郎邸

老松町一丁目十五番地平沼久三郎邸が東に野毛坂の密集部落、南に老松小學校、近藤病院、西に横濱市十全

病院、富豪渡邊福三郎邸北に若尾幾造別邸の大屋を控へ、是等が齊しく炎上せる中に包圍され一部小建物の焼失を見ながら、克く類焼を免れたるは天佑とも云ふべき奇象なりとす。

全邸は野毛坂上の傾斜面に建てられたる宏壯なる邸宅にして、其の敷地二千九百餘坪あり、先づ震災の被害より之を叙すれば本館木造平家一棟(一部二階)(建坪二百六十坪) 離家一棟(全二十七坪) 西洋館木造二階建一棟(全百坪) 渡廊下(全十四坪) 倉庫煉瓦造二棟(二棟を通じ建坪十七坪) 計四棟及渡廊下は小破損に止まり管理人住宅木造平家建一棟(全十五坪) 備人留所木造平家建一棟(全十五坪) 物置小舎木造二階建一棟(全十五坪) 倉庫煉瓦造二階建一棟(全十五坪) 計四棟は半潰し、請願調査詰所煉瓦造一棟、門番詰所煉瓦造一棟、植木小舎煉瓦造一棟、稻荷社祠木造一棟、物置小舎木造一棟、計五棟及邸宅前面煉瓦塀約一丁は全潰せるが、死傷者なし。

火災は午後一時頃野毛坂大聖院方面より延燒せる火は平沼邸前通を老松小學校、近藤病院より十全病院方面へ登り行きたるが、此の時は平沼邸は邸内の植込と前通の街路とを隔て、且つ風は眞直に上方へ進み行きて同邸は灼熱を受くること少なく午後四時頃に至り南方水道山方面より火の進み來りたる時は、既に邸前に當る近藤病院及老松小學校等の燒落ちたる後にして火の進路断へ居り又大聖院下より坂を登り野毛切通を燒き、戸部町一丁目方面へ進みたる火に對しては、平沼邸は高さ二丈餘の石垣あり此の上には植込あり、家屋と石垣との間には「テニスコート」ありて家屋と石垣との間隔廣き場所にて、約四十間狭き場所にて約三十間ありたるが

爲延焼を免れ、夜九時頃北方若尾邸西方渡邊邸の焼くるときは最も危殆に瀕し、此の方面の板塀は焼失し、西方の火足は邸内に進入し、茶室木造平家建一棟(建坪二十坪)焼失したるも、防火其の効を奏し其の他の建物には及ばずして止みたるが、邸内の人々は既に唧筒の用を爲さざるに至りたるを以て、各々「バケツ」其の他の容器に水を汲みて屋上に登り瓦の迂りたる家根に登り、降り注ぐ火粉を濡帚にて掃き消し、以て辛くも類焼を免れたる由なるが、要するに全邸の残存を見たるは風位が數々變更し、風は常に同邸の一側面を素通するの形にありたるが、第一の原因なると共に又一面には高き石垣、鬱叢せる植込及廣き空地の存したるも大なる原因なると共に、全邸の請願調査及雇人の若干が最後迄居残り、消火に努めたるが爲遂に焼失を免れたるものなり全邸が類焼せざりし爲全邸内に逃込み來りたる避難者多數に上りたるが、横濱市十全病院は九月六日より全邸を仮病院として診療事業を開始し、十三年六月二十一日まで全邸に留まりたり。

附記

全邸は先代の建築に係り前記離家銅板葺き木造平家建一棟(建坪二十七坪)は特に其の組立を嚴重にし、耐震構造とし地震の際には此の内に避難することゝなしありたるが、今回の地震には壁に小破損を生じたる位にて別段の被害を見ざりき、之れ先代が安政年間の地震に遭遇し、邸内に耐震設備の必要なるを考慮し爰に意を用ひたるが爲なりと云ふ。

斷崖崩潰

全署部内は西南部は丘陵地帯なるを以て斷崖の崩潰せる個所少なからず、今其の内の大なるものを擧ぐれば左の如し

記

場所	高サ	長サ	厚サ	死傷及家屋埋没數		備考
				人	家屋	
西戸部町境谷 一、六五五	六間	八間	一間	一	一	
同 町古井戸 一、五七七	二間	十五間	五尺	一	一	家屋埋没同家女兒一名死亡セリ
同 町 一、五九九	四間	十五間	一間	一	一	
同 町 一、五八四	三間	二十間	二間	一	一	
同 町 一、六五九	三間	三十間	一間	一	一	
同 町 一、六七〇	二間	二十間	二間	一	一	
南太田町 二、〇二五	三間	十五間	二間	一	一	
同 町 一、九七四	三間	三十間	三間	一	一	

同町	三〇六	三	間	四十間	二	間						
同町	三〇三	三	間	十間	二	間						
同町	二〇三	四	間	四十間	三	間					崩潰ニ依ル家屋破壊三棟四戸 死傷者ナシ	
同町	二〇〇	一	間	六間	一	間						
西戸部町	六六	二	間	四十間	二	間						家屋埋没男一名死亡
南太田町	二〇〇	二	間	二十間	二	間						
西戸部町	六六	二	間	二十間	二	間						
同町小松原	七三	一	間	十五間	一	間						
同町	七五	一	間	三十間	一	間						
同町	五九	二	間	二十間	一	間						
同町	六八	一	間	二十五間	三	尺						

火災の状況

全署部内に於ける火災の發火個所は市部十五ヶ所郡部檜樹郡保土ヶ谷町三ヶ所計十八ヶ所とす。

戸部町一丁目渡邊邸石垣	六	間	十五間	二	間			三		六	崩潰ニ依リ六月埋没男二名女一名死亡外ニ救出二名
伊勢山太神宮後屋	三	間	三十間	二	間			一		家屋埋没女一名壓死	
西戸部町至吾(勝)	四	間	十七間	二	間						
伊勢町二丁目巖正金銀行俱樂部	五	間	二十間	一	間			三		通行者男三名壓死	
宮崎町正金銀行俱樂部石垣	二五	間	二十八間	一	間						
宮崎町	六	間	五十間	一	間			一		壓死者女一名	
同町延命院石垣	二	間	十六間	二	間			一		壓死者女一名	
同町崖	五	間	五間	二	間			一		壓死者男一名	
戸部町四ノ	三	間	十五間	一	間						
西戸部町御所山	三	間	十五間	一	間						

今市部の状況より之を叙せんに

- (1)、平沼町二丁目二十六番地友田製薬工場倒潰し、直に發したる火は烈風に煽られて忽ち擴大し、平沼町、仲町、材木町方面を焼き立て、裏高島町二丁目に延焼し更に進みて高島町三丁目より全町八丁目に及ぶ。
- (2)、西平沼町無番地古川電気工業株式會社「ケーブル」工場倒潰し、正午十二時頃發したる火は附屬製油工場及横濱工業株式會社を焼き、平沼町に出て前項友田工場より發したる火に合す。
- (3)、西平沼町所在横濱市所管瓦斯製造所内より發したる火は、全所内の一部を焼き消止む。
- (4)、岡野町所在横濱市立岡野尋常高等小學校全潰し、直に發火し隣接染色工場に移り之を燒失したる後消止む。
- (5)、岡野町十一番地蠟燭製造業上原半太郎方全潰し、直に發したる火は前記平沼町の大火に合す。
- (6)、青木町南幸町三千四百九十七番地豆腐商河内莊太郎方全潰して、直に發したる火は擴大して前項上原方より延焼せる火と合し南北幸町に延焼す。
- (7)、岡野町十五地酒商村岡マサ方全潰して、直に發したる火は第五項上原方の火と合す。
- (8)、岡野町十八番地建具職大倉平三郎方より午後三時頃發したる火は、縣立女子師範學校附屬小學校に移りたるが岡野町巡查派出所詰巡查小泉佐兵衛、小林健及附近に居合せたる全署巡查鈴木三郎、内田靜等が附近住民と協力消防に努め遂に全校を燒失して消止む。
- (9)、綠町一丁目一番地密製造小野次郎方全潰して、直に發したる火は忽ち擴大して橘町、綠町、内田町を焼き

盡せり。

- (10)、戸部町 四丁目百二〇番地煎餅製造商村松ミヨ方全潰し、午後〇時三十分頃煎餅焼場より發したる火は忽ち戸部町方面に擴がる。
- (11)、戸部町 三丁目八十七番地洋服裁縫業安達操方全潰し、午後〇時三十分頃發したる火は戸部町より花咲町方面に延焼す。
- (12)、西戸部町 山王山六百二十二番地職工須山繁吉方全潰し午後〇時二十分頃臺所より發したる火は二手に分れ一は池の坂税關官舎方面に延び、一は西戸部縣廳官舎方面に延び、更に鹽田方面に進み全方面の火と合したる。
- (13)、西戸部池ノ坂 六百十五番地煎餅製造商小出庄藏方全潰し、竈より發したる火は前項須山方より發したる火と合し延焼す。
- (14)、西戸部町鹽田 千四百二十三番地南京料理店寶亭事平林俊英方全潰し、直に炊事場より發したる火は忽ち水道路に延び折柄の西南風に煽られて擴大し鹽田、扇田、石崎を焼き戸部町に出て一方は西に走り宮の前、池の坂、天神山、西の原に及へり。
- (15)久保町鹽田 百二十二番地東洋麻絲紡績株式會社研究室より發火し、全工場を焼き附近水道局材料置場に移り、同所に於て止み一方は惟子川を隔てたる對岸淺間町に移り、全町に於て十六戸を燒失し、淺間町巡查派

出所詰巡查須田起夫が附近住民と協力して消止む

以上の如く十五ヶ所より發したる火は全署部内目貫の場所全部を一掃し、纔かに焼け残りたる部分は平地に在りては片寄りたる邊鄙の場所か左もあらざれば高所若くは丘陵間の凹地部落にして、今其の残存部落を擧ぐれば久保町全部、西戸部町の内横枕の一部、境の谷、稻荷臺、富士塚、一本松、大松久保各全部、小松原の大部分、山王山の一部、池の坂の一部、西の原の一部、裏高島町の一部平沼町の一部、岡野町の大部分、西平沼町尾張町各全部、淺間町の大部分、南太田町の内東耕地の一部、谷原耕地、霞耕地の各大部分等なり
郡部保土ヶ谷町の火災状況を記すれば

(1)、**保土ヶ谷町帷子** 九百八十五番地富士瓦斯株式会社保土ヶ谷工場内夜學部教室藥品より發火し、工場全部を焼燼し、全町字山下九百九十四番地出繩始良方倒潰家屋に移らんとしたるを保土ヶ谷警部補派出所勤務警部補廣澤幸太郎及山下駐在所巡查足立喜代治は住民と協力して之れを消止め、一方全町字峰方面に移らんとしたるも是又消止めたり

(2)、**保土ヶ谷町字神戶** 十七番地大日本麥酒株式会社保土ヶ谷工場内製壘工場倒潰して發火し、全工場内三棟を燒きて消止む

(3)、**保土ヶ谷町帷子** 百五十六番地新炭商久保田權太郎方全潰し、臺所より發火したるが、川岸巡查駐在所巡查後藤初郎が發見し、住民と協力して之を消止めたり

避難民の避難状況

戸部警察署部内は一方に丘陵地帯を控ゆるを以て避難には稍々好都合なりしが如く認めらる、今避難場所及避難民の概数を左に掲ぐることにしたるが、右概数は其の場所に於ける一時的の數にして、其の避難場所に依りては火災迫り來りて留まり難きに至りては、其の所を去りて他に移りたるを以て固定せる數と見る能はざるものなり、

記

第一中學校附近	二〇、〇〇〇名
掃部山	一〇、〇〇〇
高島驛構内	一〇、〇〇〇
池ノ坂埋地	二、〇〇〇
山王山	一〇、〇〇〇
岡野町濟生會	一〇、〇〇〇
稻荷臺小學校附近	二〇、〇〇〇
伊勢山皇太神宮境内	五、〇〇〇
大谷嘉兵衛邸	五、〇〇〇

水道山	三〇、〇〇〇
西戸部東海道鐵道線路内	五、〇〇〇
西戸部町野澤邸跡山林	一〇、〇〇〇
久保町裏山	一〇、〇〇〇
保土ヶ谷町岡野公園	五、〇〇〇
計	一五二、〇〇〇

第四節 毒警察署管内

震 前

全署管内は市の南西部に位し東は大岡川を隔て、山下町(加賀町署管内)に臨み、南は石川町、中村町の丘陵及山手町、根岸町(山手本町署管内)に接し、西は磯子町、岡村町、大岡町を界として遙かに久良岐郡を控へ、北は吉田川及大岡川を隔て、伊勢佐木町部内に對す。

全署管内二十七ヶ町の内埋地十五ヶ町及石川町は商業地に屬し何れも殷賑の地ならざるはなく就中龜の橋(石川町)を起點とし一直線に北向し、蓬萊橋を渡り伊勢佐木町署部内に入る、龜の橋通と車橋(石川町)を起點として一直線に北向し、千秋橋を渡り伊勢佐木町署部内に入る、長者町通と花園橋(扇町)を起點として西向し

南吉田町千歳橋に達する、扇橋通の一部とは去る大正八年四月の大火以來其の道路は擴張され其の建築は新装され、道路の清潔と店舗の裝飾と相俟て町容の壯美を保ち、同署部内に於ける眼目地たり、扇橋通に接近せる永樂町、眞金町に跨り眞金町遊廓ありて更に一部の繁華を添ゆ、市電八幡橋線は中村町池下橋より部内に入り堀割川に沿ひて瀧頭町八幡橋に到る、此の沿線には縣揮發物貯庫、全爆發物貯庫、横濱刑務所、横濱市電氣局等あり、八幡橋と中村橋附近とを除きては人家概ね稠密ならず、八幡橋電車終點より瀧頭町、磯子町を経て西へ赴く大道は第三十一號國道(東京横須賀鎮守府間)にして、瀧頭町及磯子町は近時住宅地として急激の發展を遂げ磯子には借樂園、磯子園等の大割烹店あり、荻谷橋(蒔田町)より部内に入り市電弘明寺線と並行し蒔田町、大岡町を経て久良岐郡へ向ふ大岡通は是又新開地にして重に住宅地として繁榮し、殊に大岡町弘明寺終點附近には弘明寺觀音、高等工業學校、商工實習學校等のあるありて更に一段の繁華を呈し居たり

震 後

全署部内に於ける震火の跡を視るに、全署管轄町数は總て二十七ヶ町にして、此の内に包容せる震前の戸数は二萬五千九百五十八、人口十一萬四千五百四を算せり、而して先づ被害數字を現せば火災町數二十四ヶ町、燒失戸數一萬七千四百七十八、全潰戸數一千四百九十六、計一萬八千九百七十四、壓死者八百五十一、燒死者七百七十、計一千六百二十一、行衛不明者百二十九、橋梁四十中燒失及破壞十三、半壞十に及べり。

今以上の數字に立脚し慘狀の概要を叙説すれば、部内二十七ヶ町中震災を最も強く感じたは、所謂埋地と稱

する吉濱、松影、壽、扇、翁、不老、萬代、長者、富士見、山吹、眞金、永樂、山田、千歳、三吉の十五ヶ町并に南吉田町の一帶にして、此の方面は埋立地として其の地盤軟弱なる關係上建物の大半以上は第一震に依り倒潰し、尋て却火に襲はれ焦土に歸したるものなるが、部内二十七ヶ町中全く祝融の難を免れたるは、僅かに岡村町根岸町、山手町（根岸、山手は壽署部内に屬する分として）にして一草一木の微をも剩さず灰燼にせるは埋地一帯なりとす、此の地帯は全署部内に於ける殷賑なる商業地としての眼目地點たり、管に全署部内の眼目地點たるのみならず亦市の南西部に屬する商業地として樞要地域たりしなり、之に亞ぐ殷賑地は大岡、蒔田及南海岸に沿へる磯子なりしが、前二者は殆んど焼滅し磯子のみは僅かに其の中心地の一部を焼きたるのみにて止まりたるは幸ひなりと云ふべし。

先づ一ヶ所に於て多數の死者を出せる悲惨の状況より之を擧ぐれば、吉濱町石炭置場、横濱刑務所、眞金町遊廓、南吉田小學校庭内其の他石川仲町三丁目、中村町及磯子町に於ける壓、焼死者なりとす。

最初に吉濱町石炭置場に於ける慘狀より記せば全所は吉濱町の南東隅に位し、大岡川と中村川との合流點に突出し三角形を爲せる廣場にして、其の面積一千二百坪ありて此の内に神戸山下汽船株式會社所有石炭約一千噸と吉濱町十四番地石炭商中村廣一所有石炭二百五十噸とが堆積しありたるが、吉濱町附近の住民は強震に脅かさるゝや、先づ此の廣場に避難せるに間もなく附近より發火したり、然るに此の地帯の危険なるを感じ、他に轉避せんことを勸告せる者もありしと雖、避難者は此の地帯が去る大正八年の埋地の大火に無難なりしより樂觀し、強

ひて此に留まり居たるが、聽て襲ひ來りたる猛火は此の廣場内一隅の建物并に石炭に燃え移り熾んに燃焼し、且對岸石川町及山下町方面の炎熱に炙られ到底耐忍すべくもあらず、河中に飛込み遁れたる少數者を除くの外約百五十名は遂に焼死し、眞金町遊廓内大門通に當る全町一丁目八番地街路は道幅八間を有せるが、其の中間約五六間陥没し深さ二尺五、六寸位の水溜りとなり居たるに、附近居住民中荷物取片付け等にて逃げ後れたる少數の者は、此の水溜中に身を浸し以て生命を保たんとしたるも、是等少許の淺水の能く人命を蔽庇すべくもあらず、遂に二十三名此に焼死し、南吉田町八百五十八番地第三吉田小學校々庭は面積一千坪を有し、北は街路を隔て、中村川に臨み、校庭を圍みて東、南、北の三面に校舎あり、校舎は震動の爲早くも倒潰し、附近住民は最初此に避難し來りたるも、諸所に火災の起るや此の狹隘地域に於て凌ぎ得ずと思惟せる多くの者は他に轉じたれども、残る少數者は他の注意を肯せず荷物等を固守して全所に留まり遂に此に三十名焼死せり。

此の外に被害の特に慘憺たるものを擧ぐれば、眞金町遊廓に於ては大夏高樓櫓を并べて倒潰し死傷頗る多く、根岸町所在横濱刑務所に於ては其の建物多く倒潰し、囚人の壓死せるもの多く、又中村町所在神奈川縣揮發物貯庫及南吉田町所在「ヴァキウムオイルコンビナー」に於ては其の倉庫内貯蔵の油類の多量に焼失すると同時に河川中にも流込み、水上に火焰を漂はせて船舶又は橋梁を焼き、避難民の避難を妨ぐる等猛威を逞ふし凄慘の光景を呈したり。

以下官公衛、會社、興行場、社寺、中等學校以上の學校、病院等の重なるもの、箇々に亘れる被害状況及火災

状況、避難民の避難状況、斷崖崩潰等に就き詳述すれば下の如し。

官公衙の被害

(1) 壽警察署 扇町五丁目百四十八番地所在壽警察署は、其の側面に位する日ノ出川沿岸が約五尺沈下せる波動を受け、鐵筋「コンクリート」造二階建（建坪百七坪餘）廳舎の壁面には、巾約二尺にも及ぶ大龜裂を生じ床板或は反返り或は沈下する等大破壊を爲し、屋頂に於て約三尺東北の方日ノ出川に向ひて傾斜するに至れり當時署長長谷川（啓三郎）警視は旅行不在中にて、當直出志久保（品一）警部以下約二十餘名の在署員には何等の異狀なく、出志久保警部は事態の容易ならざるに鑑み、拘留囚四名、行政留置人二名計六名を解放し、同時に署員を指揮して重要書類を扇橋々畔の稍高處に搬出し、不取敢署員を同所に避難せしめたるが、此の時には署前路面には巾二尺以上の大龜裂縱横に生じ、之れより下水噴出して物凄き光景を呈し居たり、午後〇時三十分頃警察部長より非常召集の命に接し、當直員と馳せ集まりたる非番員とを合し約二十名を警部補に引卒せしめて横濱公園に向はしめ残る少數の署員及派出所巡查を指揮して、極力人命の救助及避難民の指導を爲す裡早くも附近長者町四丁目に火の手揚り、又續ひて龜の橋邊及八幡谷戸方面にも發火し、忽ち延焼し殆んき避難路を遮斷せむとするの状況に立至りしかば、午後三時頃出志久保警部以下は車橋より中村町臺に避難し、全町唐澤四十五番地大谷方に仮事務所を設け、避難民の指導罹災民の救護治安の維持に努め、全月三日仮事務所を全所横濱植木株式會社倉庫内に移し、次て全町字山田久保田方に移されたり、全署管内に所在せる横濱刑務所

は第一震と共に全部粉碎せられ、囚人中にも若干の死傷者を出し外塀又倒潰して戒護の途なく、其の内附近民家より發したる火は全所の一部を襲ひたるを以て、午後六時頃全所長は遂に一千百三十有餘の既、未決囚を解放せり、爲に之等囚人が全署部内を徘徊し衣食を漁る者續出し、地方民何れも危惧の念を抱きつゝある内全日午後九時頃より誰れ云ふとなく朝鮮人の放火又は強盜、強姦等の暴行を演じつゝあるの風説流布さるゝや、不安は一層増大し、罹災民中の不逞者は少許の殘存家屋を襲ふて、食糧其の他苟も生活の必需品は一品も之を餘さず掠奪し、警護の任に在る警察官又は等不逞者の爲に刀傷を蒙るに至る等、不逞の氣は刻々に増大し、一方平樂原に於ては社會主義者らしき者の煽動演説を爲しつゝあるの報あり、全警部が巡查十數名を卒ひて現場に向ふや、旗を持ち赤布を卷きたる一團に遭遇し、之に解散を命じ不逞の言動なき様懇諭する等極力治安の維持に努めたるも、風聲鶴唳に驚き流言蜚語に怯ゆる罹災民は不安裡に恐怖するのみにして、不逞の狀態は去るべくもあらず、翌二日よりは更に流言蜚語は増大して部民は竹槍、刀劍を持して警護に任じつゝあるも、不節制なる自警團の暴行は時と共に激烈を加へ時々鬨聲を揚げて鮮人を追ふ等殆んき戰時狀態の如き觀を呈せり、此の間に處し出志久保警部は、署員を指揮して大に部内の警戒及救護に努め活躍する處あり、當時署長に代り活動せる出志久保警部の南太田町一本松の住宅は、第一震と共に倒潰し其の愛妻は無殘の壓死を遂げたるが、其の悲報を耳にせるも同警部は部内の不穩狀態に鑑み遂に歸宅せず、全三日に至り署内幹部の出揃ふと共に切なる署員の勤めに依り、全日始めて數時間の暇を得て自家を見舞たるが、全警部が非常時に處し不在の署長に代

つて奮闘努力し、不幸の自家を顧みざる行動は實に警察官の龜鑑として推賞すべきものとす、今全人の行動手記の一端を摘記すれば其の一般を窺知するに足らむ。

(出志久保警部手記の一節抜萃)

正面からは到底近寄れないから横手に廻り、倒潰を免れた板塀を乗り越へ内庭へ這入つて様子を窺へば、潰れた庇の下に横はる一つの屍体に近づき視れば、之れ疑ふ方なき我妻の遺骸であつた、嗚呼、妻の死は最早や絶対に疑ふの餘地がなかつた、若し萬一にも誤傳であつてくれればとの、一時的の氣休めの弱ひ絆は見事に切斷されて仕舞つた、愚な話だが自分は此の機に臨んで、尙之が若し夢であつてくれればと天を仰ひて願つた、けれども此の夢は遂に永久に醒めない夢であつたのである。

平素自分は豫て妻に警察官の覺悟を示し、萬一の場合を慮かりて自筆遺言證書を渡し置き、妻は之を佛壇の中に仕舞つて置ひて呉れた、彼は元武門の幸ひに平素から克く自分の意中を理解し、極端に公私を區別して家庭を顧みない自分の態度を寧ろ喜ぶの風があつた、自分は涙と共に生けるが如く死骸に向つて詳しく震災後の自分の行動を告げた後、帶劍の鞘を拂つて「ブツリ」と其の髪を切り取り之を懐中したのである、噫天命なりとは云へ遺言状態もこしらえて置ひて、而かも幾度か銃劍の下を往來せる夫は健在し、遺言狀を預つて家庭を守りし婦の死を見んとは、當時自分は既に死を覺悟して居た、再び此屍体を手に入れることは恐らく不可能だと思つたので、遺髪を切り取つた後隣家の今井氏に自分の死後は倒潰家屋内の佛壇にある遺言

書を取り出し萬事處理して下さる様にと頼んだ、夫れでも屍体を其儘捨置くのも不本意と思ひ、町内の青年會に交渉し附近の墓地に自ら穴を堀つて入れ、隣家から貰つて供へた一束の線香も強雨の爲「マッチ」が濡れて火が付かぬ悲しさ、儘よと其の儘最後の袂別を爲し、之が屍体との永別となることかと幾度か後を振り返りつゝ再び警察戦線に向つたが、其の後幸か不幸か自分も生を完ふしたので、三十五日目に漸く此の屍体を堀り出し火葬することが出来たのである。

(2) 横濱爆発物貯庫 根岸町字分田と堀内町字新川に跨る丘陵に據り、堀割川を左側にせる横濱爆発物貯庫(敷地七千坪)は其の事務室木造平家建一棟(建坪二十七坪)は半潰し、巡查詰所木造平家建一棟(全六坪)は小破し、巡丁詰所木造平家建一棟(全三坪)荷造場木造平家建一棟(全二十坪)物置木造平家建一棟(全三坪)は何れも全潰し、爆発物貯蔵庫煉瓦造平家建(全二十七坪)のもの三棟、全二十五坪のもの二棟、全二十一坪乃至四坪のもの六棟、計十一棟の内三棟は半潰し、其の他は何れも小破損を蒙りたるが、其の當時全倉庫には「ゼリグナイト」三千四百七十四箱(一箱六貫目入)、「プラスチックゼラチン」九百八十箱(全上)、「ダイノーベル」五十箱(全上)、無煙實包二百十三箱(五十二萬發)、雷管五十五箱(五十二萬發)收容しありたり、半潰に至りたる倉庫中三棟には「ゼリグナイト」「プラスチックゼラチン」等の爆薬又は無煙實包等收容しありて、倉庫破壊に依り木材又は煉瓦破片等は等危険物の上に墜落壓迫し、相當の衝動を與へたるを以て、普通の場合に於ては當然爆発すべき理論に到達するものなるも、然かも何等の異狀を來さざりしは奇蹟と云ふの外なく、加之

全貯庫の南方數丁に在る横濱刑務所及貯庫と堀割川を隔て、相對する「セールフレザー」株式會社製材部に火災起り、熾んに火粉を飛ばせたるも、西風なりし爲火粉の東方に飛去りしこそ幸なれ、若し南風なりしならむか貯庫構内に忽ち移火し、恐るべき大慘事を惹起せしならんと思へば、實に悚然として戰慄せざるを得ず。

(3)、**神奈川縣揮發物貯庫** 中村町字道場神奈川縣揮發物貯庫は類焼の厄に遭ひ、多量の收藏品を焼失し凄慘の光景を呈したり、全貯庫敷地は一萬五千坪あり、建物は事務所煉瓦造平家建一棟(建坪約六十坪)小使室全一棟(全十坪)鑄掛場煉瓦造四棟(全十八坪乃至七坪)は何れも全潰し、物置木造平家一棟(全十三坪)は傾斜し、構内周囲の煉瓦壁延長約六百間は倒潰せり、倉庫は鐵骨煉瓦造平家建建坪三十坪のもの二棟、木造瓦張平家建建坪二百五十二坪乃至七十五坪のもの二十六棟、計二十八棟の内約半數は半潰し、餘は小破損に止まりたるが全日午後〇時三十分頃附近南東方全町八幡谷戸、西方全町中村橋附近及西北南吉田町千歲橋附近に火災起り中村橋附近の火は熾んに貯庫方面に火粉を飛ばせ來り、遂に貯庫構内西隅なる瓦の亡り落ちたる倉庫の屋根に飛火し、續ひて倉庫五、六ヶ所の屋根に飛火し防火手段の施す術もなく、全三時頃には一面の火となりたるを以て、主任縣屬一名雇員以下七名は後方の山上に避難せるが、全所は遂に全部を烏有に歸するに至れり。

當時倉庫の收容品は石油六萬六千七百七箱(一箱二罐入、一罐約一斗入)、松脂精九百九十四箱(全上)、揮發油八萬〇〇九十一箱(全上)、酒精百十箱(全上)、「カーバイト」十箱(全上)、「パラフン」蠟二萬五百九十三袋(容量不明)、機械油七百十四樽(不明)にして何れも焼失したるが、揮發油、酒精の焼失に當りては、其の罐

は破裂して空中高く舞揚り石油、揮發油、機械油等は容器の破裂すると共に、貯庫前面の中村川に流出したる量も少なからざるが、機械油は一週間以上も燃焼し居たり。

(4)、**神奈川縣第二衛生試驗場** 中村町所在神奈川縣第二衛生試驗場は其の本館は焼失し、附屬建物の一部は残存せり。

(5)、**横濱刑務所** 根岸町三百四十三番地横濱刑務所は堀割川に面して設けられ、其の周囲は高き煉瓦塀を立繞らせり、建物は木造平家建七十五棟、全二階建一棟、土藏平家建一棟、煉瓦造平屋建三棟、全二階建一棟、計八十一棟の内木造平家建二十六棟、全二階建一棟、土藏平家建一棟、計二十八棟全潰し、木造平家建四棟半潰し、其の外傾斜又は小破損せるもの五棟に及び、看守一名壓死し、全一名燒死し、在監囚人一千百三十四名中五十三名の壓死者を出し、周囲の煉瓦塀は總て倒潰せり。

午後三時頃刑務所の南方に當る瀧頭町二百七十番地附近及南側に隣接せる横濱市電氣局瀧頭寄宿舎を燒ける火は、忽ちに拘留監第五監に延焼し來れるを以て、職員は囚徒を指揮し極力防火に努めたるも火勢猛烈なるに搦て加へて水道管破裂し、注水の途絶へたる爲力及ばず遂に建物全部は燒失せり。

市内の殆んど全部は焦土と化し刑務所亦全く烏有に歸し、差當り囚徒を收容するの場所あらざると共に彼等に供給すべき食料を得るの途も絶へ今は亦何奈とも爲すべき術あらず、爰に於て椎名刑務所長は全日午後六時法の定むる所に據り囚徒全部を解放せり、然れども囚徒中任意踏留りて職員と共に當面の勞務に従事せる者多

かりき、而して震災當時の在監者は已決囚一千七十八名、未決囚四十九名、拘留囚七名、計一千百三十四名中五十二名の壓死者を除き餘は全部之を解放せるものなるが、全年九月末日迄の歸還者は七百八十名にして、残る三百〇一名は逃走者と見做されたり。

全刑務所は全月八日歸還囚の内二百九十五名を全月二十三日、百三十五名を何れも名古屋刑務所に移送せり此の際に於ける囚徒の解放は實に萬己むを得ざるに出でたるものなるが、囚徒解放の聲は九月一日夜より不逞鮮人襲來の蜚語と相和して、強く罹災者の耳朵に響き普通人さへ異様に殺氣立ち、徃々にして常規を逸するの言動を爲し易き際とて、左記解放囚中田爲吉等の如き掠奪團もありしこと、恰も彼等の全部が徒黨を組み到る處に強窃盜を働くかの如き説盛んに傳へられ、市内は勿論郡部一般にも恐威を興へたり、然れども多數解放者のことなれば、中には少數の者の不逞行爲を爲したるものありしと雖、然かも事實の上に於ては其の害毒の及ぶ處の極めて尠少なりしは、彼の混亂時に於ては正に奇象として見ざるべからず。

左記

本籍、東京市四谷區荒木町二十七番地戸主
當時、横濱刑務所監(窃盜一年六月)囚泥爲事

中田爲吉

當三十年

右は住所不定活版職杉本竹次郎外十六名と共謀し、横濱市に於ける震災當時罹災民救護の名の下に義勇團なるものを組織し、共謀して九月二日午前八時頃より午後三時頃迄の間に於て、横濱市根岸町瀧ノ上二、三一五番地上瀧七五郎方外八ヶ所を襲撃し、脅迫して武器、酒、米、野菜其の他の食料品を強奪す。

(6)、横濱市電氣局 瀧頭町所在横濱市電氣局は事務所木造平家建一棟(建坪百一坪餘)及附屬舎九棟の内事務所以下七棟は半潰し、倉庫六棟の内四棟半潰し、一棟は小破し、全運輸課瀧頭出張所木造平家建一棟(建坪百八坪餘)外附屬舎四棟は何れも半潰し、又全町字北田所在運輸課寄宿舎立志寮木造二階建一棟(建坪四十二坪)全安全寮木造平家建一棟(全百十九坪餘)、全平和寮木造二階建一棟(全六十九坪)及是等三棟に對する附屬舎は全日午後二時頃倒潰せる寄宿舎炊事場より發火焼失せり。

會社、大商店の被害

(1)、株式會社松屋鶴屋吳服店 石川町四丁目十四番地株式會社松屋鶴屋吳服店は鐵網「コンクリート」造二階建一棟(建坪百四十坪)土藏造二階建一棟(全十八坪)附屬舎木造二階建一棟(全十五坪)寄宿舎、雜品倉庫兼炊事場木造四階建一棟とあり、此の内寄宿舎は半潰したるも、店建物に異狀なかりし爲當時従業員支配人以下約二百名と來店客約五十名ありたるも、死傷者なく何れも他に避難し、午後一時頃石川仲町四丁目邊より襲來せる火に依り類焼せり。

(2)、株式會社相模屋石坂吳服店 壽町一丁目五十七番地株式會社相模屋石坂吳服店は埋地方面唯一の「デ

パートメント、ストアアー」なるが、其の建物店は木骨鐵網「コンクリート」造化粧煉瓦張三階建一棟（建坪四百五十坪）、倉庫石造三階建一棟（全十八坪）、全土藏三階建一棟（全十二坪）、店員寄宿舎木造二階建一棟（全百五十坪）の内店の北側に接続せる石造三階建倉庫の三階部が崩潰して、店建物階上を壓撃せる爲店建物は三階崩中より炸裂し、店員約二百二十名中重役室、會計室、圖案室、廣告室等に在りたる者二十七名と少數來客中の客一名と計二十八名は壓死を遂げ、外に店員五名負傷せるが全日午後一時半頃西方不老町方面より襲來せる火に依り焼失せり。

(3)、「フレザー」木材株式會社 堀内町五百三十番地「フレザー」木材株式會社は製材所として規模稍大なるが其の建物事務所木造二階建一棟（建坪七十六坪）、動力室煉瓦建平家（全三十五坪）、製材工場木造平家建一棟（全二百坪）、家具工場木造平家建一棟（全八十坪）、乾燥室鐵筋「コンクリート」造平家建一棟（全七十坪）、物置木造平家建一棟（全五百四十坪）、住宅木造二階建一棟（全三十五坪）、計七棟の内動力室、乾燥室、住宅の三棟倒潰し、直に住宅炊事場より發火し建物全部と多量の木材とを焼失せり、平素は職工約九十名を使用し居るも、震災當日は公休日として休業中なりし爲死傷者なし。

(4)、「セールフレザー」株式會社「フォード」自動車部 中村町四百十番地（堀割）「セールフレザー」株式會社「フォード」自動車部は、自動車材料を輸入し、之を組立て販賣するものにして、工場として規模稍大なるものなるが、其の建物事務室木造平家造一棟（建坪十六坪）、工場全一棟（全四百三十七坪）、倉庫全一棟（全二

百十九坪）外附屬舎三棟計六棟は震災には倒潰せざりしも、其の南隣に當る堀ノ内町「フレザー」木材株式會社より發せる火により建物及多量の自動車未製品を焼失せり。

(5)、「ヴァーキニウム、オイルコンパニー」 山下町七十五番地「ヴァーキニウム、オイルコンパニー」所有に係る、南吉田町八百五十二番地所在煉瓦建倉庫一棟（建坪七百四十坪）は震災に倒潰したる後附近の火に依り類焼せり。

焼失油類の種類數量は總ての書類を焼失せるを以て確實に之を知るを得ざるも、機械油が重なるものにて全油其の他に焼失數量は約六千樽より七千樽（一樽約一石入）の間にして是等油類は其の場に於て燒けると同時に、多くは倉庫前面の中村川に流込み火焔を漂はせたり。

(6)、「横濱植木株式會社」 中村町唐澤二十一番地横濱植木株式會社は數十年來園藝、農産物輸出入を營み、著名の會社なるが震災には事務室木造二階建一棟（建坪七十六坪餘）は傾斜し、種物置場木造平家建一棟（全四十坪）大温室（硝子張）二棟、計三棟は全潰し、倉庫及附屬建物數棟は半潰し、温室の破壊せるもの少なからず同會社所在地は中村町の高臺にして其の敷地約一萬二千坪あり、此の附近は火災を免れたる爲避難民の遁込み來るもの多く、一時は構内に約五千人の避難民入込み、高價の内外植物類は全部蹂躪せられたるが、二日頃より九日頃まで其の事務所は山口正憲一派の爲強制的に使用せられ、此の間に會社の器具の大部分と事務所階上にありたる、英國製冬帽約八百個、「バナマ」夏帽（未漂白のもの）約一千個とは全部紛失せりと云ふ。

(7) 帝國冷蔵株式會社橫濱冷藏庫 扇町五丁目帝國冷蔵株式會社橫濱冷藏庫は事務所木造二階建一棟(建坪二十二坪)、機械室木造平家一棟(全七十八坪)、製氷室全一棟(全百二十六坪)、貯氷庫鐵網「コンクリート」造平家建一棟(全五十坪)、倉庫煉瓦造二階建一棟(全百五十坪)、附屬舎一棟の内機械室一棟倒潰したるも死傷者なく、後ち附近の火に依り類焼せり。

倉庫には約二百噸の水貯藏しありたるが其の一部は深く燒失庫の下に埋没し居たる爲容易に融解せず、震後の兩三日間は多くの罹災民が残氷を發掘して渴を慰したり。

高、中等學校の被害

(1) 橫濱高等工業學校 大岡町字中野町及久能下に跨る橫濱高等工業學校は敷地二萬四百六十七坪あり、其の建物は事務室及教室木造二階建一棟(建坪七百七十坪)、附屬舎全一棟(全二十六坪)、普通教室全一棟(全百七十坪)、附屬舎全一棟(全二十六坪)、第一應用化學實驗室木造平家建一棟(全百二十五坪)、第二應用化學實驗室全一棟(坪數全斷)、全附屬舎一棟(全五坪)、第三應用化學實驗室全一棟(全二十六坪)、第一電氣化學實驗室全一棟(全百二十五坪)、第二全室全一棟(全坪數)、生徒控室全一棟(全七十五坪)、物置全一棟(全四十坪)、全一棟(全七坪)、小使室一棟(全二十五坪)、第一機械工場實驗室全一棟(全百五十坪)、第二同室一棟(全百八十坪)、職工控室全一棟(全二十坪)、藥品庫鐵筋「コンクリート」造平家建一棟(全八坪)、水力實驗室木造平家建一棟(全六十坪)、講堂二階建一棟(全百四十八坪)、書庫及倉庫煉瓦造二階建一棟(全三十坪)、銃、劍道場木造平家

建一棟(全七十三坪)、砂置場全一棟(全五坪)、動力及汽罐室鐵筋「ブロック」造一棟(全一坪)、第一渡廊下木造平家建(全四十八坪)、第三渡廊下(全二十七坪)、外材料置場一棟、便所四棟、計三十二棟の内書庫及倉庫一棟動力及汽罐室一棟、計二棟倒潰し、續ひて第一應用化學實驗室的藥品と第二電氣化學實驗室的蓄電池とより發火し、西南の烈風に煽られて忽ち燃へ擴がれるを以て、折柄在校せるは校長以下職員、備人併せて十數名(學校は夏季休學中)なりしが、是等人々は破壊消防に努力せるも力及ばず、第二機械工場實驗室、職工控室、水力實驗室、第三應用化學實驗室、砂置場、材料置場の六棟を残し餘は全部燒失せり。

(2) 縣立商工實習學校 大岡町字久能下縣立商工實習學校校舎は大正十二年八月十六日燒失し、校内に在りたる工場木造平家建一棟(一部二階建、建坪五百七十五坪)を以て臨時校舎に充當せんとして、之れが準備中震災に會し右工場は全潰し、其内にありたる電氣器具、機械、工具の類大半は全月六、七日頃掠奪せられたり。

(3) 橫濱英和女學校 蒔田町百二十四番地私立橫濱英和女學校は雨天体操場木造平家建一棟(建坪八十六坪)全潰し、新校舎木造二階建一棟(全六十六坪)、舊校舎全一棟(全百六十七坪)、寄宿舎全一棟(全百七十九坪)、作法室兼割烹室全平家建一棟、小使室全一棟、教師住宅全二階建一棟は何れも半潰したるも、夏季休學中にて小使のみ留守し居たるが死傷なし。

全校は蒔田町の山上に在りたるを以て火災に追はれたる避難民が、全校構内に約五百名も逃來り居たるが、鮮人來襲の風説に恐れて多くは逃去り、僅か五十名程は其の後暫く校舎内に留まり居たりと云ふ。

大旅館及割烹店の被害

(1)、株式会社横濱ホテル 扇町一丁目二十二番地株式会社横濱「ホテル」は木造五階建(地下室共)一棟(建坪百五十坪)、倉庫煉瓦造平家建一棟(全百五十坪)何れも全潰し、従業員約十五名下敷となり、常務取締役高野某及雇女一名壓死し、宿泊客は約三十名ありたるも、多くは外出中にて館内に残り居りたる邦人一名外人五名計六名壓死し、午後三時頃南方壽町一丁目邊より襲來せる火に依り類焼せり。

(2)、借樂園 磯子町字新地借樂園は磯子方面第一の大割烹店にして、海濱景勝の地を占め夏季海水浴場として亦名あり、全所は梅花の名所久良岐郡杉田街道に當り、門の北方道路を隔て、約四十間の場所にある高さ約四十丈の斷崖は震災に當り、幅百十間に亘り大崩潰を爲し、土塊は借樂園敷地内の約半ば迄押出して小山を築き(斷崖を距る約三十間の道路面に於て埋没最高所約五間あり)爲に借樂園建物の内木造平家建(一部二階建)所謂百疊敷大廣間と之れに接屬せる二階離平家一棟と百坪の炊事場と客席木造平家四棟は全部埋没し、全平家建四棟は約半部埋没し、前記大廣間及炊事場又は其の附近にありたる雇人男女二十八名の内男十一名、女十名、計二十一名は埋没壓死し、同時に木造二階建一棟、全平家建五棟は倒潰し、間もなく埋没せる炊事場より發火し七棟の半埋没の埋殘部及海水浴場とを燒失せり、門脇にありたる人力車宿三好屋事渡邊爲吉方平家一棟も借樂園と共に埋没し、家人三名及來訪者一名計四名埋没壓死せるが、尙借樂園構外道路は長さ一丁も埋没し居ることゝて同所通行中の者にして埋没し居るものも若干ある模様なるも其の數を詳にすることを得ず。

(3)、磯子園 磯子町新地磯子園は全地借樂園と共に同方面に於ける割烹店の大なるものなるが、木造二階建母室の外に客席木造平家建六棟は總て大破せるも半潰を免れ死傷者なし、

眞金町遊廓の被害

眞金町遊廓は眞金町及永樂町の地二萬坪を一廓とし四面板塀を繞らし、此に業を營む貸座敷は八十三軒あり之れが建物は何れも大厦高樓にして、大部分は強震の爲倒潰し多くの壓傷死者を出し、次で廓外より發せる猛火の爲廓内は延焼全滅せり、廓内に於ける死者數を調ぶるに、震前娼妓一千二十七名中死者百四十四名、貸座敷備人六百八十七名中百〇五名の死亡者を出せるが、此の内一戸に於て多數死者を出せるは、永樂町神風樓事山口美代方二十三名、全町二葉樓事原田すい方十九名、全町いろは樓事林金藏方二十六名なり。

社寺の被害

(1)、八幡宮 中村町字八幡谷戸一千二百三十七番地村社八幡宮は前面の石垣及玉垣、東側面の石造防火壁は崩潰し、花崗石華表二基(一は高さ二十三尺、一は高さ十七尺)は倒潰破砕し、建築物は本殿木造平家建一棟(建坪三坪)拜殿木造平家一棟、其の他附屬建物四棟、計六棟は震災には殆んど被害を見ざりしも、午後一時三十分頃より全四時頃までの間に附近の火に依り類焼せり。

(2)、玉泉寺 中村町字東千三百二十番地眞言宗高野派玉泉寺は本堂木造平家建一棟(建坪四十九坪)は倒潰し客殿木造平家建一棟(全八十一坪)、炊事場木造平家建一棟(全十二坪)、倉庫木造平家建(一部二階)一棟(全

十五坪)は倒潰を免れたるも、午後二時頃附近の火に依り類焼せり。同寺境内には九月十日より九月二十四日まで愛媛縣救護班、九月二十四日より十二月三十日まで福井縣救護班を置かれたり。

(3)、蓮光寺 中村町字谿千五百三十番地(地藏坂)眞言宗大谷派蓮光寺は本堂庫裡、大鼓堂、鐘樓、大門(全部木造總建坪二百余坪)の内鐘樓は倒潰し、境内周囲の煉瓦塀は全部倒潰し、午後一時三十分頃南方坂上に當る山手町「テンプルコート」より襲來したる火に依り類焼せり、震災直後全寺境内には多數の避難者逃込み來りたるも、火災の來るや皆全寺裏山より西方牛島坂方面へ轉避せり。

(4)、西有寺 中村町平樂百四十二番地曹洞宗西有寺は明治三十三年西有穆山禪師の開基に係り、明治三十四年頃現暹羅皇帝陛下が皇太子時代、米國御遊學の途當市に御寄港の際參詣せられ銀杏樹の御手植あり、當市として著名の寺院たり、震災に就ては本堂木造平家一棟(建坪約百五十坪)、庫裡木造平家(一部二階建)一棟(全四十五坪)、地藏堂木造平家一棟(全十五坪)、炊事場木造平家一棟、計四棟は全潰し、寶藏土藏二階建一棟(全六坪)、開山堂木造平家建一棟(全十四坪)、位牌堂木造平家一棟(全二十六坪)、物置木造平家建一棟(全二十坪)、計四棟は半潰し、僧學堂木造二階建一棟(全四十坪)、納骨堂木造平家建一棟(全七坪)、計二棟は小破損し、西堂後堂寮木造平家建一棟(全十五坪)、稻荷堂木造平家建一棟(全十三坪)、計二棟は異狀を見ず、當時住職以下學僧まで約六十名あり、此内七名庫裡倒潰の下敷となりたるも輕傷を負ひたるに過ぎず、二日朝山口正憲一派の鎌

田久野(女)が率ゆる掠奪團に襲はれ、米一袋(約五斗)及其の他食料品を持去られ、全日より翌三日までの間に澤庵漬六十樽、衣類其の他の什器は悉く附近避難民の爲持去られたりと云ふ。

特種建築物の被害

日本海員救濟會横濱出張所 吉濱町大岡川沿岸に在りたる日本海員救濟會横濱出張所は洋館二階建五棟(建坪八百餘坪)全部焼失せり。

病院の被害

(1)、龜ノ橋病院 松影町一丁目三十六番地龜ノ橋病院は其の建物石造二階建二棟(建坪約九十三坪)は傾斜したるに止りたる爲、當時在院せるものは職員副院長以下看護婦にて約二十名、備人十五名、入院患者十九名なりしも一の死傷者を出さず、然るに震災直後附近全町一丁目及び全二丁目邊に火災起りたるを以て、副院長絹川義温は職員を指揮して患者を避難せしむるに努めたるが、患者は殆んど全部重症者にて自由の叶はざる者のみなれば其の搬出頗る困難を極め、職員看護婦等は各自患者を背負ひ火の巷を潜り數丁を隔つる横濱公園内に運び、患者全部を安全ならしめたる爲副院長絹川義温、看護婦望月わかの兩名は表彰せられたり。全院は午後二時類焼せり。

右の外に中村町字山田南京病院は全潰の上焼失し、當時入院患者はあらざりしも會計係兼留守番支那人の一家族五名壓、焼死を遂げ、中村町字打越六角病院及瀧頭町横濱市萬治病院は共に小破損を被りたり。

興行場の被害

壽警察署部内には興行場としては大なるものあらず、稍や大なるものとして松影町二丁目活動寫眞常設館港館及蒔田町字榎坪全忠孝館は共に焼失せり。

罹災民避難状況

全署部内は其の西南方に當り大岡、蒔田、堀内、中村各町に屬する丘陵と少しく遠かりて、是等丘陵の南面には岡村、瀧頭及根岸町等の安全地帯ありしを以て、震災直後火災の發生を見るや、早くも全署員は避難民の指導に従事せるが就中埋地一帯は人家稠密し、然かも其の附近には避難すべき空地もなく、又前記丘陵地帯には遠きのみならず、平地を焼き立つる劫火は頗る猛烈なるを以て、埋地方面居住者の避難は實に困難を極め動もすれば火災の包圍裡に陥り易き状態なるに鑑み、大岡川に近き方面の者は之を横濱公園へ、然らざる者は重に之を前記丘陵地帯に導きたるが、猛火に迫はるゝ避難民は雪崩の如く殺到し、其の混亂實に名狀すべくもあらず、又吉濱町の石炭置場は大岡川と中村川との合流點に突出せる三角形を爲せる廣場なる爲、此處に避難せるもの多數に上りたるが、同所は風位の關係上到底猛火の來襲を免れざるべきと共に、然かも其の場所には多量の石炭堆積しあり、危険言ふべからざる状態を看取し、警察官に於て他に避難を勧めたる結果大部分は之れに従ひたるも、之れに肯せず最後まで留りたるものは無残の焼死を遂げたるが、其の數實に約百五十名に及びり而して全署部内に於ける避難地及避難人員の概數を擧ぐれば左の如し

記

中村町地藏坂附近空地	三〇〇名
中村町東橋附近山添	一、四〇〇
全 町石川小學校内	一、三〇〇
全 町牛島坂附近空地	一、五〇〇
全 町石川小學校上山添	一、四〇〇
全 町字唐澤平樂方面山野	三〇、〇〇〇
全 町横濱植木株式會社内	三、〇〇〇
全 町稻荷山下空地	四、〇〇〇
全 町狸坂附近	九〇〇
全 町神奈川縣揮發物貯庫裏山添	六、〇〇〇
全 町西有寺裏山	一、〇〇〇
全 町惠華學園附近	六、〇〇〇
全 町遊行寺境内	二、五〇〇
堀内町山添	八、〇〇〇

蒔田町遊園地

大岡町廣場

磯子町山添

瀧頭町山添

横濱刑務所裏岡村町

根岸町一帯(壽部内)

計

九〇、四〇〇

五〇〇

六〇〇

五、〇〇〇

六、〇〇〇

六、〇〇〇

五、〇〇〇

火災の状況

全署部内に於ては早きは震災と同時に、晚きは午後二時三十分頃までの間に三十八ヶ所より發火し、數回に方位を變じて吹廻はせる烈風に依り、大岡、蒔田、堀内、中村町の各一部根岸、磯子兩町の大部分岡村町の全部を残して他は全部を焦土とせり、今發火場所と延焼狀況とを記せば次の如し

(1)、石川仲町五丁目百五番地米商立壁政吉方より震後發したる火は附近の者消防に努めたるも、水なき爲力及ばず見る／＼擴大し他より來りたる火と合し全町に及ぶ。

(2)、石川町二丁目三十五番地精進揚屋山田ふみ方より午後〇時十五分發したる火は全町より東進して元町五丁目に及ぶ。

(3)、松影町一丁目三十一番地飲食店鈴木清三郎方より午後〇時三十分頃

(4)、壽町四丁目百五十四番地木挽職金原文吉方より午後〇時三十分頃

(5)、扇町二丁目五十九番地飲食店中川喜三郎方より午後一時頃

(6)、全町四丁目百三十九番地貸家差配業堀田岩吉方より午後一時頃

(7)、萬代町二丁目三十五番地倒潰家屋より午後一時四十分頃

(8)、三吉町四丁目三十三番地人夫小川元次郎方より午後〇時十分頃

(9)、全町二丁目三十六番地菓子商飯塚清太郎方より午後一時頃

(10)、眞金町二丁目十五番地飲食店須藤安吉方外全町五ヶ所より午後〇時十分より全二十分迄の間に

(11)、富士見町一丁目五番地豆腐商池田幸之助方より午後一時に發したる火は以上(9)より(10)までの各所の火と互

に燃へ擴がりて相合し烈風に煽られて忽ち埋地一圓を焦土にし

(12)、南吉田町四百七十二番地菓子製造業佐藤瀧次郎方より午後一時十分頃

(13)、全町九百五十三番地蕎麥商川島ふて方より午後一時二十分頃發したる火は前項の火と合し全町一圓に擴が

り

(14)、中村町百十二番地倒潰家屋より午後〇時二十分頃發したる火は附近四十四戸を焼き

(15)、全町一千三百六十九番地倒潰家屋より全時刻に發したる火は附近十四戸を焼き

- (16) 全町八百七十番地貸家差配人君山捨吉方より午後二時頃發したる火は河水を利用し防ぎたるも力及ばず全町字西より山田谷戸に亘り四百十戸に延焼し
- (17) 全町四百二十一番地横濱亞細亞鍍金株式會社工場より午後〇時〇五分頃發したる火は井、河水を利用し防ぎたるも力及ばず隣接内外油脂工業場に延焼し
- (18) 全町一千八十二番地「ミシン」加工業三輪要太郎方より午後〇時二十分頃
- (19) 全町一千三百四十番地酒商小金澤小三郎方より正午十二時頃
- (20) 全町一千三百三十五番地木賃宿原田長佐より午後〇時五分頃
- (21) 全町一千二百四十八番地氏名不詳家屋より午後一時頃
- (22) 全町一千二百六十一番地氏名不詳家屋より午後〇時四十分頃發したる火は(18)より(21)までの前各項の火と互に擴大して相合し
- (23) 堀ノ内町五百三十六番地「フレザー」木材株式會社工場より午後〇時十五分頃發したる火は隣接工場に延焼して止まり
- (24) 藤田町七百五十番地菓子商星野吉藏方より午後〇時三十分頃
- (25) 全町四百九十二番地醫師吉田義孝方より同時刻に發したる火は前者と合し全町大半に延焼し
- (26) 大岡町七百〇四番地飲食店桐ヶ谷作太郎方より午後〇時十分頃

- (27) 全町三十七番地湯屋藤井音次郎方より同時刻
- (28) 全町七百三十一番地西洋洗濯業新倉新藏方より午後〇時五分發したる火は前二項のものと互に延焼し全町の大半を焼き
- (29) 全町七百三十一番地横濱高等工業學校より午後一時發火せる火は全校建物の大部分を焼失して鎮火し
- (30) 瀧頭町二百七十番地工夫中澤芳次郎方より正午十二時頃發したる火は附近四棟を焼き横濱刑務所に延焼し
- (31) 磯子町一千六百八十七番地飲食店岡田平藏方より午後二時頃發したる火は井水に依り消防に努めたるも力及ばず全町百二十戸を焼き
- (32) 全町八十四番地無職住谷操次郎方より午後二時三十分頃發したる火は井水に依り防火の結果同家一戸にて鎮火し
- (33) 全町二十七番地上杉らく方より午後二時三十分頃發したる火は井水に依り防火の結果附近五戸を焼き鎮火す

第五節 山手本町警察署管内

震 前

先づ全署部内の地勢より述べんに部内は市の南部に屬する一帯を占め、其の北端は市街を瞰下し屏風の繞

れるが如く屹立せる丘陵にして、其の上に繁茂せる林樹中に丹壁碧瓦の隠見するは、是れ外國人の居住地たる山手町たり、是れより南の方本牧及根岸海岸に到る間の窪地には北方、上野、千代崎、諏訪、山元町并に山根岸一帯の町々挟まれり、而して本牧及根岸海岸は舊時に在りては一片の漁村に過ぎざりしが、近年著しく發展し、一般都人士の住宅地として愛好され、其の海濱には夏季中は諸所に海水浴場の設けらるゝあり、特に遊園地としては三溪園のある杯、彼れ是れ最近殷賑の巷と化し來りしが、此方面は一般に地盤の鞏固なりし故にや、今般の震災には被害極めて輕微なりし、之に反し山手町方面は丘陵上にありて、傾斜面多く家屋の建築に當りては概ね盛土せしものなると共に、洋館大建築物多かりし結果第一震に於て殆ん全部倒潰し之れに加ふるに猛火の襲來を以てしたるも住宅地なるが故に、外人の多くは山下町或は東京等の店舗に出勤して不宅中なりしと、又一面には外國人の習慣として例年夏季に至れば涼を趁ふて箱根、日光、輕井澤等に避暑旅行を爲し居るが爲、被害の甚しき割合に外國人の死傷は少なかりし、然れども此の焦土に歸せる山手町は舊山手居留地にして、殆ん外國人の住宅を以て滿され、其の山手本町通は特色ある街巷にして、此の衝路に立てる建築物中人目を時たしむるもの尠ならず、之を擧ぐれば日光靈廟に擬せる「ホテル、テンプルコート」あり、外装は古りたりと雖巍然たる容姿を誇る外人劇場「グレート」座あり、尖塔空に抽く基督教會堂あり、又英、米兩國海軍病院等のあるあり、夏時薄暮の頃に至れば涼影輕く搖く街頭を楚々たる風姿の外國紳士淑女が、晩涼を趁ふて散歩する杯誠に外國都市郊外にあらざるかの感を懐かしむるものありしが

今や枯木の疎らに焦土の上に樹てるのみなるを見ては豈に今昔の感に堪へざらむや。

震 後

同署部内に於ける震火の跡を顧みれば部内總面積の約五分の一に過ぎざるも、然かも震火を免れたる大部分の場所は山林或は人家稠密ならざる場所、或は稠密なるも大勢より觀察して樞要地帯ならざる方面なり、之に反し震火に因り亡ひたるは少部分なりと雖山手町の如きは、外國人の居住地として地勢、町容二つ乍ら優れ、又本牧北方、上野、千代崎町方面は町容に於ては稍や貧弱の觀ありて、到底下町方面の比にあらざるも、然も是等の方面は山手方面唯一の商業地帯たりしを以て、之を亡ひたるは恰も眼鼻を失ひたる顔面の如き觀なくんはあらず。先づ山手町方面の状況より見るに、全町一帯は高層地にして地盤稍や鞏固なるが如き觀あるも、傾斜面多きが爲家屋の建築は概ね盛土せしものなると又家屋は普通住宅と雖概ね中流以上の外國人の邸宅なりしが故に、比較的廣大なりし關係とに依り多くは第一震に於て倒潰し、次て所々よりの發火に依り焦土に歸せるものなるが、由來山手町は高層地なれども所々に少部分の凹地あり、加之邸宅と邸宅とは相當間隔あるのみならず、何れの邸宅の周圍及其の他にも樹木茂り、自然防風林の形を爲し居りたるを以て、若し夫れ強風程度の風力なりしならんには斯く迄の大慘狀に至らずして自然延焼を防止し得べかりしも、當日の烈風は是等樹林又は凹地の能く火勢を防護すべくもあらず、一舉に山手一帯を燒燼して全く凡庸と化し、枯木燒林鹿角の如く點在するを見るのみとなれり、斯る状況なりしを以て此の地の居住民は、遁るるに相當の困難を感じしに相違なきも、下町の如く廂々相摩

する底の人家稠密地にあらざりしが故に割合に焼死者も少く、避難者は山手公園或は根岸町鷺山方面或は新山下埋立地等に立退きたるが、山手町に於ける焼失戸数は總て六百三十六戸に達せり、而して全町内に於ける重なる被害建物を擧ぐれば、山手本町警察署、秘露公使館、西班牙公使館、智利、玳馬、佛蘭西、秘露（以上全焼）墨西哥（全潰）等の各領事廳、外人劇場「グレート」座、英、米兩國海軍病院、一般病院、「クライスト」教會、「ユニオン」教會、「ローマカトリック」教會、「テンブルコード」、「ブラフホテル」、「フエヤメントホテル」、「櫻山」ホテル」等にして、警察署倒潰の際には署長以下約十名下敷となり、内警部補以下三名死亡、傷者數名を出したり又山手町内に於て断崖崩潰し慘狀を呈せしは、山手町の東端「見晴し」と稱する場所なり、全所は新山下町埋立地の真上に當り約四十尺の高さあり、東京灣を隔て、房總半島に對する眺望佳絶の個所にして其の断面は「コンクリート」にて固めありしが、此の部分約三十間は道路の少部分を殘して約六尺沈下し、車馬の交通を斷ち其の前後「コンクリート」以外の断崖は約七十間に亘り大崩落を爲し、崖上に在りし外人住宅二軒、邦人住宅一軒は四十尺下の崖下に顛落して粉碎せり。

罹災せる諏訪、上野、千代崎町の全部、北方、本牧、元町、根岸町の一部は小商店と小住宅櫛比し居たるが爲、烈風に煽らるゝ猛火にて一瞬間に二千七百七十三戸を灰燼にせり、之に反し根岸町海岸加層方面は震動影響も比較的輕かりしにや殆んと言ふべき程度の被害なく、之に次ぎて被害少かりしは根岸町の内字相澤、江喜田、柏葉、本牧町の内大澤谷戸、大鳥谷戸及山元町にして是等の地は岩磐の地層なりしものゝ如し。

以下官衙、會社、興業場、社寺、中等學校、病院等の重なるものの個々に亘る被害状況及火災状況、避難民の避難状況等に就て詳記すれば下の如し

官衙の被害

(1) 山手本町警察署 山手町六十番地A山手本町警察署は煉瓦造二階建廳舎（建坪五十一坪）附屬舎木造平家建一棟物置全一棟は何れも倒潰し、當時の在署員署長良田（麟三）警視以下約二十名は皆其の下敷となりたるが、階上に在りたる者約五名の内高等係巡查大和田喜作は瀕死の重傷を負ひ、階下に在りたるもの約十五名の内事務室に於ては警部補内田靜夫、巡查部長安達喜内、巡查中村謙次郎の三名は即死し、警部補西田種治以下八名輕傷を負ひ、良田署長と吉田（珉治）警部とは武道場に於て劍道試合中なりしが、署長は輕傷を負ひたるも吉田警部は無事なるを得、小使室に於ては小使横溝彦次郎重傷を負ひ（後ち死亡す）ひ、署長官舎木造平家建一棟（建坪四十坪）は半潰し、署長三女は脱落せる壁の下に埋没し顔面に裂傷を負ひたり。

廳舎の倒潰するや留置場は地盤の缺潰に依り、裏手二十尺の崖下に土塊と共に顛落したるが、場内に在りたる拘留囚三名は床板の割目より脱出し無事なるを得、午後三時之を解放せり、又留置場外に待たせありたる同行取調中なりし一少年は、廳舎の倒潰と共に壓死せるが同人を同行し來れる、巡查部長安達喜内も亦壓死せるを以て該少年の住所氏名は判明せず。

又谷戸橋派出所勤務巡查大田和藤治は派出所の倒潰に依り其の下敷となりて重傷を負ひたるも、署及署員の

安否を氣遣ひ痛手を忍び「ビール」壘に水を入れて之れを携へ署に駈付け、署員の發掘に努力中なる署長に對し派出所及其の附近の状況を報告し、併せて一同に見舞の辭を述べ携へ來れる水を振舞ひたり、署長は全巡查の重傷に耐へて斯く勇氣のある行動に感じ篤く之れを慰撫し、直に之れを其の家^に引取らしめたるが歸宅後間もなく絶命せり。

是れより先き埋没中より脱出し得たる良田署長は、續ひて脱出せる部下を指揮し未脱出者の發掘救助に努むる中全署の西方約半丁山手町四十三番地より發火し、西南風に煽られて全署方面に速進し來り、續ひて諸方に火の手揚り全署所在地及其の附近一帯は丘陵地にして風を受くること強く、躊躇し居れば崖地多き土地柄故危難に陥るの虞れありたるに依り、署長は已むなく一同を引纏め重傷者は之れを戸板に載せ、全署を距る南方約一丁の地位にある獨逸病院趾の高地に避難したるに既に全所には五、六百名の避難者先着し居り、暫くして附近上野町にも火災起り忽ち擴大し、全所にも留り難きに立至りしかば他の避難民を指揮しつゝ、全所の西方地續きなる山手公園に轉したるが、全公園も亦避難者にて埋まり聽て火焰の包裡に陥りたるも、幸ひに公園は猛火の侵入を免れたるを以て避難民は皆無事なるを得たり、全署員は此に一夜を明かし火の鎮まるを待て翌二日朝署の假事務所を設くべく地位を物色し、全日午後三時頃本牧町大澤谷戸所在署員の住宅を以て之れに充て同所に引移りたり、然るに全夜より三日朝に亘りては不逞鮮人來襲の蜚語熾んに喧傳せられたるに依り、警戒を嚴にすると同時に之れが虚否の偵察を密にし、一方民心の安定に努め三日朝本牧町間門^{まか}方面に散在せる鮮人勞

働者男五十名女三名計五十三名を取調を兼ね保護の爲假事務所に全行したるが該事務所は狹隘にして事務の處理上不便少なからざるを以て、全町大島谷戸縣會議員池田勝次郎邸を借受け鮮人を保護收容したるが人心非常に殺氣立てる折柄とて自警團と稱する數十名の一團は竹槍、刀劍、棍棒を携へて池田邸まで追尾し來り、鮮人の引渡方を叫ぶ杯頗る不穩の形勢を示したるが、該鮮人は一應之れを取調べたるに毫も怪しむべき廉なきを以て何れも所屬の親方に責任を持たせて之れに引渡したり

斯くして諸般の情勢に鑑み、取締區域を三方面に分ち本牧北方を一方面、山元町根岸町の内相澤方面を二方面海根岸方面を三方面として幹部以下を分割配置し以て取締の徹底を期したり

公使館、領事館の被害

山手本町警察署部内には、西班牙公使館を首めとして秘露、智利の二公使館あり領事館には佛蘭西を首めとして秘露、玖馬、智利、墨西哥の五領事館あり、智利公使館は幸ひに被害を免れたるも他は何れも全潰又は全燒の厄を被れり

(1)、秘露公使館 山手町二百四十五番地全公使館は全燒し館内に在りて執務中なりし、代理公使「アルバート、ビー、ラツセル」は無事なるを得て後ち神戸へ避難し

(2)、西班牙公使館 山手町二百四十八番地全公使館は全燒し館内に於て、執務中なりし公使「ホセ、カロ」は無事なるを得て後ち神戸へ避難し

- (3) **智利公使館** 本牧町三百五十番地全公使館は別段被害を受けざりしも、代理公使「イヤネス、ルイス」は震災時恰も山下町某汽船會社内に居合せたるも、幸に無事なるを得て其の後神戸へ避難せり
- (4) **墨西哥總領事館** 山手町二百十六番地全總領事館は全潰し總領事「ジャンベカ」は負傷せり
- (5) **智利總領事館** 全總領事館は山手町百七十九番地「レッツ、ビルデング」階上に在りしが全「ビルデング」は全潰し、全建物内に於て四十六名の死者を生じ全總領事「ロータロ、サルボ」は遽かに身を以て危きを通れ神戸に避難せるが全建物は倒潰後焼失せり
- (6) **玖馬總領事館** 山手町五十七番地全總領事館は焼失し總領事「プレスベロ、ピチャード」は神戸へ避難せり
- (7) **佛蘭西領事館** 山手町百八十五番地全領事館は全潰し、執務中なりし領事「ボール、デジャルダン」及夫人は壓死し其の後同館は焼失せり
- (8) **秘魯領事館** 山手町二百五十九番地全領事館は全焼したるが領事「ローゼン、タール」は當時鎌倉に滞在在中にて異狀なく其の後神戸へ避難せり

中等學校の被害

- (1) **フェリス和英女學校** 山手町百七十八番地「フェリス」和英女學校は、講堂木造二階建一棟(建坪七十坪)、教室兼生徒寄宿舎全三階建一棟(全百坪)、教室兼雨天体操場木造「コンクリート」塋一棟(全六十六坪)、教室兼教師住宅木造二階建一棟(全百五十坪)計四棟及門衛小舎其の他附屬小舎四棟の内教室兼教師住宅一棟は倒潰し校長(米國婦人)「ジェー、エム、カイバー」は壓死し教室兼生徒寄宿舎一棟は傾斜し其の他校舎には異狀なかりしも裏手屋上に在りたる附屬小舎一棟は數十間の屋下に顛落し、午後一時頃屋下元町より襲ひ來りたる火に依り校舎其の他建物全部は焼失せり、當時は夏季休業中のことにて在校せしは、僅かに校長及書記一名と外に傭人數名にして校長以外は無事なりき

(2) **横濱紅蘭女學校外二校** 山手町八十三、八十八、二百三十一番地に亘る一構の内に設けられたる横濱紅蘭女學校、「ゲームド、サンモール」學校、(外國人女子の小學より中學まで連續するもの)、童女學校(救濟的小學校)に於ては外人教師以下生徒に多數の死傷ありたり、右三校は其の名稱を異にし居るも、其の校舎中共用のものあると共に之れが教師も亦共通のものあり、其の校舎は煉瓦造三階建三棟全二階建二棟、全平家建三棟、應接室木造平家建一棟、病舎木造二階建一棟、教會室(御堂と稱す)煉瓦造一棟(平家なれども家根は高く尖る)及附屬小舎數棟ありしが、此の内應接室は倒潰を免れ病舎は半潰に止まりたるも、他は悉く倒潰したる後午後三時頃附近西南方より襲ひたる火に依り全焼せり

當時は夏季休業中にて校長佛國婦人「マリー、シャンニオール」は他に避暑し校内に残留せしは教師及「サンモール」學校の寄宿外人女生及其他童女學校生徒(多くは孤兒)にて約百五十名なりしが其の内壓死せるは教師にありては佛國婦人「セント、ビーエル」、全「セント、セバステン」、全「セント、エツチエン」、英國婦人「セン

ト、マリー」全「セント、センドダンスタン」全「セント、ウイフリー」全「セント、マイクル」、白耳義婦人「セント、エレン」、日本婦人松田たか、全鹿戸とめ、全知野きの十一名、生徒にありては「サンモール」學校の寄宿生六名、董女學校の生徒二十名計三十七名なり、生存者は總て全校裏手西方の空地に一時避難し、其れより山手公園に轉じたり

(3)、**共立女學校** 山手町二百十二番地共立女學校は教室兼講堂木造三階建一棟（建坪百三十坪）、生徒寄宿舎兼教師住宅全二階建一棟（全百五十坪）計二棟は震災には倒潰を免れたるも後間もなく焼失せり、當前は夏季休學中にて留守居以外に在校者あざりし爲死傷者なし

(4)、**共立女子神學校** 山手町二百九番地共立女子神學校は教室兼講堂木造二階建一棟（建坪九十坪）、事務室、應接室兼校長室全一棟（全十五坪）及生徒寄宿舎木造二階建一棟全平家三棟の内講堂兼教室一棟は半潰の上残存し他は全部焼失せり

當時は夏季休學中にて職員二名及寄宿舎に生徒九名居たるも死傷なし

右の外に山手町八十五番地「セントジョセフ」學校と全町四十五番地露國中學校とは共に焼失し、全町二百二十一番地聖經女學校は半潰し、本牧町一千五百三十九番地志成學校（支那人中學校）は小破し、全町六百十番地本牧中學校は殆んそ被害なきを得たり

大會社の被害

1、**麒麟麥酒株式會社** 山手町百二十三番地麒麟麥酒株式會社は麥酒製造業として古き歴史を有するものなるが、其の建物は煉瓦又は鐵筋「コンクリート」造のもの約十八棟ありしが、何れも半潰し死者は社員二名、職工二十四名、計二十六名壓死し、建物は午後三時三十分頃南方北方町千代崎町方面より來りたる火に依り焼失し機械器具、麥酒及麥酒原料等を多量に焼失せり

(2)、**帝國冷蔵株式會社横濱製氷所** 山手町百八十四番地（甲）谷戸橋々畔の帝國冷蔵株式會社横濱製氷所は市内の製氷所として夙に聞へたるものなるが、其の煉瓦造三階建（建坪三百二十坪）の事務所兼工場一棟倒潰せる結果三名輕傷を負ひ機械室に於ては汽罐破裂し「アンモニア」に吹かれて機關部員二名即死し、一名重傷を負ひ建物は午後三時頃類焼せり

(3)、**横濱莫大小製造株式會社** 根岸町西芝生九百三十七番地の二横濱莫大小株式會社は全署部内の稍大なる工場なるが、工場の半部以上破壊せり

旅館及割烹店の被害

(1)、「ホテル、テンプルコート」山手町九番地「ホテル、テンプルコート」ハ地藏坂上の傾斜面に建築せる木造朱塗り宮殿造りにして前面より之れを見るときは三階建なれとも後面より之れを見れば地下室と共に四階建（建坪約百坪位なるべし）なりしが第一震と共に倒潰し其の半かば以上は崖上より背面に當る地藏坂に顛落し、間もなく厨房より火災を起し、焼失せるが雇人約七名壓死せりと云ひ、又當時は恰も午餐時なるを以て食事客も

若干あるべく、是等中にも不幸に遭遇せる者亦若干あるべき模様なるも、事實明かならず

全建物は明治三十九年頃山下町七十番地に於て機械商を営みたる米國人「ホーン」なる者が日光靈廟の建築美に憧憬し自己の住宅として建築せるものにして、美麗莊高の一大宮殿は山崖縁樹の間に抽出して宛然安房宮の觀を呈し、俗に日光屋敷と稱し、一の横濱名所に數へらる、大正九年頃淺野總一郎の手に渡り、爾來旅館兼割烹店として經營され居たるものなりき

(2)、「アラフホテル」山手町二番地(A)「アラフホテル」、は木造二階建一棟(建坪約百八十坪)全三階建一棟(全百二十坪)計二棟の處二棟共に半潰し宿泊客三十名従業員十二名旅客外國婦人三名來訪日本婦人一名計四名壓死し、宿客外人男一名重傷を負ひ、震後直に三階下厨房より發火し燒失せり

(3)、「フエヤメントホテル」山手町十六番地「フエヤメントホテル」は木造「コンクリート」塗二階建三棟全平家建一棟計四棟(四棟を通し建坪約三百坪)は第一震に於て全部倒潰し、宿泊客約十五名従業員約十三名中宿泊外人六名營業者の家族三名計九名死亡し、建物は南方「テンプルコート」方面より襲ひ來りたる火に依り燒失せり

(4)、「櫻山ホテル」山手町百七十七番地櫻山「ホテル」は木造三階建一棟、木造平家建三棟、煉瓦造二階建二棟計六棟の内木造三階建一棟崩潰し、他は傾斜し従事員十八名客二十五名の内従業員二名客外國婦人三名計五名壓死し、建物は午後二時頃附近より襲ひたる火に依り類焼せり

(5)、「磯濱樓及喜樂」本牧方面に於て稍や大なる割烹店たる本牧町字原磯濱樓は全潰し、全町字宮原喜樂は燒失せり

社寺及教會ノ被害

(1)、「本牧神社」本牧町字十二天八百二十五番地村社本牧神社は、俗に十二天社と稱し、市内に於ける著名の古社なるが、社殿の背後に屹立せる十二天岬と稱せらるゝ丘陵の一角が、約五百坪崩潰し、此の崩りを受けて本殿木造平家建一棟(建坪六坪)は後方に顛覆し、平殿全一棟(全十八坪)拜殿全一棟(全十五坪)は小破損を受け、假社務所全一棟(全十七坪余)は半潰し、石華表三基は倒壊せり

(2)、「皇太神宮」北方町西の谷八百一番地村社皇太神宮は本殿が少しく傾斜したるのみにて、他は無事なるを得たるが、午後三時頃附近の火に依り社務所木造平家一棟(建坪二十七坪)は類焼せり

(3)、「妙香寺」北方町六百三十九番地日蓮宗妙香寺は、市内の古刹として著名のものなるが、本堂木造平家一棟(建坪三十六坪)番神堂全一棟(全二坪半)は倒潰し、庫裡及炊事場は小破し、庫裡に並べる新座敷と稱する平家一棟と物置二棟とは半潰し、其の他は概して異状なかりしが、午後五時三十分頃東方崖下上野町を燒き去りし餘炎に依り大黒堂木造平家一棟(建坪十坪)類焼し、此の火焰は本堂其の他二、三ヶ所に飛火し、危ふく延燒せんとしたるも漸く消止めたり、同寺は西方を除く三方崖下に猛焰を受け大黒堂一棟燒失し、且つ目通り周圍八尺乃至一丈の樺立木二十三本は猛火の灼熱を受け、焦枯しながら本堂其の他の類焼を免れたるは甚だ幸ひと

云ふべし

全寺西、南、東、三方の崖地延長約二百間崩潰せり

(4) **教會の被害** 山手町二百三十四番地「クライスト」教會、全町四十九番地「ユニオン」教會全町四十四番地天主公會は何れも焼失せり

病院の被害

(1) **英國海軍病院** 山手町百九十八番地(谷戸坂上)英國海軍病院は明治六年頃設けられたるものにして、横濱として古き歴史あり、其の建物は震災には直に全潰し、院長「シングストーン」中佐は無事脱出せるも、夫人は壓死を遂げ、同時に数名の負傷者ありたるが、震後間もなく西方外人墓地方面より襲ひ來りたる火は門前に當る外人劇場「ゲーター」座迄迫り來り又門下北方谷戸坂にも火災起りたる爲、全病院は其の構内廣き爲坂下及外人墓地方面より火に追はれ通れ來りたる内、外人多數の避難者は只一方の逃れ場所たる、全病院構内に入込み來り、烈風に渦巻く黒煙を構内東方崖上の樹林中に潜みて、暫時凌ぎ居たるが程なく猛火は全構内にも延焼し來りたりしかば、院長は院内のものを指揮して約四十尋以上の太き麻綱三、四條を崖上の樹木の根に結びて之を崖下に垂下し、避難民をして之に緣りて、崖下新山下町埋立地に通れしめたるが、幼者又は婦女等は一條の繩綱に縋かりて、數丈の絶崖を下ること未だ半途に達せざる中に、其の力克く身を支ふる能はず、或は繩を把持する掌の痛さに耐へず、或は續ひて下り下る者の足に押されて覺へず手を放ちて、崖下に落ちて絶息する

者を生ずる等、實に慘憺たる光景を演出せるが、院長が其の夫人の慘死を顧みずして多數避難民の救護に活躍せるは、實に目覺ましかりし由にして、絶壁に垂下する綱繩の不足なるに當りて院旗の掲揚に用ひある旗竿の綱二條の内の一條を切り取り、之を使用せりと云ふに至りては其の壯烈眞に鬼神を泣かしむるものあり

(2) **米國海軍病院** 山手町九十九番地米國海軍病院は焼失し、院長は英國軍艦に避難せりと云ふ

(3) **横濱一般病院** 山手町八十三番地横濱一般病院は市内唯一の外國人病院として、夙に著はれしものなるが全潰の上焼失し、副院長石浦徳太郎は院内に於て壓死し、院長英國人「ウイラー」は山下町三十五番地先街路通行中家屋倒潰の下敷となりて壓死せり

劇場の被害

山手町二百五十七番地外國人劇場「ゲーター」座は倒潰の上焼失し本牧町二千六百番地劇場快樂館は焼失せり

三方に火を受け焼殘りたる箕輪、泉の各一部

箕輪巡查派出所前面に當る本牧町箕輪と北方町泉部落の内、本牧電車線以北にある約三百戸は三方より、猛火を受けながら克く延焼を免れたり、全所は東北に山手町の丘陵を控へ、西北に北方町竹の花、西南は本牧町上臺に接し、南は箕輪下及泉の地續にして西南の一方面のみを残し、他三方の地續きは總て烏有に歸せるが、其の中間に介在せる、前記箕輪下と泉に亘る本牧電車線路以北に在る約三百戸は、風位の關係と破壊消防と其の中間を流る、溝渠の下水を利用して注水せるとに依り、延焼を免れたるものなり

罹災民の避難状況

全署部内山根岸、本牧方面には高地、山林、田野の多きと共に到る所に若干の空地あるを以て山手町の殆んき全部諏訪町、千代崎町、上野町の全部、北方町の大部分は焼失せりと雖、是等各町住民の避難は市内下町各方面の其れに比し、幾分安易なりしが爲、此の方面に於ては下町方面の如く焦屍の堆塚を見ることなかりき、今各避難場所及其の人員の概数を擧ぐれば左の如し、而して集團以外に各所の小面積の空地其の他に、三々伍々に散在せる少数のものに至りては、殆んき之を擧ぐるの煩に堪へず

山手町外人墓地内

三、〇〇〇名

全 町獨逸病院址

五〇〇

附近に延焼に際し他に移る

全 町山手公園内

三、〇〇〇

全 町二百二十五番地

二、五〇〇

全 町百六十二番地

八〇〇

山手町饅頭山

二、〇〇〇

北方町妙香寺山

一、〇〇〇

北方町太神宮山

一、〇〇〇

本牧町大澤谷戸

三、〇〇〇

本牧町十二天海岸

三、〇〇〇

全 町三溪園及

二、〇〇〇

其の附近

二、〇〇〇

根岸町鷺山

一五、〇〇〇

全 競馬場

一五、〇〇〇

計

四七、八〇〇

火災の状況

全署部内は山元町全部、根岸、本牧兩町の大部分、北方町の一部を残し他は悉く焼失せり而して發火及延焼の状況を記せば左の如し

(1)、先づ同署 附近より叙すれば震後間もなく、山手町四十五番地會社員英國人「バイヤス」方及全町五十二番地會社員「ミルラー」方より發火し其の附近一帯に延焼し

(2)、地藏坂 附近に於ては震後間もなく全町九番地旅館兼料理店「ホテル、テンブルコート」、全町十八番地英國領事「ヘーグ」方、二百十五番地銀行員英國人「テート」方より發火し、其の附近一帯に延焼し

(3)、同町、谷戸坂通俗稱見晴附近に於ては震後約五分にして二百四十五番地英國人「ソーン」方炊事用「ストーブ」より發火し、北進延焼して全町二百五十一番地屋上に至り焼止まり

(4)、元町谷戸橋附近に於ては全町一丁目一番地西山洋服店臺所及全町五番地洗濯業山下一郎方營業用竈より發火し、附近に延焼し

- (5) 山手町谷戸坂 附近に於ては震後五分にして、全町百七十二番地某方及百五十八番地米國人「ウィルソン」方より發火したるが他の家屋と距離ありたるため自然に消火し
- (6) 震後五分 にして千代崎町七番地蕎麥商西野善八方及本牧町字上臺三番地煎餅製造業若宮牧太郎方より發したる火は忽ち擴大して、千代崎町の全部上野町、北方町の大部を焼失して本牧町の一部に延焼し
- (7) 午後一時三十分 頃北方町七百九番地待合島崎方より發火したる火は、上野町電車停留所附近より北進して妙香寺山及根岸町の内字櫻道下に延焼し、電車線路以北を焼き南側に及ばずして止む
- (8) 本牧町、箕輪下 方面に於ては午後〇時三十分頃、全四百二十三番地小西きぬ方臺所より發火し、電車線路を越へて北方町方面に飛火し約二十戸を焼く
- (9) 全町池田 二千二百二十六番地湯屋植木正作方より發火し、附近四戸を焼き消止め同町字矢二千二百二十七番地藥種商近藤次郎方及全字二千六百二十三番地煎餅商永島與七方より發火せし火は、全町字原方面に延焼し、全字電車終點附近一圓を焼き
- (10) 震後五、六分 にして根岸町字猿田一千五百二十八番地魚商白川新太郎方より發火したるも、山元町巡查派出所詰巡查及附近住民にて之れを消止め
- (11) 全町字坂下 六百九十一番地松本某方より發火し、附近五十七戸を焼き風下の空地にて焼止まり
- (12) 全町芝生臺 二千二百六十一番地英國人「アールメン」方及全町仲尾二千八百九十一番地英國人「シヤ

「プ」方より發火し一戸建なりし爲他に延焼せず

第六節 神奈川警察署管内

震 前

全署部内は市の北部に位し子安町、神奈川町及青木町の中央を東より西へ貫通せる國道は、舊東海道の街道にして東に鶴見町、西に保土ヶ谷町を控へ、北は橋樹郡の南部に接す、神奈川町青木町は舊時の神奈川宿にして港北の繁榮地として殷賑を極め、建物の古態を帶び、商賈の店構への風杯何となく古驛の昔を忍ぶ佛の存するもありき

而して町の背後には高木山、岩崎山、高島山及浦島山等あり、何れも高臺にして高島山下には青木臺あり、共に、市内及港内を瞰下し、眺望の佳絶を以て聞へ、東海道線鐵道及京濱電車は東より來りて町背を貫き、高木山と高島山との中間に出て、南に走り、横濱線(八王子行)は東神奈川より岐れて浦島山麓を廻り北へ向ひ貨物線は東より來り町南埋立地を通り高島町貨物驛へ向ひ、又市内電車は南より來り青木町に於て京濱電車に接觸す、停車場としては東神奈川、神奈川、貨物驛海神奈川の三驛并に京濱電車の神奈川終點驛等あり

埋立地一帯及神奈川町の北部并に子安町は工場地帯にして、此の方面には大小工場多數あり、淺野船渠、横濱鐵工所、横濱製鋼株式會社、日本人造肥料株式會社、浦賀船渠株式會社横濱工場、日本「リネット」株式會社